

鹿角市文化財調査資料72

特別史跡
大湯環状列石

発掘調査報告書(19)

2003-3

秋田県鹿角市教育委員会



P L 1 大湯環状列石・調査区全景

序

特別史跡大湯環状列石は、昭和6年の発見以来、環状列石のもつ特異な形態が縄文時代の精神文化を解く大きな手がかりとなるべく注目され、これまでに研究者や遺跡を訪れる多くの方々を魅了してきました。

鹿角市教育委員会では、これまでの地道な調査と保護活動を行ってこられた先人の思いを胸に、昭和59年より本格的な発掘調査を行ってまいりました。「光陰矢のごとし」と申しますが、以来、調査も早19年目を迎え、遺跡保存を最優先とした調査へと移行している中で、平成15年度で調査も20年目といういわば成人式を迎えようとしております。この節目の年に大湯環状列石の調査も今、生まれ変わろうとし、遺跡解明へのより貴重な資料収集を行っていく方針であります。

本報告書は、このことを踏まえて行った調査成果をまとめたものであり、縄文文化の研究、文化財保存の資料としてご活用して頂ければ幸いに存じます。

終わりに、発掘調査ならびに環境整備に際し、多大なご協力とご指導を賜りました文化庁・秋田県教育委員会・関係機関各位に心から感謝申し上げますとともに、今後の調査につきましても一層のご指導を賜りますようお願い申し上げます。

平成15年3月

鹿角市教育委員会

教育長 織田育生

本文目次

序	
例言	
本文目次	
図版・写真図版・表目次	
第I章 遺跡の環境	
1. 遺跡の位置と立地	1
2. 遺跡の層序と地形	3
第II章 調査の概要	
1. 調査要項	9
2. 調査の方法	10
3. 調査の経過	10
第III章 D ₁ 区縄文時代	
検出遺構と出土遺物	
1. 竪穴住居跡	13
2. 柱穴状ピット	25
3. 焼土遺構	30
4. 土坑	35
(1) Tピット	35
(2) 土坑	35
(3) フラスコ状土坑	36
5. 礫群	51
6. 遺構外出土遺物	53
(1) 土器	53
(2) 石器	74
(3) 土製品	80
(4) 石製品	84

第IV章 G ₁ 区縄文時代	
検出遺構と出土遺物	
1. 焼土遺構	85
2. 土坑	86
(1) Tピット	86
(2) フラスコ状土坑	88
3. 遺構外出土遺物	89
(1) 土器	89
(2) 石器	92
(3) 土製品	94
(4) 石製品	95

第V章 歴史時代の遺構	
1. 竪穴住居跡・土坑	96
2. 道路状遺構	99
3. 遺構外出土遺物	100

第VI章 自然科学的調査	101
調査区出土土器破片及び	
史跡出土粘土の胎土分析	

第VII章 調査のまとめ	103
参考文献	106
報告書抄録	109
写真図版	110

図版・写真図版・表目次

図 版 目 次		拓影図(2) … 43	
第1図	D,区第1号竪穴住居跡実測図 …… 1	第35図	D,区フラスコ状土坑出土土器
第2図	D,区調査区位置図 …… 2		拓影図(3) …… 44
第3図	D,区基本層序 …… 5	第36図	D,区フラスコ状土坑出土土器
第4図	G,区基本層序(1) …… 6		拓影図(4) …… 45
第5図	G,区基本層序(2) …… 7	第37図	D,区フラスコ状土坑出土土器
第6図	G,区地形復元図 …… 8		拓影図(5) …… 46
第7図	D,区遺構配置図 …… 11	第38図	D,区フラスコ状土坑出土遺物
第8図	D,区第1号竪穴住居跡実測図 …… 14		実測図(1) …… 47
第9図	D,区第2号竪穴住居跡実測図 …… 15	第39図	D,区フラスコ状土坑出土遺物
第10図	D,区第3号竪穴住居跡実測図 …… 17		実測図(2) …… 48
第11図	D,区第4号竪穴住居跡実測図 …… 18	第40図	D,区フラスコ状土坑出土遺物
第12図	D,区第5号竪穴住居跡実測図 …… 20		実測図(3) …… 49
第13図	D,区第6号竪穴住居跡実測図 …… 21	第41図	D,区フラスコ状土坑出土遺物
第14図	D,区第7号竪穴住居跡実測図 …… 22		実測図(4) …… 50
第15図	D,区第8号竪穴住居跡実測図 …… 23	第42図	D,区フラスコ状土坑出土遺物
第16図	D,区第2号竪穴住居跡出土土器		実測図(5) …… 51
	実測図(1) …… 24	第43図	D,区竊群実測図(1) …… 52
第17図	D,区第5号、7号、8号竪穴住居	第44図	D,区竊群実測図(2) …… 53
	跡出土土器実測図(2) …… 25	第45図	D,区土器片出土分布状況 …… 54
第18図	D,区竪穴住居跡出土土器拓影図 …… 26	第46図	D,区復元可能土器出土分布状況 …… 55
第19図	D,区竪穴住居跡出土遺物実測図(1) …… 27	第47図	D,区遺構外出土土器実測図(1) …… 61
第20図	D,区竪穴住居跡出土遺物実測図(2) …… 28	第48図	D,区遺構外出土土器実測図(2) …… 62
第21図	D,区竪穴住居跡出土遺物実測図(3) …… 29	第49図	D,区遺構外出土土器実測図(3) …… 63
第22図	D,区竪穴住居跡出土遺物実測図(4) …… 30	第50図	D,区遺構外出土土器拓影図(1) …… 65
第23図	D,区柱穴状ピット実測図 …… 30	第51図	D,区遺構外出土土器拓影図(2) …… 66
第24図	D,区柱穴状ピット断面図(1) …… 31	第52図	D,区遺構外出土土器拓影図(3) …… 67
第25図	D,区柱穴状ピット断面図(2) …… 32	第53図	D,区遺構外出土土器拓影図(4) …… 68
第26図	D,区焼土遺構実測図 …… 34	第54図	D,区遺構外出土土器拓影図(5) …… 69
第27図	D,区T-ピット実測図 …… 35	第55図	D,区遺構外出土土器拓影図(6) …… 70
第28図	D,区土坑実測図 …… 36	第56図	D,区遺構外出土土器拓影図(7) …… 71
第29図	D,区第1号、2号、4号、5号フラス	第57図	D,区遺構外出土土器拓影図(8) …… 72
	コ状土坑、第3号土坑実測図 …… 37	第58図	D,区遺構外出土土器拓影図(9) …… 73
第30図	D,区フラスコ状土坑実測図 …… 39	第59図	D,区土器出土分布状況 …… 75
第31図	D,区フラスコ状土坑出土土器	第60図	D,区遺構外出土土器実測図(1) …… 77
	実測図(1) …… 40	第61図	D,区遺構外出土土器実測図(2) …… 78
第32図	D,区フラスコ状土坑出土土器	第62図	D,区遺構外出土土器実測図(3) …… 79
	実測図(2) …… 41	第63図	D,区土製品出土分布状況 …… 80
第33図	D,区フラスコ状土坑出土土器	第64図	D,区遺構外出土土製品実測図 …… 81
	拓影図(1) …… 42	第65図	D,区遺構外出土土器片利用土製品
第34図	D,区フラスコ状土坑出土土器		拓影図 …… 82

第66図	D ₂ 区遺構外出土土器片利用土製品 拓影図 … 83
第67図	D ₂ 区石製品出土分布状況 …… 84
第68図	D ₂ 区遺構外出土土製品実測図 …… 84
第69図	G ₂ 区焼土遺構実測図 …… 85
第70図	G ₂ 区T-ビット実測図 …… 87
第71図	G ₂ 区プラスチック状土坑実測図 …… 88
第72図	G ₂ 区遺構外出土土器拓影図 …… 91
第73図	G ₂ 区遺構外出土土器実測図 …… 93

第74図	G ₂ 区遺構外出土土製品実測図 …… 95
第75図	D ₂ 区第10号竪穴住居跡実測図 …… 96
第76図	D ₂ 区第11号竪穴住居跡実測図 …… 97
第77図	D ₂ 区第12号竪穴住居跡実測図 …… 98
第78図	D ₂ 区第13号、14号竪穴住居跡実測図 …… 99
第79図	G ₂ 区第1号、2号溝状遺構 実測図 … 100
第80図	D ₂ 区遺構外出土土器実測図 …… 100

写真図版目次

PL 1	大湯環状列石調査区全景
PL 2	万座環状列石、G ₂ 区、D ₂ 区全景 … 110
PL 3	G ₂ 区、D ₂ 区全景 …… 111
PL 4	D ₂ 区遺構確認状況 …… 112
PL 5	D ₂ 区遺構確認状況 …… 113
PL 6	D ₂ 区Aトレンチ、第1・4号 竪穴住居跡 … 114
PL 7	D ₂ 区Cトレンチ、第2号竪穴住居跡、 土坑遺構確認状況 …… 115
PL 8	D ₂ 区Iトレンチ、第3・7号 竪穴住居跡 … 116
PL 9	D ₂ 区Cトレンチ、プラスチック状土坑、 竪穴住居跡、作業風景、現地説明会 風景 …… 117
PL 10	D ₂ 区第6号竪穴住居跡遺物出土状況、 実測状況 …… 118
PL 11	D ₂ 区第2号竪穴住居跡出土土器(1) … 119
PL 12	D ₂ 区第1・2号竪穴住居跡出土土器 … 120
PL 13	D ₂ 区第2号竪穴住居跡出土土器 …… 121
PL 14	D ₂ 区第3・4・5号竪穴住居跡出土土器 … 122
PL 15	D ₂ 区第2・5号竪穴住居跡出土土器、石器 … 123
PL 16	D ₂ 区第1・2号竪穴住居跡出土土器 …… 124
PL 17	D ₂ 区第2号竪穴住居跡、第1号土坑、 遺構内出土土器(2) …… 125
PL 18	D ₂ 区第2号土坑出土土器(4) …… 126
PL 19	D ₂ 区第2号土坑出土土器(3) …… 127
PL 20	D ₂ 区第1号土坑出土土器 …… 128
PL 21	D ₂ 区第1号土坑出土土器、石器 …… 129

PL 22	D ₂ 区第2号土坑出土土器 …… 130
PL 23	D ₂ 区第1号土坑出土土器 …… 131
PL 24	D ₂ 区第1・2号土坑出土土器 …… 132
PL 25	D ₂ 区第2号土坑、遺構外出土土器 …… 133
PL 26	D ₂ 区第2号土坑、遺構内出土土器、 石器、土製品 … 134
PL 27	D ₂ 区第2・4号土坑、 第6・7号プラスチック状土坑出土土器 …… 135
PL 28	D ₂ 区第2号土坑出土石器、土製品 …… 136
PL 29	D ₂ 区土坑出土土製品、石製品 …… 137
PL 30	D ₂ 区遺構外出土土器 …… 138
PL 31	D ₂ 区遺構外焼土跡出土土器 …… 139
PL 32	D ₂ 区遺構外出土土器(1) …… 140
PL 33	D ₂ 区遺構外出土土器(2) …… 141
PL 34	D ₂ 区遺構外出土土器(3) …… 142
PL 35	D ₂ 区遺構外出土土器(4) …… 143
PL 36	D ₂ 区遺構外出土土器(5) …… 144
PL 37	D ₂ 区遺構外出土土器(6) …… 145
PL 38	D ₂ 区遺構外出土土器(7) …… 146
PL 39	D ₂ 区遺構外出土土器(8) …… 147
PL 40	D ₂ 区遺構外出土土器(9) …… 148
PL 41	D ₂ 区遺構外出土土製品、石製品 …… 149
PL 42	D ₂ 区遺構外出土土器片利用土製品 …… 150
PL 43	G ₂ 区プラスチック状土坑、T-ビット …… 151
PL 44	G ₂ 区遺構確認状況、T-ビット …… 152
PL 45	G ₂ 区遺構確認状況 …… 153
PL 46	G ₂ 区遺構外出土土器 …… 154
PL 47	G ₂ 区遺構外出土、石器、土製品 …… 155

表 目 次

第1表	D ₂ 区柱穴状ビット一覧表 …… 33
-----	---------------------------------

第2表	遺構外出土土器 (復元、図化土器)
-----	-------------------

第I章 遺跡の環境

1. 遺跡の位置と立地 (第1図, 2図)

鹿角市は秋田県の北東部に位置し、豊かな自然を有する十和田八幡平国立公園の南玄関口として、数多くの人々に親しまれてきた。東方の奥羽山脈、西方の高森山地と山々に囲まれた美しい鹿角盆地を一望すると、至る所に段丘地形を有する複雑な地形が形成されていることがわかる。

これらの段丘は、十和田湖の度重なる火山活動と鹿角盆地のほぼ中央を流れる米代川を本流とする多くの支流による浸食によって形成されたもので、沖積面との比高差30m程の舌状台地を作り出している。この舌状台地上の至る所に縄文時代をはじめとする多くの遺跡が点在し、その数は現在416ヵ所を数える。

特別史跡大湯環状列石は、鹿角市の北東部に位置し、大湯川と豊真木沢川の浸食によってつくり出された全長5.6km、幅0.5~1.0km、標高150m~190mの舌状台地、通称「中通台地」のほぼ中央部に立地している。

遺跡に立つと、鹿角盆地を取り囲む山並みを四方に見渡すことができ、自然の営みや季節の



第1図 遺跡の位置と立地

0 2.5km



圖 2 建築區位圖

移り変わり、天体の動き等が一目で感じとることができる。また、遺跡ののる台地斜面の至るところには今でも豊かな水量を保つ湧き水が点在し、夏から秋にかけて、肥沃な黒土の栄養分を十分に吸い上げたクリやツノハシバミといった堅果類の甘い香りが遺跡全体を覆う。台地西側下には豊かな川の幸や白鳥等の渡り鳥が飛来する大湯川が流れるなど、縄文時代の景観をそのまま体感することができる。

大湯環状列石は、鹿角市十和田大湯万座、字野中堂、字一本木後口に所在し、JR東日本鉄道花輪線・十和田南駅の北東3.5km、東北縦貫自動車道十和田ICの北東3.7km、北緯40度16分20秒、東経140度48分49秒の地点である。

発掘調査区は、万座環状列石周辺西側地区（G区）及び西側台地縁辺部（D区）であり、史跡の公有化以前は果樹園、雑種地であった。（花 海）

2. 遺跡の層序と地形

遺跡の層序（第3図）

各調査地の基本層序は下記のとおりである。

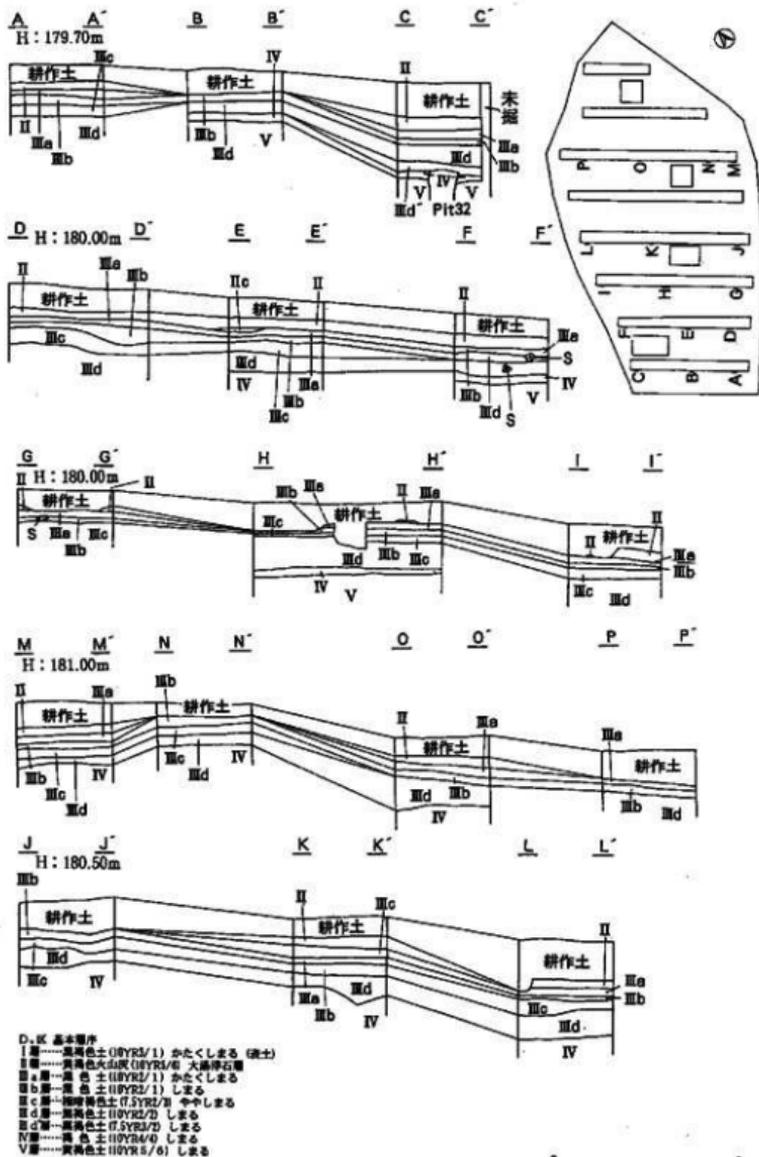
第Ⅰ層は、大湯浮石層までの地積層で、6cm～50cmの厚さで各調査区に堆積する耕作土である。第Ⅱ層は、大湯浮石層（十和田a降下火山灰）で各調査区にみられるが、後世の攪乱により消失している地域もある。色調や粒子の粗細によって分層することが出来る。Ⅱa層は粒子の極めて細かな火山灰層、Ⅱb層は粒径0.5cm～4cmの明黄褐色の浮石（軽石）層である。層の厚さはⅡa層で平均4cm程、Ⅱb層で平均10cm程を測る。なお、Ⅱ層は一括図化した。

第Ⅲ層は、大湯浮石層から地山漸位層（第Ⅳ層）までの地積層で、色調・堅さ・混入物の量によって4層に分層することができる。Ⅲa層は混入物をほとんど含まない黒色土層で、堅く締まっている。Ⅲb層も黒色土層であるが、堅さや粗密度からⅢa層とは区別される。Ⅲa、Ⅲb層ともに遺物包含層である。Ⅲc層は、極暗褐色土層でチョコレート色に近い色調である。縄文時代後期中葉の遺構である環状配石遺構は本層が構築面である。Ⅲd層は、地山粒を少量含んだ黒褐色土層で、遺物包含層及び縄文時代後期前葉の遺構確認面である。万座・野中堂環状列石は本層が構築面である。また本調査地では、これまで確認されてきたⅢc層よりⅢd層に近いがⅢd層とは異なる暗褐色のⅢd'層が広範囲にみられ、遺構確認に苦慮した。Ⅲd'層は、これまでの調査でも確認されてきたが、特に遺構分布域に多くみられる傾向がある。遺構構築との関連が示唆される層である可能性がある。

第Ⅳ層は、地山直上の暗褐色土層で地山ブロックを多量に含み、本調査によって確認された大半の竪穴住居跡の床面が本層となっている。第Ⅴ層は、申ヶ野火山灰と呼ばれる黄褐色土層で、十和田火山の火砕流にあたる。Tピット、フラスコ状土坑等の遺構の掘り込みはすべてこ

の層まで達している。

調査地は全体的にももとは起伏に富んでいたものと判断され、縄文時代の遺構構築方法は各遺構の性格・用途にあわせた地形利用をしていたものと思われる。

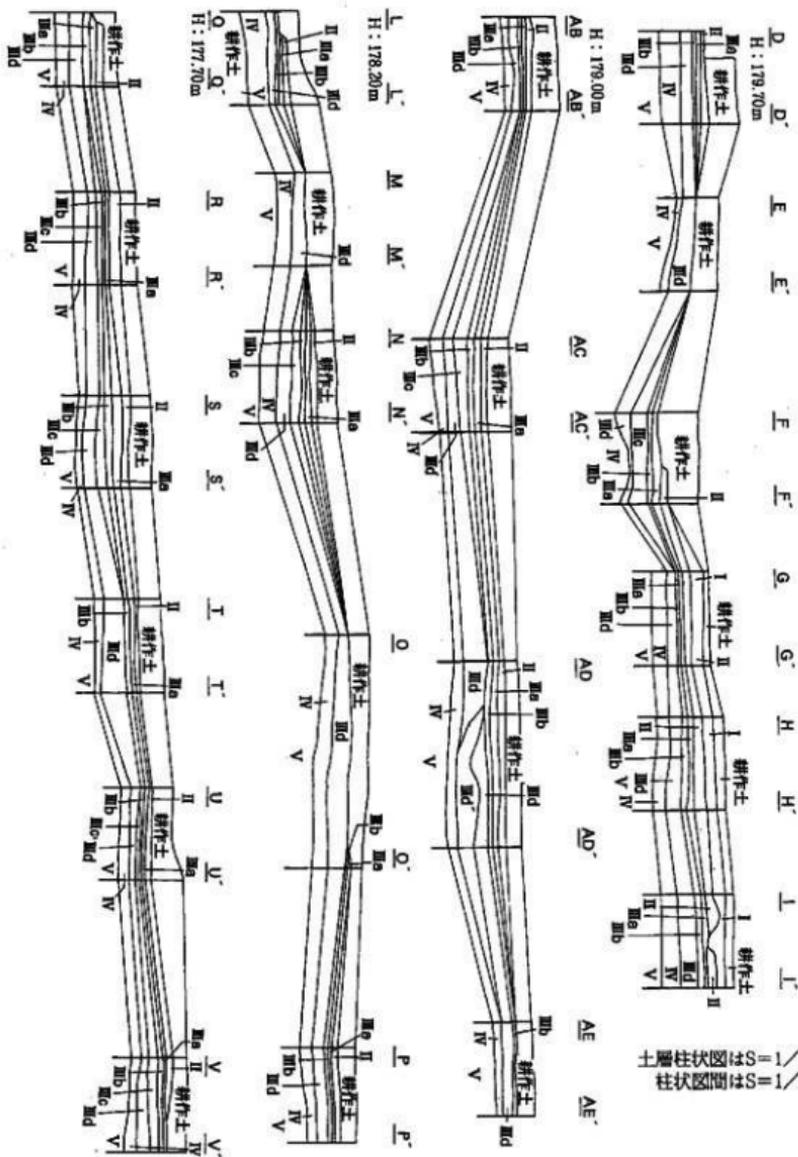


第3図 D, K区基本層序

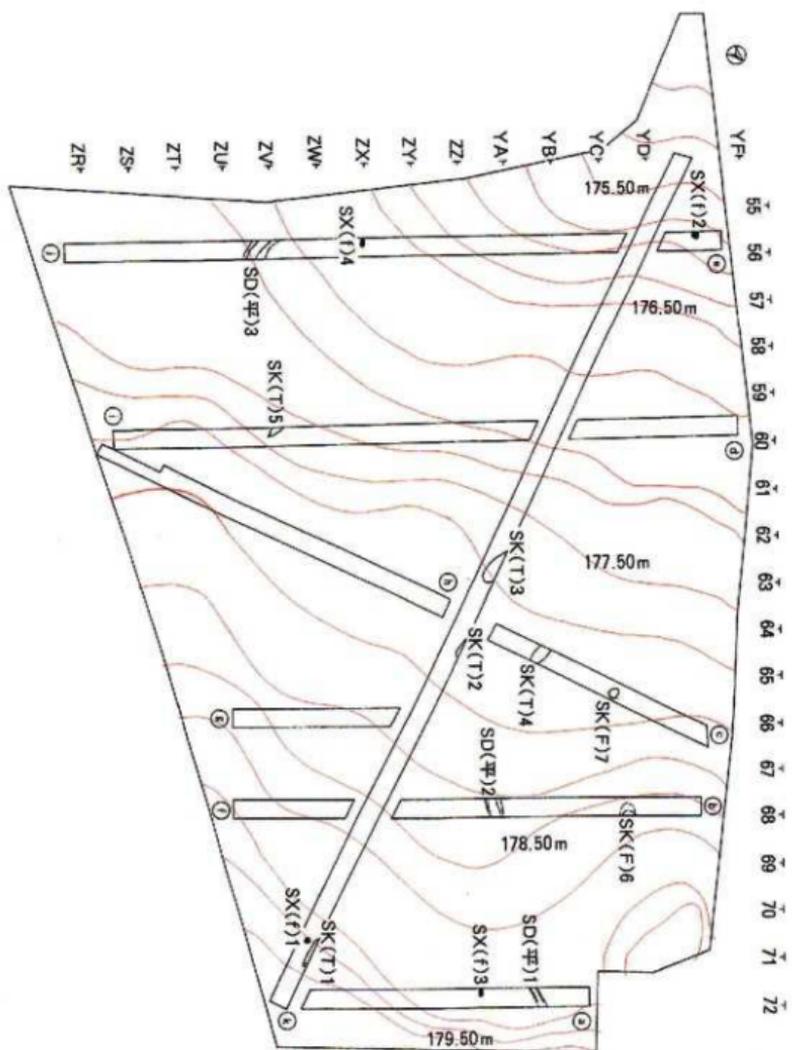
0 2m

609 / 1 11 S2 柱状图
 1 / 11 S2 柱状图

1m



(2) 此圖林區 G 區圖



第6图 G₂区地形復元图

0 20m

第Ⅱ章 調査の概要

1. 調査要項

1. 遺跡名 特別史跡大湯環状列石 (遺跡番号：123)
2. 調査目的 万座環状列石周辺南西側地区及び西側台地縁辺部の遺構・遺物分布状況及び旧地形の把握を目的とした。
3. 調査地 鹿角市十和田大湯字万座26番地ほか (調査地名：G₁区、D₁区)
4. 発掘調査面積 G₁区・785㎡ D₁区・760㎡ 合計 1,545㎡
5. 調査期間 発掘調査 平成14年5月21日～平成14年11月6日
埋め戻し作業 平成14年11月29日
整理・報告書作成 平成14年10月1日～平成15年3月31日
6. 調査主体者 鹿角市教育委員会
7. 調査担当者 鹿角市出土文化財管理センター
主任 花 海 義 人
8. 調査参加者 調査指導 武 藤 祐 浩 (秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室
学芸主事)

調査員 鎌 田 健 一 (秋田県立小坂高等学校 教諭)

佐 藤 樹 (秋田県文化財保護管理指導員)

調査補助員 松田 隆史、柳沢 和仁、村木 一裕、村木 弘一

発掘調査作業員

三浦 茂雄、大森 勝次、高嶋 剛、宮沢 カヨ、柳沢 千晶

木村 キン、柳沢恵美子、苗代沢ノブ、鬼沢サツ子、柳沢 ミネ

木村千鶴江、柳館 愛子、安村 ヨコ、児玉 フヂ、高村 サツ

田中美千栄、田中 栄子、成田由紀子、関 イサ、宮沢トミエ

柳沢 勝江、奈良 公一、赤坂 惇一

整理作業員

福島美紀子、黒沢 文子、柳沢 千晶、田中 栄子、高嶋 剛

9. 事務局 鹿角市教育委員会 生涯学習課

課 長 成 田 喜代美

班 長 秋 元 信 夫

主 事 上 田 学

10. 協力機関 文化庁文化財部記念物課、独立行政法人奈良文化財研究所

2. 調査の方法

調査区内のグリッドについては、第1次発掘調査以来のN-49°-Wを基準線とし、万座環状列石内に打設した基準杭より延長し、5m単位の方眼を設定した。グリッドの名称は、アルファベットと算用数字の組合せとし、西側の杭をもってグリッド名とした。

調査区域については、遺跡保存を熟慮しトレンチ掘調査を主体とし、一部重要箇所については面的に調査した。

Ⅱ層（大湯浮石層・十和田a下降火山灰）から遺物包含層については人力により分層発掘とし、極力上層での遺構の確認に努めたが、一部第Ⅳ層または第Ⅴ層まで掘り下げ、遺構を確認した地域もある。

確認された遺構については、発見順に番号を付したが精査の結果遺構として認定できなかったものもあり欠番としている。遺構の精査は、後々に調査データを残すこと、また遺構の保護を考慮したことから、半鍬及び土層観察用ベルトを多用するに留めた。

また、基本層序についても土層観察用ベルトを残すことに努めた。

遺構の実測図の作成については、グリッド杭を利用し、簡易遣り方測量を行い、縮尺1/20・1/10で図化した。

遺物の取り上げについては、やむをえない場合を除き出土地点・出土層位・出土状況を図化し取り上げた。なお、完形土器、復元可能土器については出土層位・出土地点・出土状況を観察し、写真撮影後、収納した。

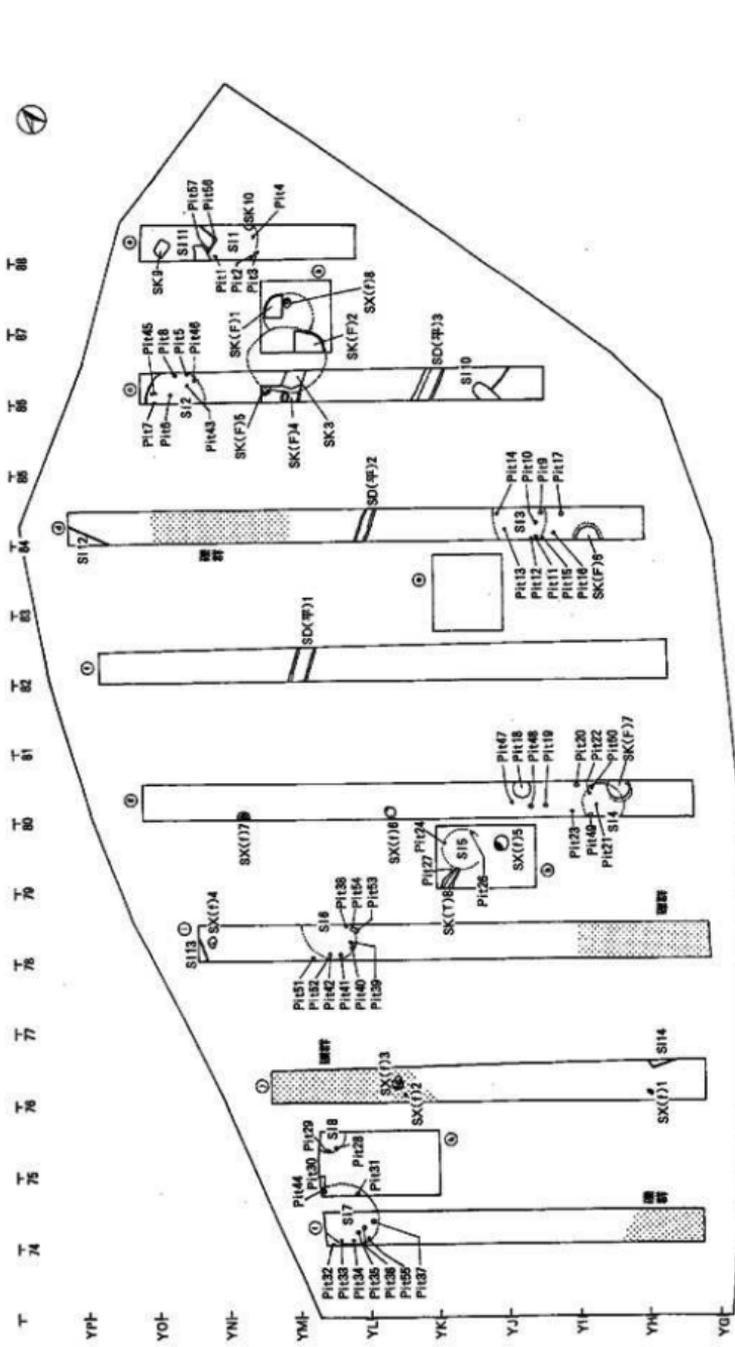
写真撮影については、小型一眼レフカメラ2台を使用し、調査の各段階ごとにカラー・リバーサルフィルムに収めた。

(花 海)

3. 調査の経過

特別史跡大湯環状列石第19次発掘調査は平成14年5月21日より開始し、現地でのすべての調査を終えたのは平成14年11月6日である。

5月21日、調査作業員に事務連絡並びに調査目的・方法を説明後、G₃区のⅡ層面での遺構確認作業を開始。その後Ⅱ層除去作業に移行する。事前の調査準備に十分な時間をかけたため、スムーズに作業に取りかかることができた。5月29日にはⅡ層面除去作業がほぼ終了し、道路状遺構を検出する。6月5日にはⅢa～b層の除去作業がほぼ終了した。6月10日にはⅢd層～Ⅳ層面までの除去作業がほぼ終了し、Tピット、フラスコ状土坑が検出しはじめる。調査区



第7图 D1区详细平面图

全体の遺構確認終了後、遺構精査へと移行、並行して遺物取り上げ・記録を行う。G₃区と並行して航空撮影の準備のため野中堂環状列石内の配石表出作業も行う。7月中旬頃にはG₃区の調査がほぼ終了したことから、D₃区の調査準備に移行する。調査は例年にない雨天の多さにやや遅れ気味となる。7月24日からいよいよD₃区の調査開始。8月2日には雨天のため延期していたG₃区の全体写真撮影を行い、G₃区の調査を終了した。8月5日にはⅡ層除去作業がほぼ終了し、歴史時代の竪穴住居跡が発見される。竪穴住居跡1基の精査を行う。8月中旬には調査地南部のⅢa～b層面の除去作業がほぼ終了し、遺物が出土し始める。並行して遺物取り上げ・記録作業を行う。9月に入ると、ようやく気候が安定し、作業もはかどる。9月中旬にはⅢa～b層面の除去作業がほぼ終了し、数多くの遺物が出土し始めると共に、焼土遺構が発見される。10月に入るとまたもや雨天に見舞われ、作業がやや遅れた。10月5日にはⅢd層面での遺構確認をはじめ、遺構が少ないことから念のためⅣ層面まで掘り下げることにした。中旬頃には基本層序の浅い区域から炉跡が次々と発見され、予想外の展開に現場が騒然となる。このため、調査区域を若干広げることとした。10月20日にはD₃区に住居跡が集中することが判明し、同時にTビット、フラスコ状土杭を検出、夥しい数の遺構が出土した。このため、調査期間が延期となった。今年は例年になく早い時期からの降雪で調査は厳しさを増した。調査が終了したのは、11月6日であった。11月7～8日、特別史跡大湯環状列石環境整備検討委員会が開催され、現地視察、調査指導があった。翌9日には現地説明会を開催、寒空を吹き飛ばすかのように、約70人余りの考古学ファンの熱気に調査地が包まれた。 (花 海)

第三章 D₉区縄文時代検出遺構と出土遺物

D₉区において、確認された縄文時代の遺構は竪穴住居跡8軒、柱穴状ピット4個、焼土遺構8基、Tピット1基、フラスコ状土坑6基、土坑2基、礫群である。また、遺構内・外より復元可能土器13個体、縄文土器破片5,765点、石器793点、土製品61点、石製品17点の出土があった。

1. 竪穴住居跡

第1号竪穴住居跡（第8図、18図1～6、19図1～12）

（遺構の位置と確認）調査区北東端のY₀・Y_N-88グリッドに位置する。IV層上面でプランを確認したが、基本層序を含む土層断面から、本遺構の構築面は、Ⅲd層上面であることが判明している。

（重複関係）第10号土坑、第11号竪穴住居跡（歴史時代）と重複し、新旧関係は（旧）SK10→本遺構→S111（新）となる。

（平面形・規模）大部分が未発掘のため詳細は不明であるが、予想される規模・平面形は径3.6mの円形を呈するものと考えられる。

（堆積土）1ブロックの人為堆積である。

（床面・壁）IV層を若干掘り込み、床面としている。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高は40cmを測る。

（柱穴）ピット1、2、4を主柱穴とする円形の柱配置である。

（炉）ほぼ中央部に位置する。床面を10cm程掘り窪め、20～40cm大の川原石を円形に設置している。炉の規模は70cm×70cmで、炉を構成する川原石は、強い焼成を受け亀裂が著しい。

（出土遺物）覆土中より縄文時代後期前葉の土器破片55点、石礫2点、磨石1点、凹石5点、敲石4点、剥片2点、板状石製品（凝灰質泥岩）1点が出土した。

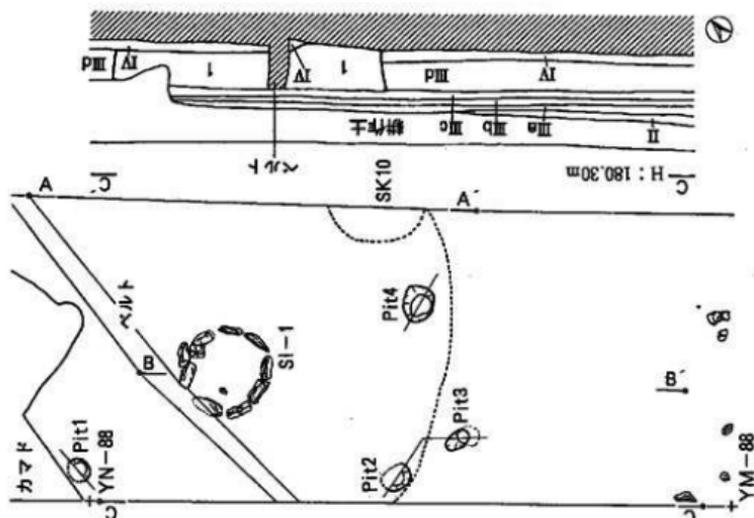
（構築時期）基本層序を含む断面から構築時期は、縄文時代後期前葉と判断される。

第2号竪穴住居跡（第9図、16図、18～20図）

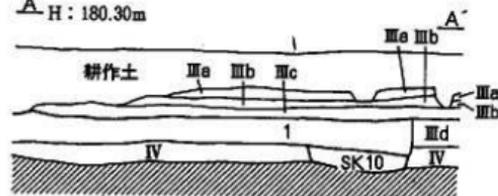
（遺構の位置と確認）調査区北端のY₀・Y_P-86グリッドに位置する。IV層上面でプランを確認したが、基本層序を含む土層断面から、本遺構の構築面は、Ⅲd層上面であることが判明している。

（重複関係）本遺構と重複する遺構はない。

（平面形・規模）半部が未発掘のため詳細は不明であるが、予想される規模・平面形は径4.2mの円形を呈するものと考えられる。

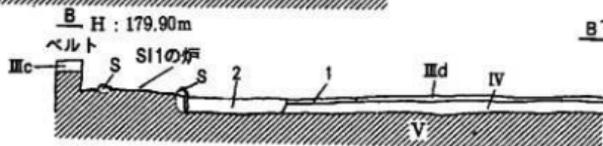


A H: 180.30m



- SI1
1. 暗褐色土 (PYR2/3)
 堆土が少量、焼土が少量混入、しまる
 2. SI1の炉の跡(土)
 暗褐色土 (PYR2/3)
 堆土が少量混入、しまる
 (一帯かたくしまる)

B H: 179.90m



第8図 D区第1号竪穴住居跡実測図

0 2m

〈堆積土〉5ブロックの人為堆積である。1層は本遺構を覆うような状況で確認された。

〈床面・壁〉IV層を若干掘り込み、V層面を床面としている。壁はやや緩やかに立ち上がり、西側壁高は48cm、北側壁高は42cmを測る。

〈柱穴〉ピット5、7、8、43~46を主柱穴とする円形の柱配置である。

〈炉〉中央部より南寄りに位置する。床面直上に、10~23cm大の川原石を方形に設置している。炉の規模は60cm×70cmで、炉を構成する川原石は、強い焼成を受け亀裂が著しい。炉内に

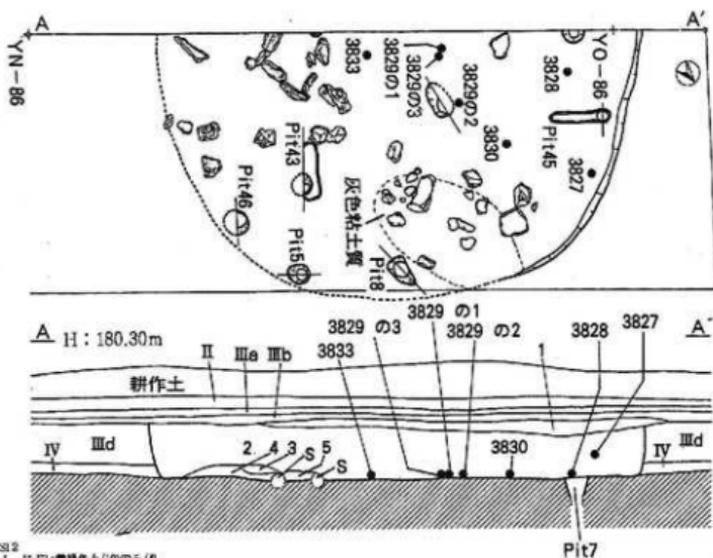
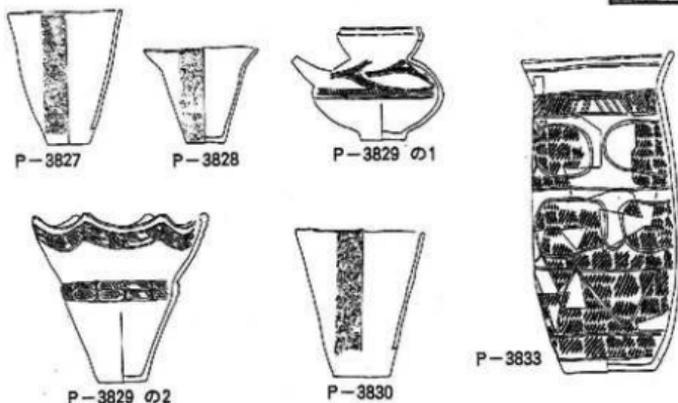


図2

1. 濃い黄褐色土 (IVR 5/6)
2. 灰山ブロックが多量、粘土粒少量混入、しまる
3. 黒褐色土 (IVR 2/2) 灰山ブロック粒少量混入、しまる
4. 黄褐色土 (IVR 2/2) 粘土粒少量混入、しまる
5. 淡黄褐色土 (IVR 8/8) 粘土



S=任意

第9図 D区第2号竪穴住居跡実測図 P-3829の3

最大厚8cmの焼土が、また、炉付近に最大厚14cmの焼土が散在していた。なお、北東部床面に
は灰状の粘質土が確認されている。

(出土遺物) 床直より復元可能土器6点、土器破片25点、凹石7点、覆土中より土器破片528
点、石鏃1点、石錐1点、石匙1点(破損品)、搔器5点、磨石2点、凹石22点、敲石5点、
石皿2点、剥片36点、土器破片利用土製品2点が出土した。第16図1、2、3、4、5、6、
7は、床直から出土したものである。1は胴部下半までL縄文が施文されている深鉢形土器で、
器高は推定31.8cm、口径は28.0cmを測り、色調はにぶい赤褐色である。2は「アサガオ状」を
呈し、口縁部がキャリパー状に立ち上がる深鉢形土器で、胴部全体にLR縄文が施文される。
器高は20.6cm、口径は24.5cm、底径は8.0cmを測り、色調はにぶい黄橙である。3は深鉢形土
器で、器面全体にRL縄文が施文されている。器高は28.8cm、口径は24.7cmを測り、色調は浅
黄橙である。4は底部付近に孔を有する円筒状の有孔土器で、口縁部から底部にかけて横位方
向の沈線による区画がなされ、上位には沈線間に斜状及びV字状の沈線文が、中位沈線間には
隅丸形状の沈線文、また、下位は三角形状の沈線文がそれぞれ施文され、沈線間にはLR縄
文による磨消縄文が展開される。器高は34.3cm、口径は16.5cm、底径は10.0cmを測り、色調は
黒褐色である。5は注口土器で、注口部は破損している。無文研磨された器面には沈線による
三角文が幾何学的に施文され、沈線間には短刻線が充填される。器高は12.2cm、口径は8.3cm、
底径は4.7cmを測り、色調は黒褐色である。6は山形口縁の深鉢形土器で、口縁部内側はやや
肥厚となり、山形状の口唇部には刻目が施されている。口縁部及び胴部には沈線文による2段
の楕円形文が横位に連結し、沈線間には糸の細かいRL縄文が施文されている。器高は17.2cm、
口径は18.8cm、底径は7.2cmを測り、色調は黒褐色である。PL11-7は破損品であるが、山形
状口縁の壺形土器と考えられる。口縁部に入組み風の隆帯が付加され、胴部には沈線文による
クランク状文が施文され、沈線間には短刻線が充填されている。口縁部口径は12.5cm、口頸部
径は7.0cmを測り、色調は暗褐色である。

(構築時期) 構築時期は床直出土遺物から縄文時代後期中葉と考えられる。

第3号壺穴住居跡(第10図、18図、21図)

(遺構の位置と確認) 調査区東部のYK・YJ-84グリッドに位置する。IV層上面でプラン
を確認したが、基本層序を含む土層断面から、本遺構の構築面は、Ⅲd層上面であることが判
明している。

(重複関係) 本遺構と重複する遺構はない。

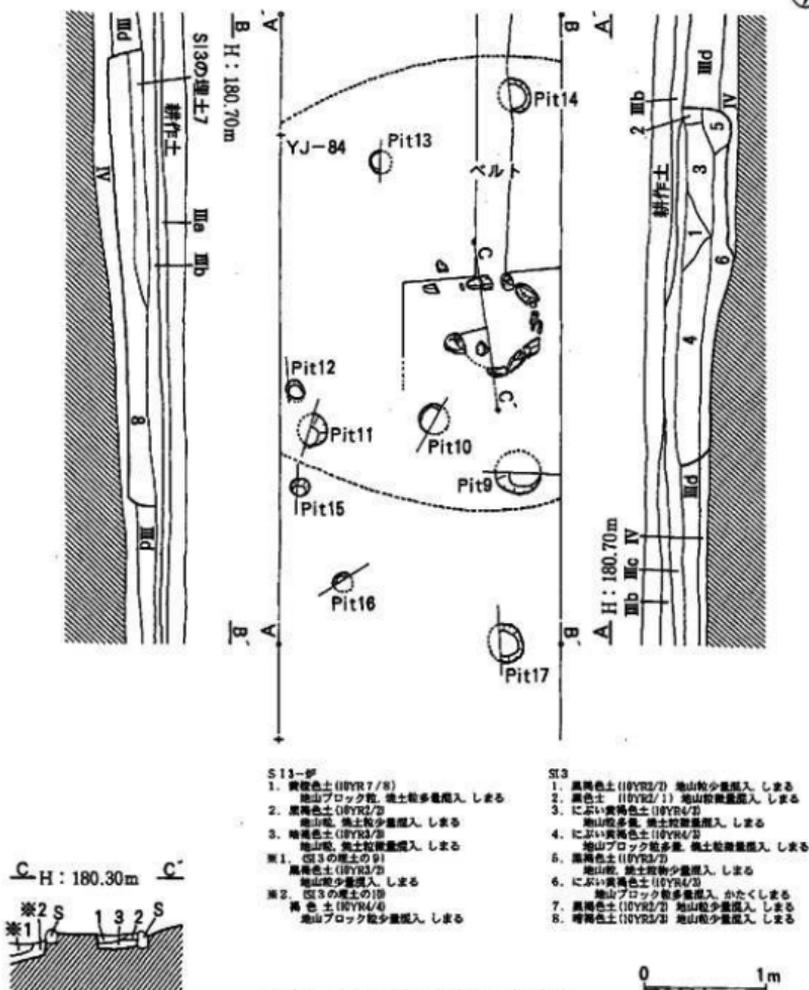
(平面形・規模) 大部分が未発掘のため詳細は不明であるが、予想される規模・平面形は径
3.7mの円形を呈するものと考えられる。

(堆積土) 6ブロックの人為堆積である。

〈床面・壁〉IV層を若干掘り込み、床面としている。床面北側では、貼床が確認された。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高は東側で24cm、北側で40cmを測る。

〈柱穴〉ピット9、10、11、12、13、14を支柱穴とする。

〈炉〉中央部やや東寄りに位置する。床面を10cm程掘窪め、10~40cm大の川原石を円形に設

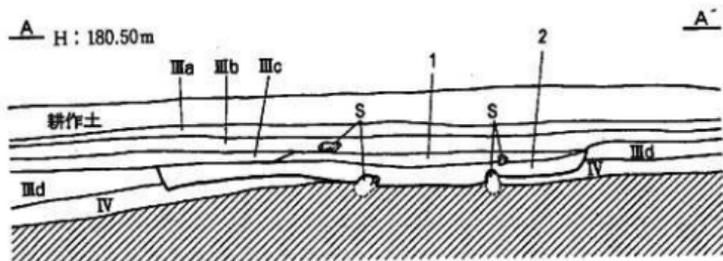
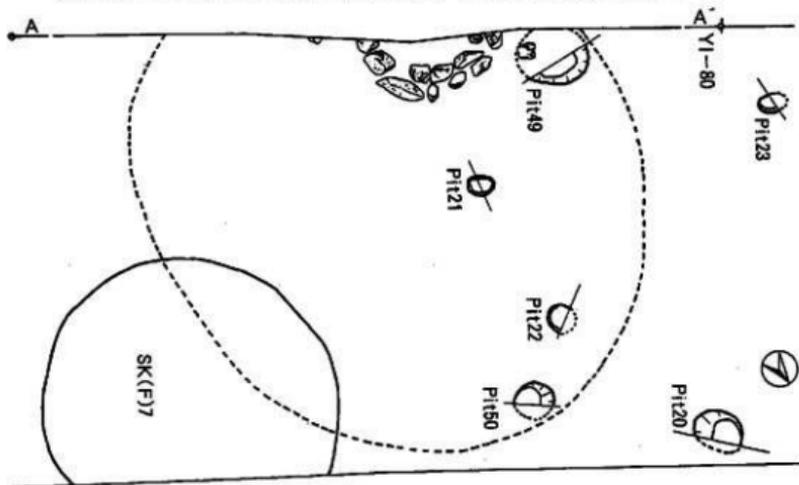


第10図 D区第3号竪穴住居跡実測図

置している。炉の規模は80cm×80cmで、炉を構成する川原石は、強い焼成を受け亀裂が著しい、炉内に最大厚12cmの焼土が確認された。

〈出土遺物〉 覆土中より縄文時代後期前葉の土器破片1点、凹石4点が出土した。

〈構築時期〉 基本序層を含む断面から構築時期は、縄文時代後期前葉と判断される。



SI4

1. 暗褐色土 (119YR2/0) 焼土少量混入、しまる
2. 黒褐色土 (119YR2/2) 焼土粒、焼土粒少量混入、しまる

第11図 D、区第4号竪穴住居跡実測図



第4号竪穴住居跡（第11図、21図）

〈遺構の位置と確認〉調査区南部のYI-80グリッドに位置する。IV層上面でプランを確認したが、基本層序を含む土層断面から、本遺構の構築面は、Ⅲd層上面であることが判明している。

〈重複関係〉本遺構は第7号フラスコ状土坑と重複し、新旧関係は不明である。

〈平面形・規模〉未発掘部があるため詳細は不明であるが、およそ規模・平面形は径2.9mの円形を呈するものと考えられる。

〈堆積土〉2ブロックの人為堆積である。

〈床面・壁〉IV層を若干掘り込み、床面としている。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高は12cmを測る。

〈柱穴〉ビット21、22、49、50を主柱穴とする。

〈炉〉中央部より西寄りに位置する。10～28cm大の川原石を円形に設置している。炉の規模は42cmで、炉を構成する川原石は、強い焼成を受け亀裂が著しい。炉内に焼土は確認されなかった。

〈出土遺物〉覆土中より縄文時代後期前葉の土器破片14点、石楯1点、凹石1点が出土した。

〈構築時期〉基本層序を含む断面から構築時期は、縄文時代後期前葉と判断される。

第5号竪穴住居跡（第12図、17図、18図、21図）

〈遺構の位置と確認〉調査区南西部中央寄りのYK-79グリッドに位置する。Ⅲd層上面でプランを確認した。

〈重複関係〉第8号Tビットと重複し、本遺構が新しい。

〈平面形・規模〉未発掘部があるため詳細は不明であるが、規模・平面形は径2.94mの円形を呈するものと考えられる。

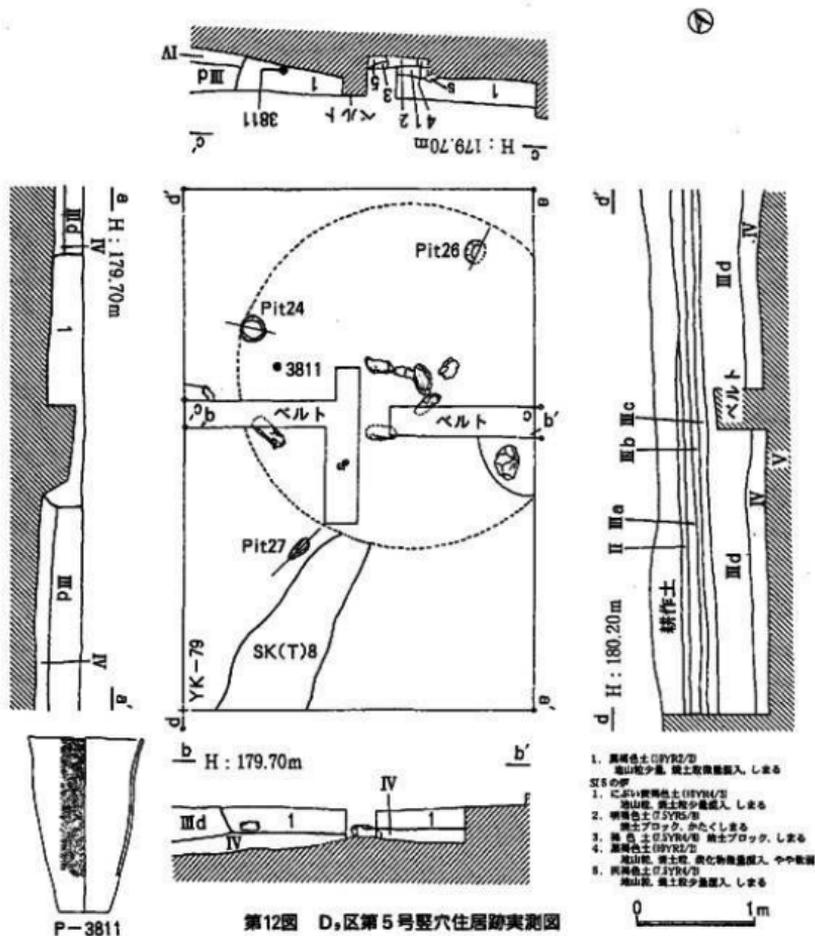
〈堆積土〉1ブロックの人為堆積である。

〈床面・壁〉IV層を若干掘り込み、床面としている。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高は28～32cmを測る。

〈柱穴〉ビット24、26、27が主柱穴と考えられる。

〈炉〉ほぼ中央部に位置する。床面を16cm程掘り込み、18～30cm大の川原石を円形に設置していたと考えられる。炉の規模は70cm×70cmで、炉を構成する川原石は、強い焼成を受け亀裂が著しい。炉内に最大厚16cmの焼土粒が微量混入した堆積土が確認された。

〈出土遺物〉覆土中より復元可能土器1点、縄文時代後期前葉の土器破片91点、石匙1点、掻器2点、磨製石斧1点、磨石1点、凹石4点、敲石1点、石刀（緑色凝灰岩）1点が出土した。第17図7は深鉢形土器で器面にL・R縄文が施文されている。器高は36.4cm、口径24.6cm、



第12図 D,区第5号竪穴住居跡実測図

底径は推定10.8cmを測り、色調はにぶい黄橙である。

〈構築時期〉基本層を含む断面から構築時期は、縄文時代後期前葉と判断される。

第6号竪穴住居跡 (第13図、22図)

〈遺構の位置と確認〉調査区南西部のYM-78グリッドに位置する。IV層上面でプランを確認したが、基本層を含む土層断面から、本遺構の構築面は、III d層上面であることが判明している。

(重複関係) 本遺構と重複する遺構はない。

(平面形・規模) 未発掘部があるため詳細は不明であるが、規模・平面形は短軸径2.84m、長軸4.0mの楕円形を呈するものと考えられる。

(堆積土) 1ブロックの人為堆積である。

(床面・壁) IV層を掘り込み、V層面を床面としている。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高は20cmを測る。

(柱穴) ビット38～42、51～54が主柱穴と考えられる。

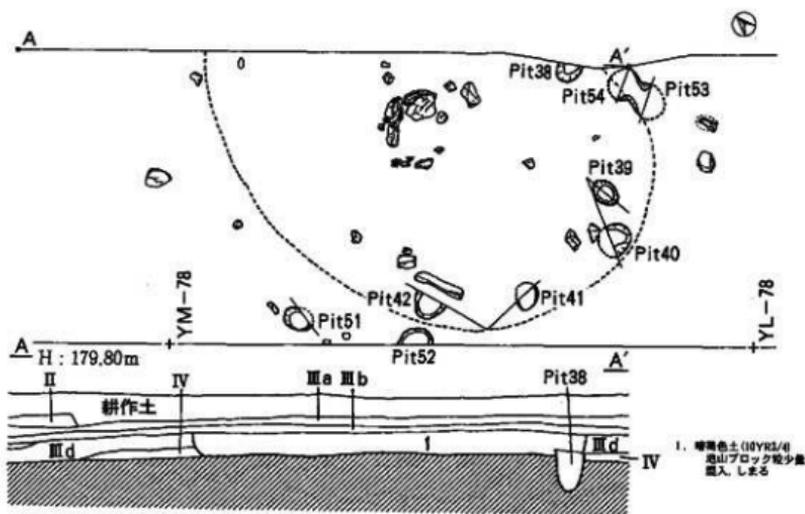
(炉) はば中央部に位置する。5～30cm大の川原石を円形に設置している。炉の規模は66cm×60cmで、炉を構成する川原石は、強い焼成を受け亀裂が著しい。

(出土遺物) 覆土中より縄文時代後期前葉の土器破片70点、石鏃1点、磨石1点、凹石2点、敲石1点が出土した。

(構築時期) 基本序層を含む断面から構築時期は、縄文時代後期前葉と判断される。

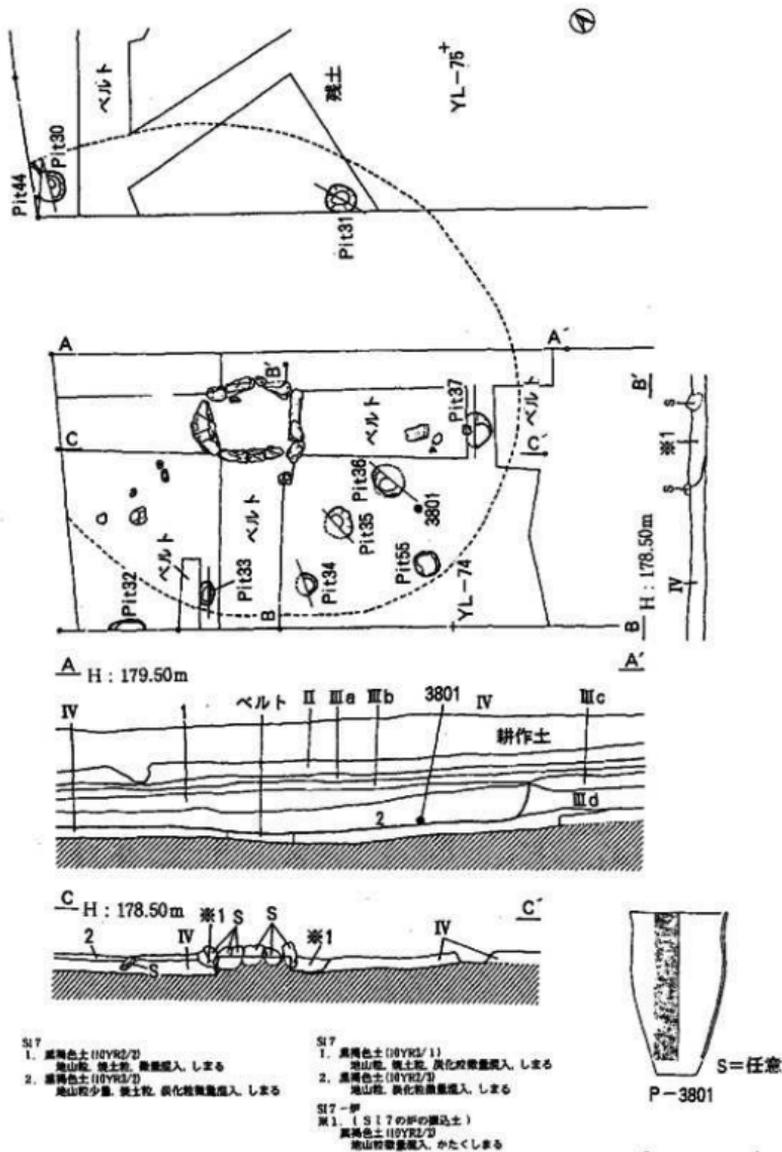
第7号竪穴住居跡 (第14図、17図、22図)

(遺構の位置と確認) 調査区南西端のYM・YL-74グリッドに位置する。IV層上面でプランを確認したが、基本層序を含む土層断面から、本遺構の構築面は、Ⅲd層上面であることが判明している。



第13図 D区第6号竪穴住居跡実測図

0 1m



第14図 D₂区第7号竪穴住居跡実測図

〈重複関係〉本遺構と重複する遺構はない。

〈平面形・規模〉未発掘部があるため詳細は不明であるが、規模・平面形は短軸径4.0m、長軸5.0mの楕円形を呈するものと考えられる。

〈堆積土〉2ブロックの人為堆積である。

〈床面・壁〉IV層を掘り込み、床面としている。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高は32cmを測る。

〈柱穴〉ピット30~37、44、55を主柱穴とする円形の柱配置である。

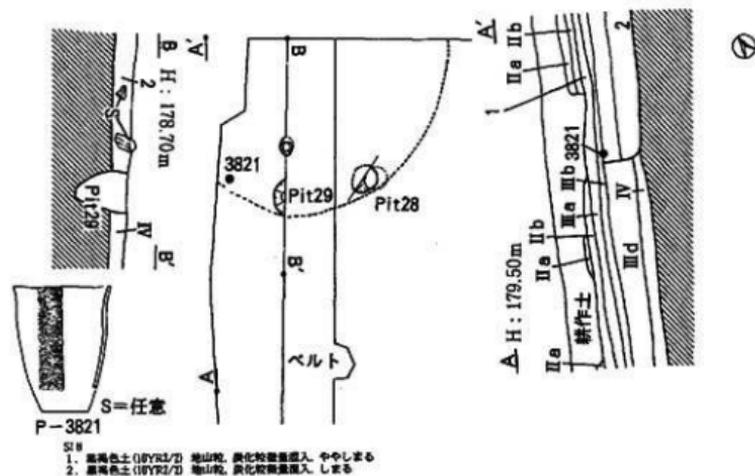
〈炉〉中央部よりやや西寄りに位置する。床面を12cm程掘り窪め、10~50cm大の川原石を楕円形状に設置している。炉の規模は72cm×94cmで、炉を構成する川原石は、強い焼成を受け亀裂が著しい。炉内より焼土は検出されなかった。

〈出土遺物〉床直より石鏃1点、凹石1点、覆土中より復元可能土器1点、縄文時代後期前葉の土器破片50点、石鏃1点、振器2点、磨石1点が出土した。第17図8は深鉢形土器で器面にはLR縄文が施文されている。器高は34.6cm、口径20.6cm、底径は推定8.4cmを測り、色調はにぶい黄橙である。

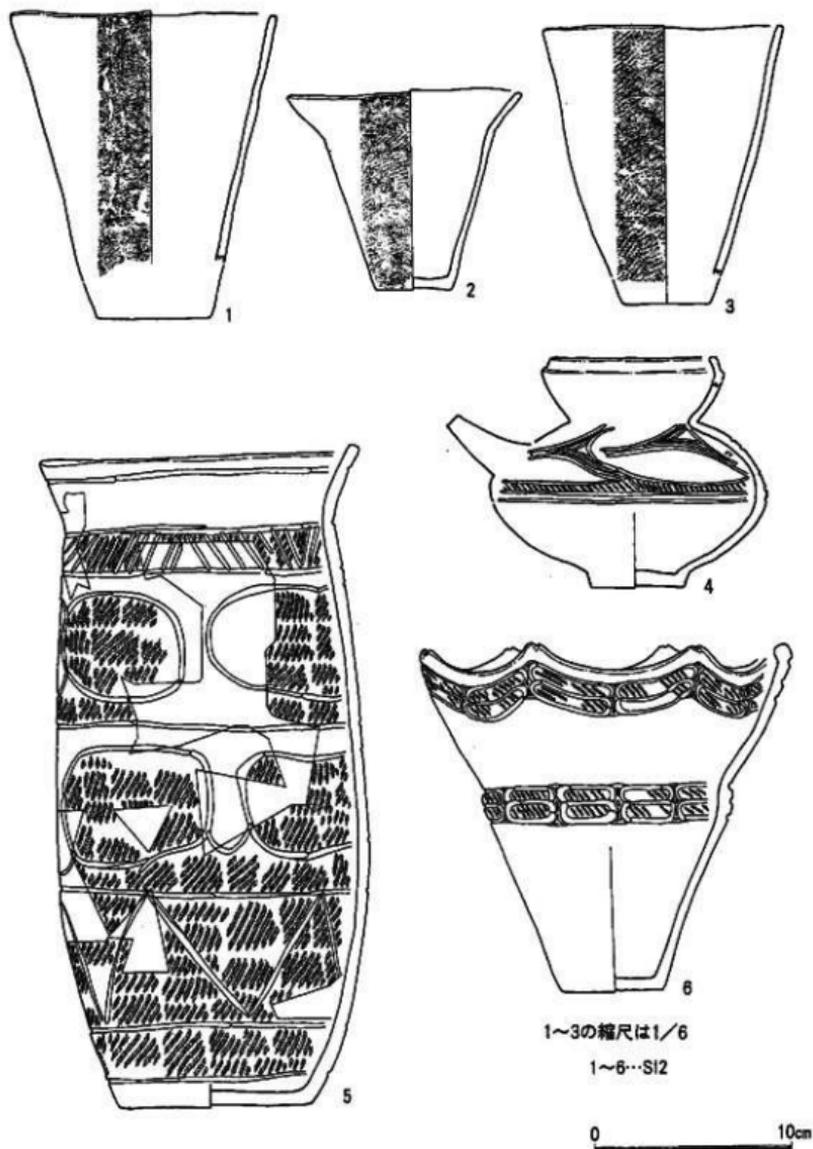
〈構築時期〉基本序層を含む断面から構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第8号型穴住居跡 (第15図、17図、22図)

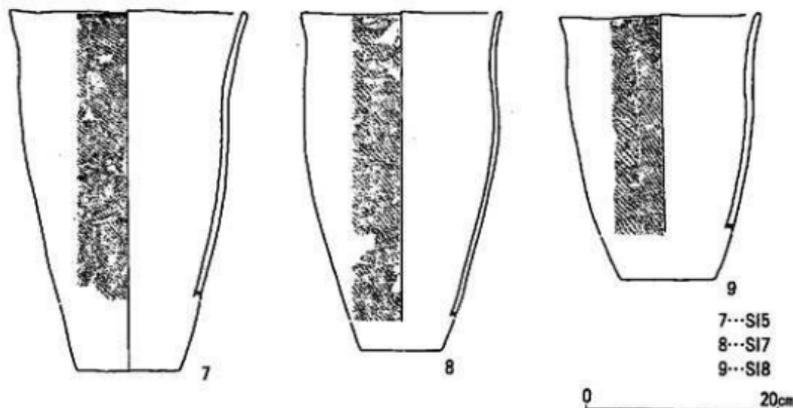
〈遺構の位置と確認〉調査区南西部のYM-75グリッドに位置する。IV層上面でプランを確認



第15図 D₁区第8号型穴住居跡実測図



第16図 D区第2号竪穴住居跡出土土器実測図(1)



第17図 D区第5号、7号、8号竪穴住居跡出土土器実測図(2)

認したが、基本層序を含む土層断面から、本遺構の構築面は、Ⅲd層上面であることが判明している。

〈重複関係〉本遺構と重複する遺構はない。

〈平面形・規模〉遺構の一部のみの確認ため詳細は不明である。

〈堆積土〉確認される堆積土は2ブロックの人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉Ⅳ層を掘り込み、Ⅴ層面を床面としている。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高は34cmを測る。

〈柱穴〉ビット28、29が主柱穴と考えられる。

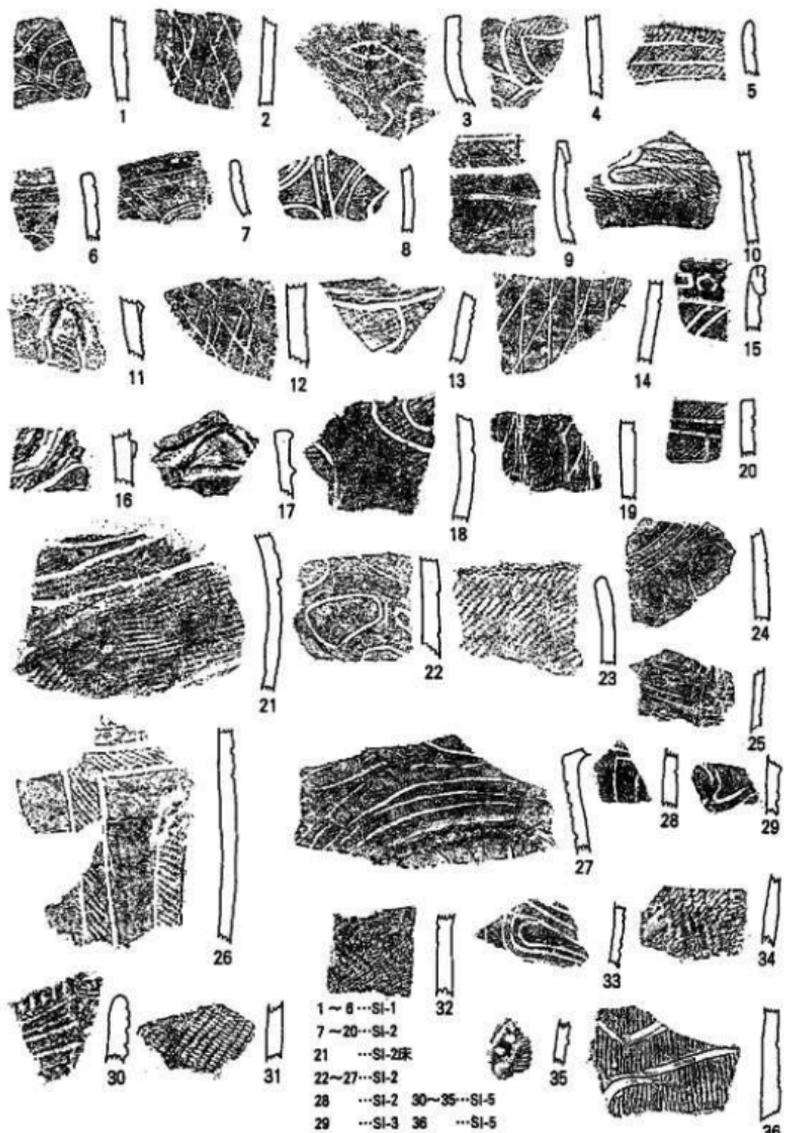
〈炉〉確認されなかった。

〈出土遺物〉覆土中より復元可能土器1点、搔器1点が出土した。第17図9は深鉢形土器で器面には結節LR縄文が施文されている。器高は26.8cm、口径21cm、底径は推定10cmを測り、色調はにぶい黄橙である。

〈構築時期〉基本層序を含む断面から構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

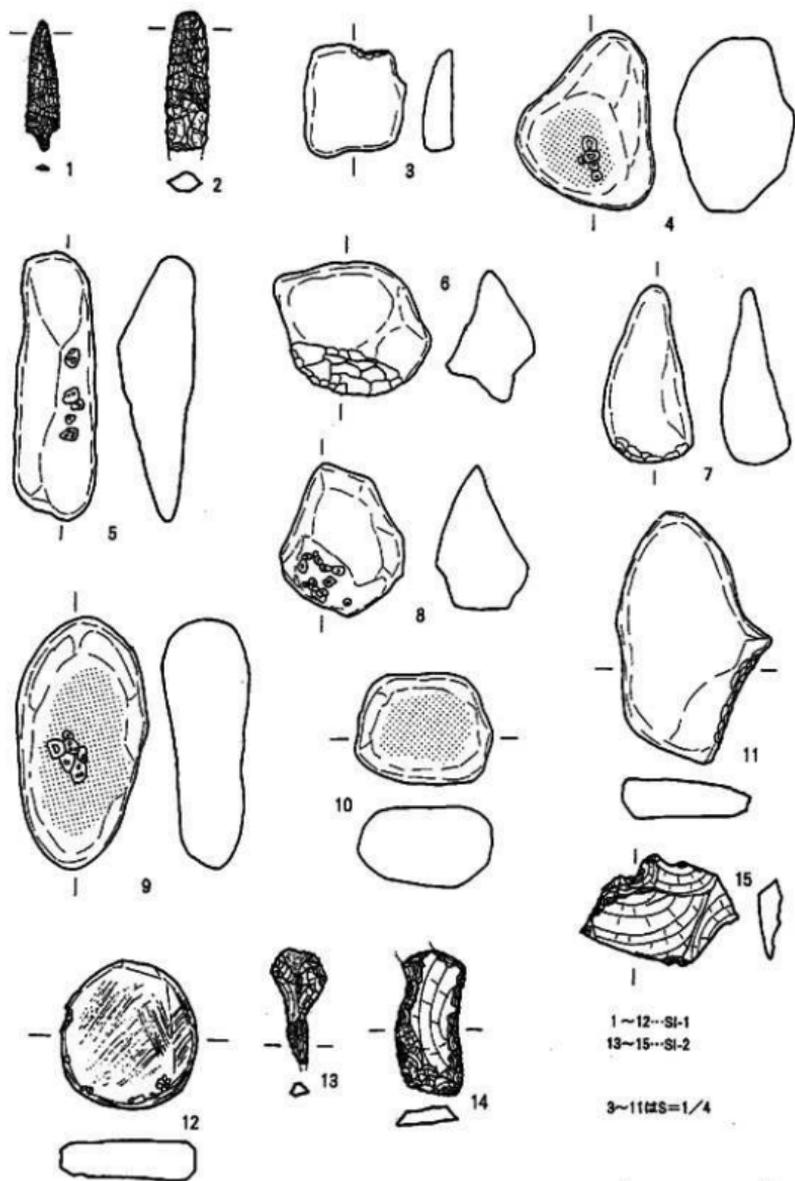
2. 柱穴状ビット(第23図～25図、第1表)

D区からは7個の柱穴状ビットが確認された。それらは、調査区西部のYJ-80グリッドで検出した。柱穴状ビットの規模は径22cm～118cm、深さ16cm～150cm(推定)を測る。確認される柱痕径は、12cm～64cmである。



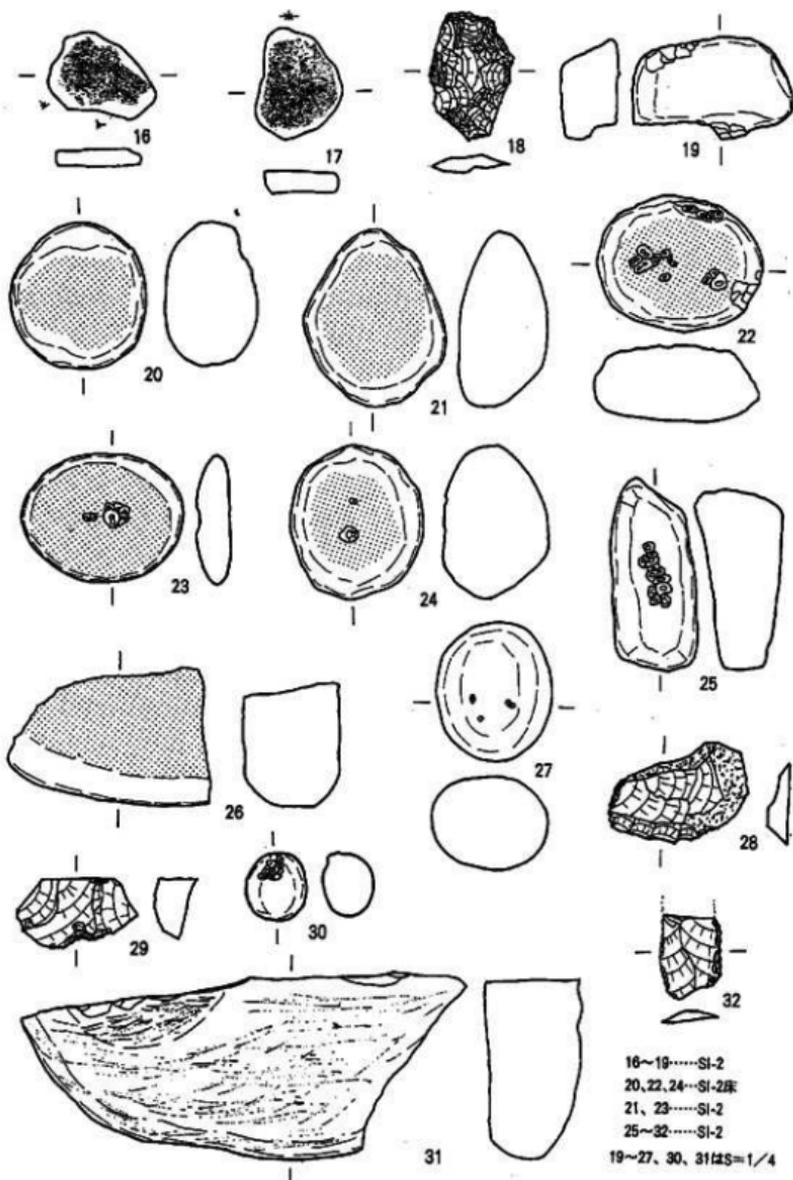
第18图 D区豎穴住居跡出土土器拓影图

0 10cm

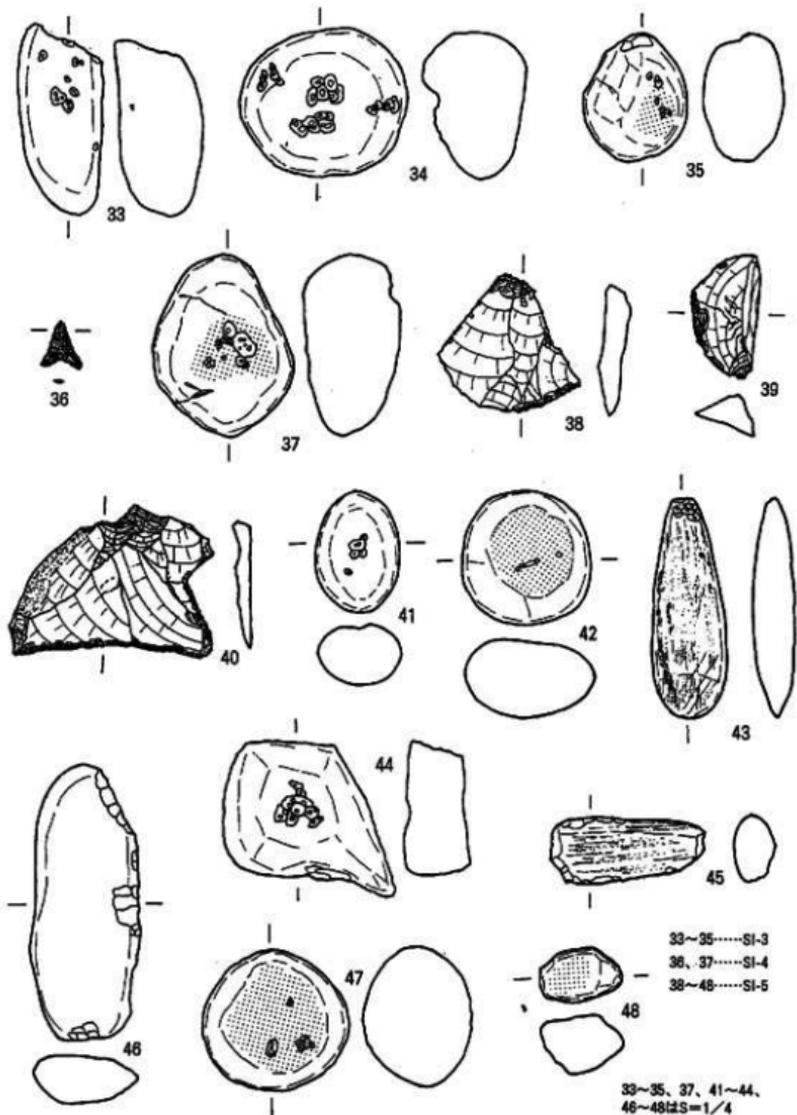


第19图 D.区整穴住居跡出土遺物実測図(1)

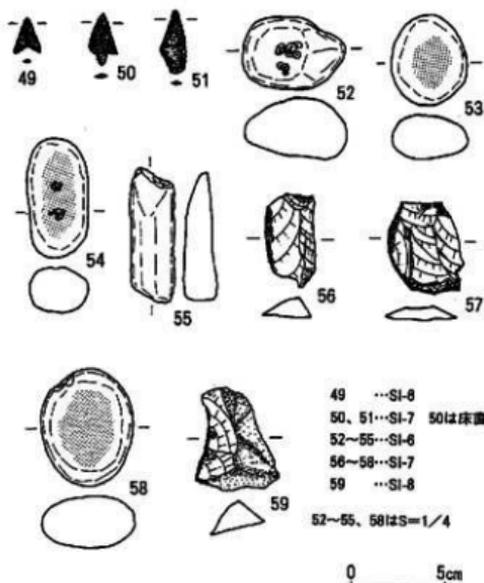
0 5cm



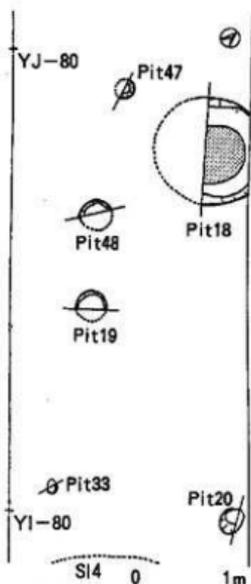
第20图 D₁区竖穴住居跡出土遺物実測図 (2)



第21图 D.区竖穴住居跡出土遺物実測図(3)



第22図 D区区穴住居跡出土遺物実測図(4)



第23図 D区柱穴状ピット実測図

3. 焼土遺構 (D区)

焼土遺構は調査区南西部、及び北東部に点在している。本調査区では8基が確認された。

第1号焼土遺構 (第26図)

調査区南西部南寄りYH~YI-76グリッド、Ⅲd層上面で確認。焼土範囲は(44)×30cmである。

第2号焼土遺構 (第26図)

調査区南西部のYL-76グリッド、Ⅲb層上面で確認。焼土範囲は16×11cmである。

第3号焼土遺構 (第26図)

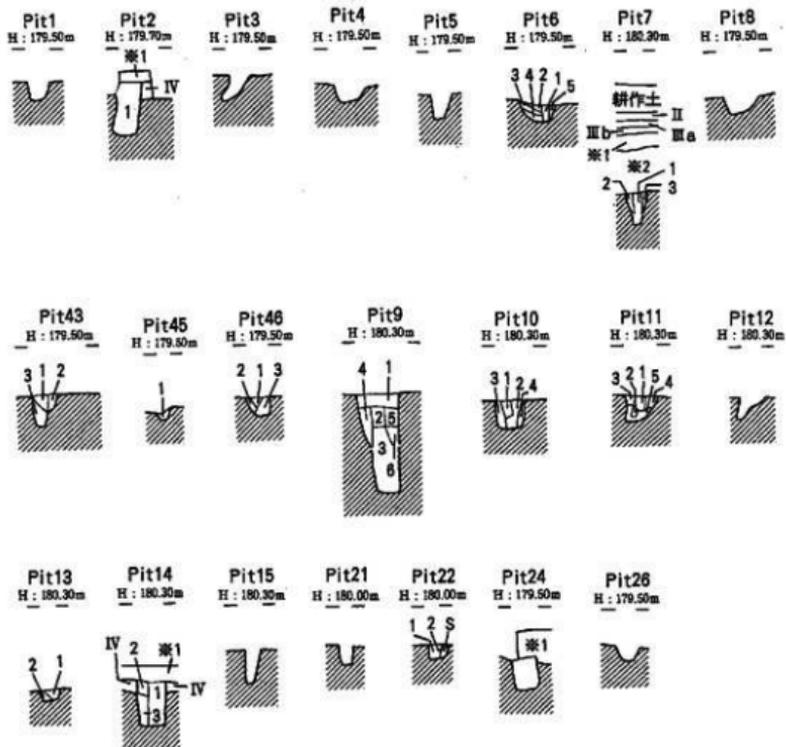
調査区南西部のYL-76グリッド、Ⅲd層上面で確認。焼土範囲は92×79cmである。

第4号焼土遺構 (第26図)

調査区南西部西寄りのYO-78グリッド、Ⅲd層上面で確認。焼土範囲は78×58cmである。

第5号焼土遺構 (第26図、48図)

調査区南西部中央寄りのYK-79グリッド、Ⅲd層上面で確認。焼土範囲は108×108cmであ



Pit2

1. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, します
- ※1. (S2)の壤土の1) 堆積物少量混入, します

Pit6

1. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山ブロック少量混入, ややします
2. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, します
3. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山ブロック少量混入, します
4. 黒色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, します
5. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, します

Pit7

1. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山少量混入, します
2. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, します
3. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山ブロック少量混入, します

※1. (S2)の壤土の1)

1. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, します
- ※2. (S2)の壤土の1) 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山ブロック少量混入, します

Pit9

1. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, します
2. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, ややします
3. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, ややします
4. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, します
5. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, します

Pit10

1. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, ややします
2. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, します
3. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, します
4. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, ややします

Pit11

1. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, します
2. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, します
3. 堆積物少量混入, します

Pit1

1. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, します
2. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, ややします
3. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, します
4. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, します
5. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山ブロック少量混入, します

Pit12

1. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, ややします
2. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, します
3. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, します
4. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, します
5. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, します

※1. (S2)の壤土の1)

1. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, します
2. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, します
3. 堆積物少量混入, します

Pit13

1. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, ややします
2. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, します
3. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, します

※1. (S2)の壤土の1)

1. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, します
2. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, します

Pit14

1. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, します
2. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, ややします
3. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, します
4. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, します

Pit15

1. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, します
2. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, します
3. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, します
4. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, します

Pit21

1. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, ややします
2. 黒褐色土 (IVYR2/2) 地山粒少量混入, します
3. 堆積物少量混入, します

第24図 D区柱穴状ピット断面図 (1)



第1表 D区柱穴状ビット一覧表

(備考欄にはビット対応の住居番号を記した。)

ビット 番号	グリット	規 模 (cm) 長径×短径×深さ	備 考	ビット 番号	グリット	規 模 (cm) 長径×短径×深さ	備 考
Pit 1	YO-88	23×不明×16	SI-1	Pit 38	YM-78	不明×19×28	SI-6
Pit 2	YN-88	(19)×(18)×16	SI-1	Pit 39	YM-78	25×20×12	SI-6
Pit 3	YN-88	21×13×22	SI-1	Pit 40	YM-78	(29)×27×22	SI-6
Pit 4	YN-88	29×23×14	SI-1	Pit 41	YM-78	24×(19)×20	SI-6
Pit 5	YO-86	(18)×(17)×20	SI-2	Pit 42	YM-78	不明×(30)×40	SI-6
Pit 6	YO-86	30×不明×19	SI-2	Pit 43	YO-86	(18)×(18)×26	SI-2
Pit 7	YO-86	20×不明×(30)	SI-2	Pit 44	YM-74	(32)×不明×31	SI-7
Pit 8	YO-86	(29)×(15)×13	SI-2	Pit 45	YO-86	(53)×(10)×9	SI-2
Pit 9	YJ-84	37×(35)×45	SI-3	Pit 46	YO-86	(22)×(20)×16	SI-2
Pit 10	YJ-84	(25)×(24)×24	SI-3	Pit 47	YJ-80	23×(19)×16	
Pit 11	YJ-84	29×(25)×21	SI-3	Pit 48	YJ-80	(37)×(32)×22	
Pit 12	YJ-84	16×14×17	SI-3	Pit 49	YI-80	(41)×(32)×不明	SI-4
Pit 13	YJ-84	18×(18)×9	SI-3	Pit 50	YI-80	23×(22)×不明	SI-4
Pit 14	YK-84	(27)×(26)×40	SI-3	Pit 51	YM-78	26×23×不明	SI-6
Pit 15	YJ-84	16×15×27	SI-3	Pit 52	YM-7778	(30)×(29)×不明	SI-6
Pit 16	YJ-84	16×(16)×16	SI-3	Pit 53	YM-78	(32)×30×不明	SI-6
Pit 17	YJ-84	(33)×(30)×(23)	SI-3	Pit 54	YM-78	29×(25)×不明	SI-6
Pit 18	YJ-80	(118)×116×(179)		Pit 55	YM-74	22×22×不明	SI-7
Pit 19	YJ-80	35×(34)×36					
Pit 20	YI-YJ-80	30×不明×62	SI-4				
Pit 21	YI-80	16×11×17	SI-4				
Pit 22	YI-80	(17)×16×12	SI-4				
Pit 23	YJ-80	(16)×11×14	SI-4				
Pit 24	YK-79	20×不明×27	SI-5				
欠番							
Pit 26	YK-79	19×13×12	SI-5				
Pit 27	YK-79	22×9×23	SI-5				
Pit 28	YM-75	25×(21)×17	SI-8				
Pit 29	YM-75	33×不明×45	SI-8				
Pit 30	YM-74	27×(25)×(55)	SI-7				
Pit 31	YM-74	28×24×20	SI-7				
Pit 32	YM-74	(31)×不明×49	SI-7				
Pit 33	YM-74	21×(15)×12	SI-7				
Pit 34	YM-74	19×(17)×21	SI-7				
Pit 35	YM-74	(27)×(24)×27	SI-7				
Pit 36	YM-74	30×(25)×(53)	SI-7				
Pit 37	YL-74	(30)×不明×10	SI-7				

る。本遺構より、第48図7の台付土器が斜倒立状検出した。

第6号焼土遺構 (第26図)

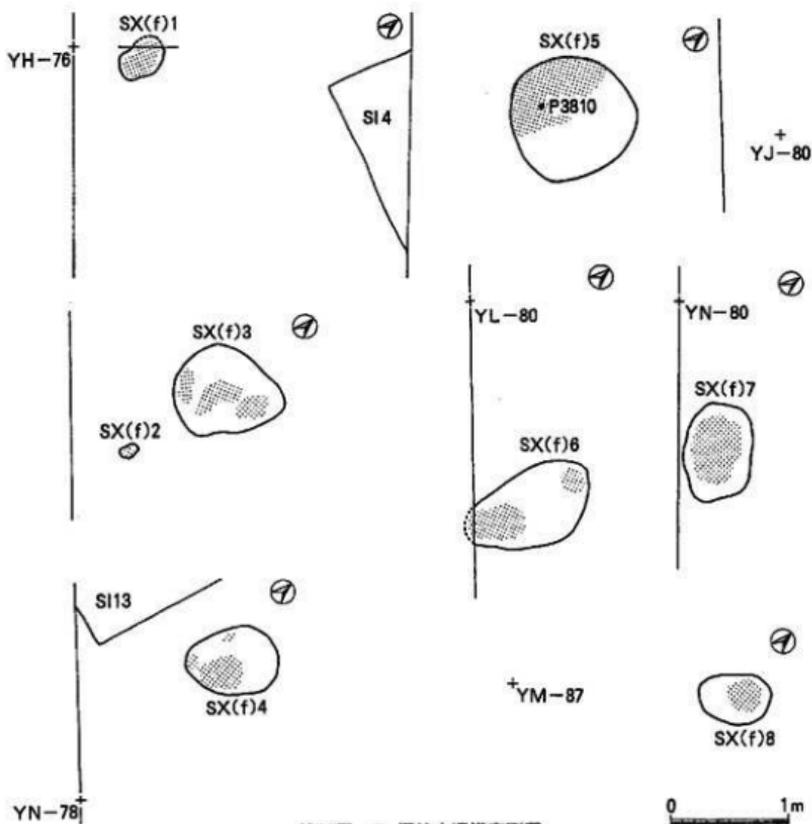
調査区中央部のYL-80グリッド、Ⅲb層中面で確認。焼土範囲は(117)×66cmである。

第7号焼土遺構 (第26図)

調査区西部中央寄りのYN-80グリッド、Ⅲd層上面で確認。焼土範囲は86×63cmである。

第8号焼土遺構 (第26図)

調査区北東部のYM~YN-87グリッド、Ⅲb層下面上面で確認。焼土範囲は61×43cmである。



第26図 D区焼土遺構実測図

4. 土 坑

(1) Tピット

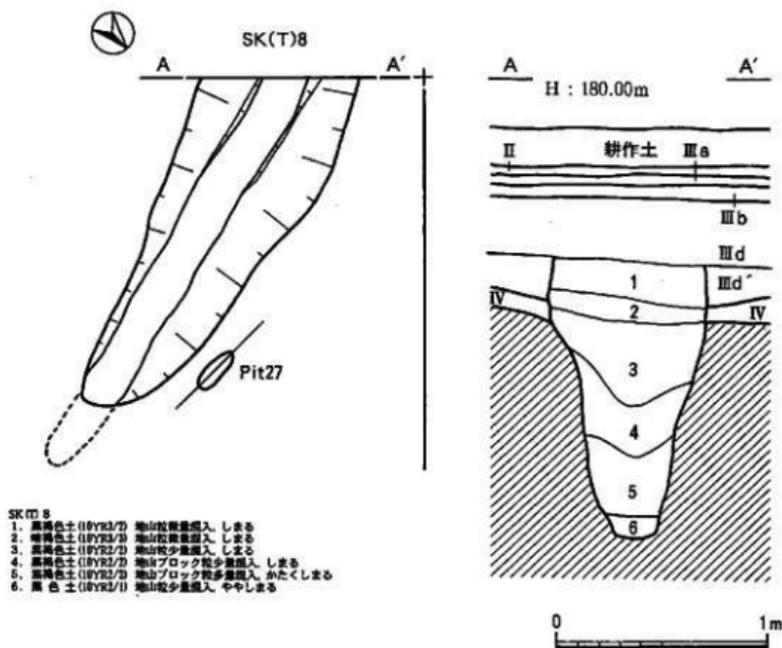
第8号Tピット (第27図)

調査区南西部中央寄りのYK-78~79グリッドに位置する。V層上面で確認したが基本層序を含む土層断面から、Ⅲ d'層上面が構築面であることが判明した。本遺構は、第5号壁穴住居跡と重複し、本遺構が古い。深さは推定135cm、口縁部径は長軸は不明、短軸は74cm (推定値)、また、底部径は、短軸22cm (推定値)を測る。構築時期は、土層断面から縄文時代後期前葉以前であると思われる。

(2) 土 坑

第3号土坑 (第29図)

調査区北東部のYM~YN-86グリッドに位置し、Ⅲ d層上面で確認した。第2号フラスコ状土坑、第4号フラスコ状土坑と重複し、本遺構がいずれより古い。規模は不明で、確認される



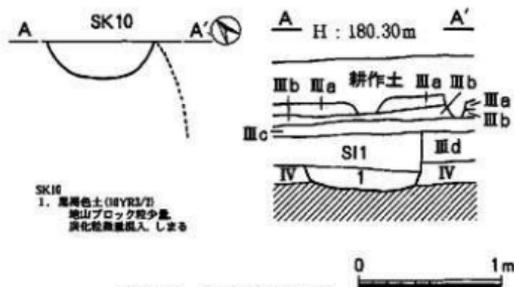
第27図 D区T-ピット実測図

底面は鍋底状になり、地山面まで掘り込まれている。堆積土は1ブロックで、人為堆積である。

構築時期は、周辺遺構及び出土遺物より縄文時代後期と判断される。

第10号土坑 (第28図)

調査区北東部のYN-88グリッドに位置し、IV層上面で確認した。第1号竪穴住居跡と重複し、本遺構が古い。平面形は楕円形を呈し、径80cm、深さは40cm(推定)を測る。残存する堆積土は1層で、人為堆積と判断される。



第28図 D₂区土坑実測図

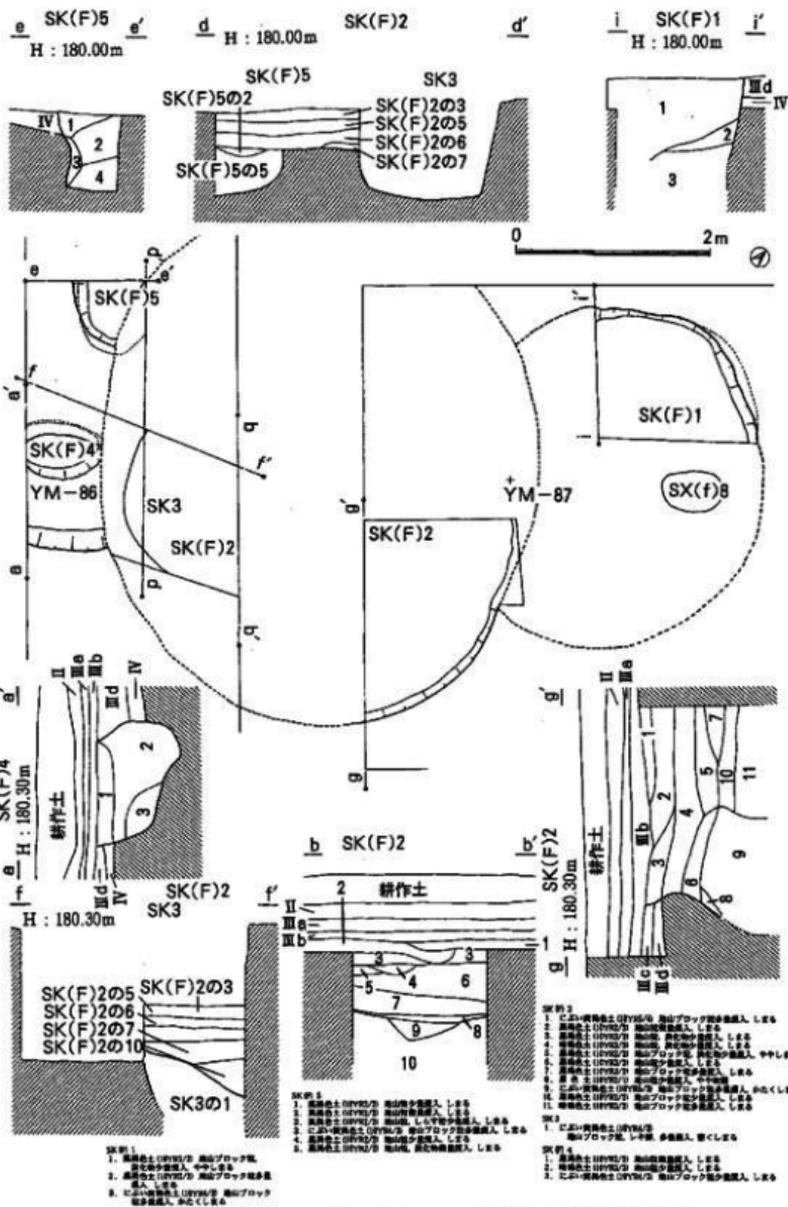
(3) フラスコ状土坑

第1号フラスコ状土坑 (第29図、31図～35図、38図、39図)

調査区北東部のYM-86～87、YN-86～87グリッドに位置し、III d層上面で確認した。第2号フラスコ状土坑と重複し、本遺構が古い。口縁部径は長軸 365cm×短軸 320cm(推定値)、底部径は不明で、確認面からの深さは推定 135cmを測る。基本層序断面より本来の構築面はIII d層上面である。確認される堆積土は3ブロックに区分され、人為堆積である。

遺構内より、復元可能土器6点、壺形切断土器1点、縄文時代後期前葉～中葉の土器破片が940点、石鏃7点、石錐1点、搔器68点、磨石1点、敲石1点、凹石6点、剥片61点、土器破片利用土製品4点、軽石製石製品2点が出土している。第31図1は深鉢形土器で、胴部には、刺突文が付加された平行沈線文による縦位区画内に曲線文が充填されている。口径17.0cmを測り、色調はにぶい褐色である。第31図2は、壺形切断土器で器面上部には沈線文による波形文が、下部には変形波形文が施されている。切断面は細い棒状のもので切断された状態で、1カ所にV字状の切れ目が観察される。壺の口頭部は検出されなかった。胴部器高は4.5cm、切断部口径は11.6cm、底径3.5cmを測り、色調はにぶい黄橙である。第31図11、12は、いずれもL縄文による網目状撚糸文が施された深鉢形土器である。11は器高34.2cm、口径32.2cm、底径12.0cmを測り、色調は黒褐色である。12は器高31.7cm、口径24.5cm、底径11.5cmを測り、色調は褐灰色である。PL19は入組文を主文様とする深鉢形土器である。PL19は主文様となるS字文に弧線文が付加した深鉢形土器である。PL19は4つの橋状扶手をもつ壺形土器で楕円形文を区画文としている。

構築時期は出土遺物および確認面より縄文時代後期前葉から中葉と判断される。



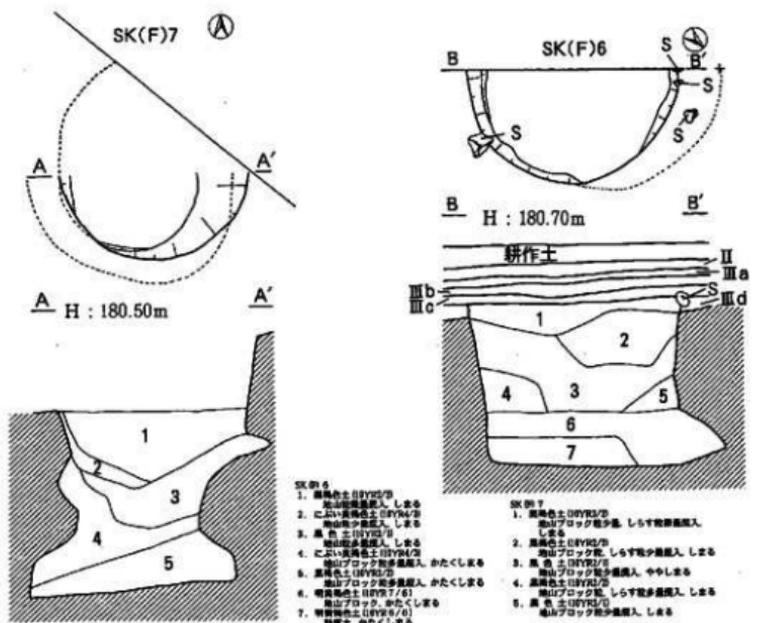
第29回 D₂区第1号、2号、4号、5号フラスコ状土坑、第3号土坑実測図

第2号フラスコ状土坑 (第29図、31図、32図、35図～37図、39図～42図)

調査区北東部のYM～YN-86グリッドに位置し、Ⅲc層上面で確認した。第1号フラスコ状土坑、第4号フラスコ状土坑、第5号フラスコ状土坑、第3号土坑と重複し、本遺構がいずれより新しい。確認面からの深さは推定144cm。口縁部径は長軸545cm×短軸450cm(推定値)を測る。堆積土は11ブロックに分層され、人為堆積である。

遺構内より、復元可能土器9(2)点、縄文時代後期前葉～中葉の土器破片976(484)点、石織7点、石錐1点、石匙1(1)点、搔器3点、磨製石斧3点、石皿(1)点、磨石1(1)点、敲石6(10)点、凹石28(31)点、剥片24点、土偶1点、罌型土製品1(1)点、土器破片利用土製品14(3)点、板状石製品1点、軽石製石製品7(1)点が出土している。第32図12はいずれもL縄文による網目状燃糸文が施文された深鉢形土器である。14は器高16.1cm、口径14.5cm、底径6.4cmを測り、色調はにぶい褐色である。12は器高32cm、口径27.2cm、底径12(推定)cmを測り、色調はにぶい黄橙である。14は無文の深鉢形土器である。10は壺形土器で、隆沈文による入組状曲線文を主体とする文様が施文され、赤色顔料が付着している。器高は39.6cm、口径12.1cm、底径は推定8cmを測り、色調は明褐色である。3は小型の台付鉢形土器で、縦位に展開するS字文を主体とし、平行沈線文により5段の区画がなされている。器高は6.7cm、口径9.5cm、底径3.8cmを測り、色調は灰褐色である。4は小型鉢形土器で上部と底部を平行沈線文で区画し、上部は縦位の「S字」状文で区画がなされ、胴部には縦位の曲線文が主文様として施文されている。器高は6.7cm、口径10.4cm、底径4.6cmを測り、色調は明黄褐色である。5は、波状口縁の鉢形土器で上半部に平行沈線による区画がなされ、縦位の入組状曲線文が主文様として施文され、方形文が付加される。器高は24.6cm、口径29cm、底径15.4cmを測り、色調は橙色である。5は波状口縁の深鉢形土器で、口縁部に3条の平行沈線が施文されている。口径25cmを測り、色調はにぶい赤褐色である。8は壺形土器で、平行沈線により上部と下部が区画され、口頭部には隆沈による楕円形文が付加され、胴部には入組状曲線文が縦位の「S字」状文と連結され主文様となっている。底部に穿孔を有する。器高は24.2cm、口径9cm、底径9.8cmを測り、色調は橙色である。7と9は本遺構とSK(F)4との供伴である。7は壺形土器で、口頭部に平行隆帯文が付加され、胴部には波状文が連結されている。色調は橙色である。9は波状口縁の深鉢形土器で、「白」文を主文様および区画文とし、弧線文によって連結している。口縁部には沈線間に円文が付加する。器高は20.3cm、口径15.2cm、底径8.3cmを測り、色調は明黄赤褐色である。48は土偶の脚部である。74は無文の罌型土製品である。83は本遺構とSK(F)4との供伴である。83は罌型土製品で胴部に「S字」状文が施文され、沈線間にRL縄文が充填される。つまみ部には貫通口が穿れ、楕円形文が付加されている。

本遺構の構築時期は、出土遺物および確認面より縄文時代後期前葉～中葉と判断される。



第30図 D₁区フラスコ状土坑実測図

第4号フラスコ状土坑 (第29図、41図、42図)

調査区北東部のYM~YN-86グリッドに位置し、III d層上面で確認した。第2号フラスコ状土坑と重複し、本遺構が古い。確認面からの深さは推定95cm、口縁部径は118cm、底部径は46cmを測る。底部北側には凹が確認される。堆積土は3ブロックに区分され、人為堆積である。

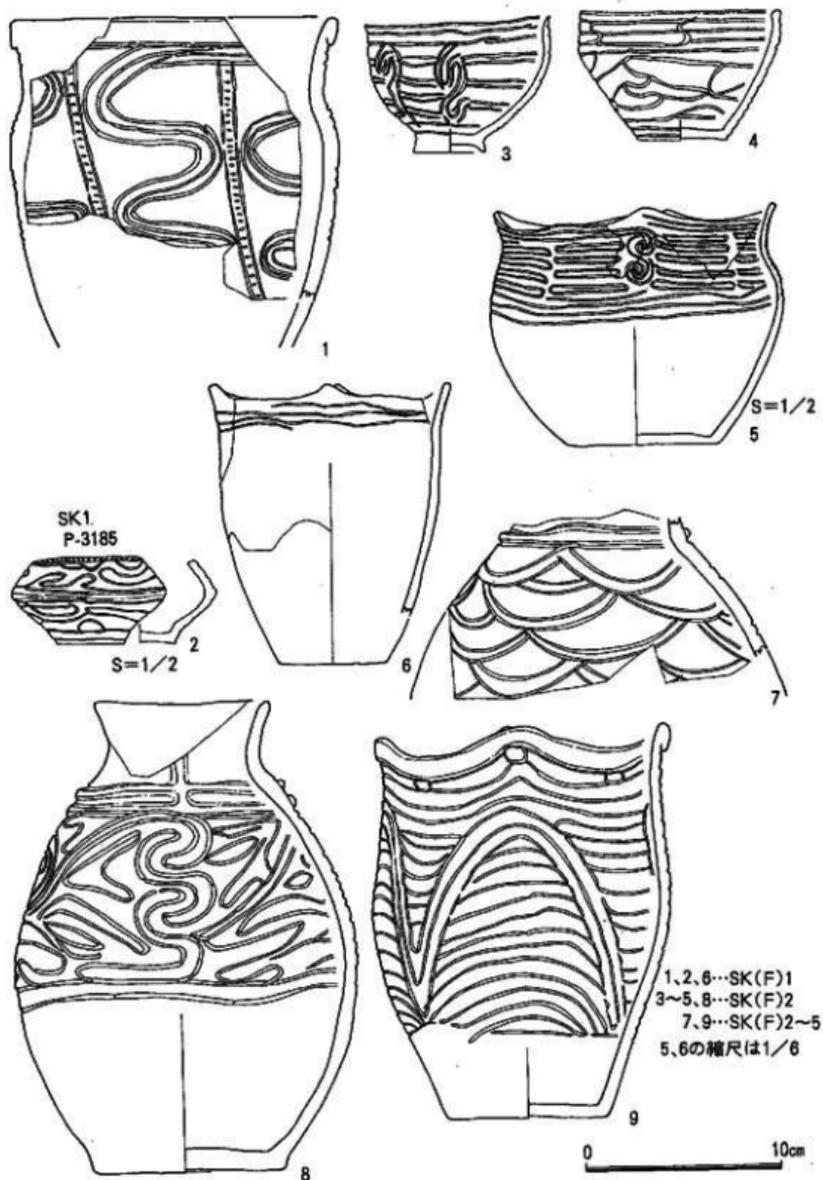
遺構内より、第2号フラスコ状土坑と合わせ復元可能土器2点、縄文時代後期前葉~中葉の土器破片484点、石匙1点、石皿1点、磨石1点、敲石10点、凹石31点、銅製土製品1点、土器破片利用土製品3点、軽石製石製品1点が出土している。

構築時期は、確認面より縄文時代後期と判断される。

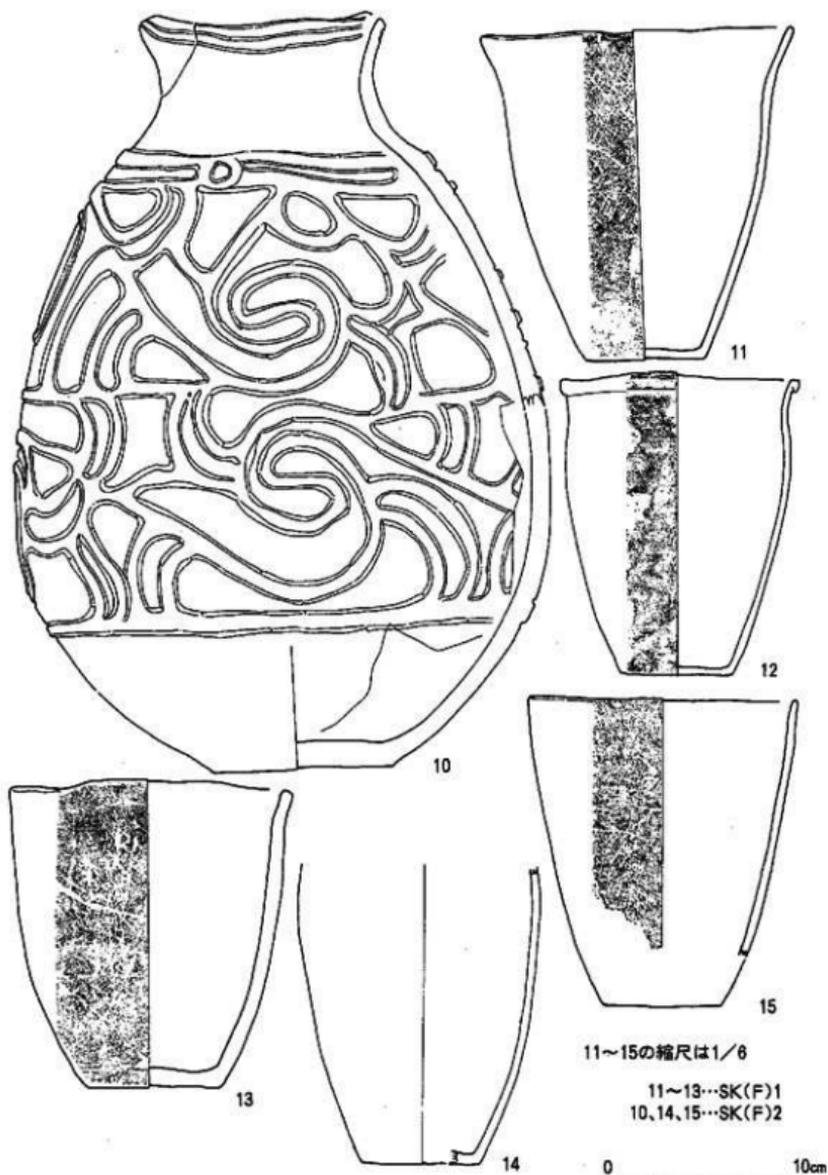
第5号フラスコ状土坑 (第29図、31図、41図、42図)

調査区北東部のYN-86グリッドに位置し、IV層上面で確認した。第2号フラスコ状土坑と重複し、本遺構が古い。確認面からの深さは推定80cmを測る。確認される堆積土は5ブロックに区分され、人為堆積である。

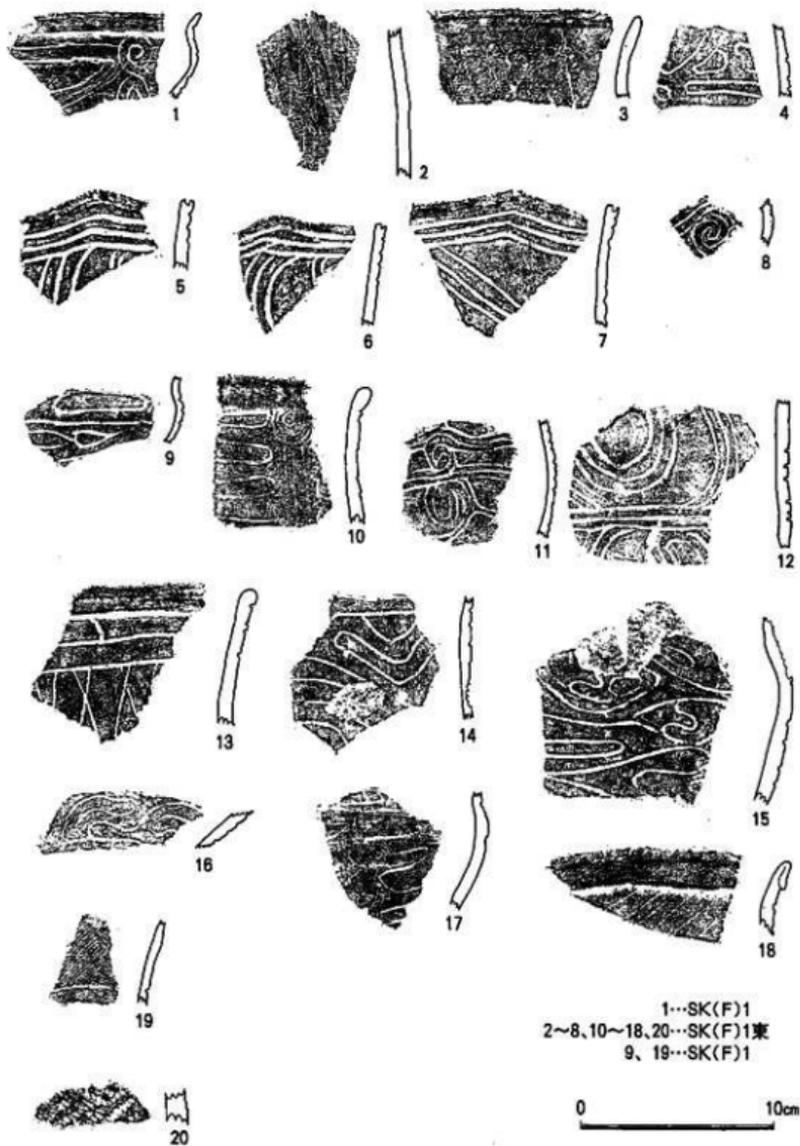
構築時期は、周辺出土遺物より縄文時代後期と判断される。



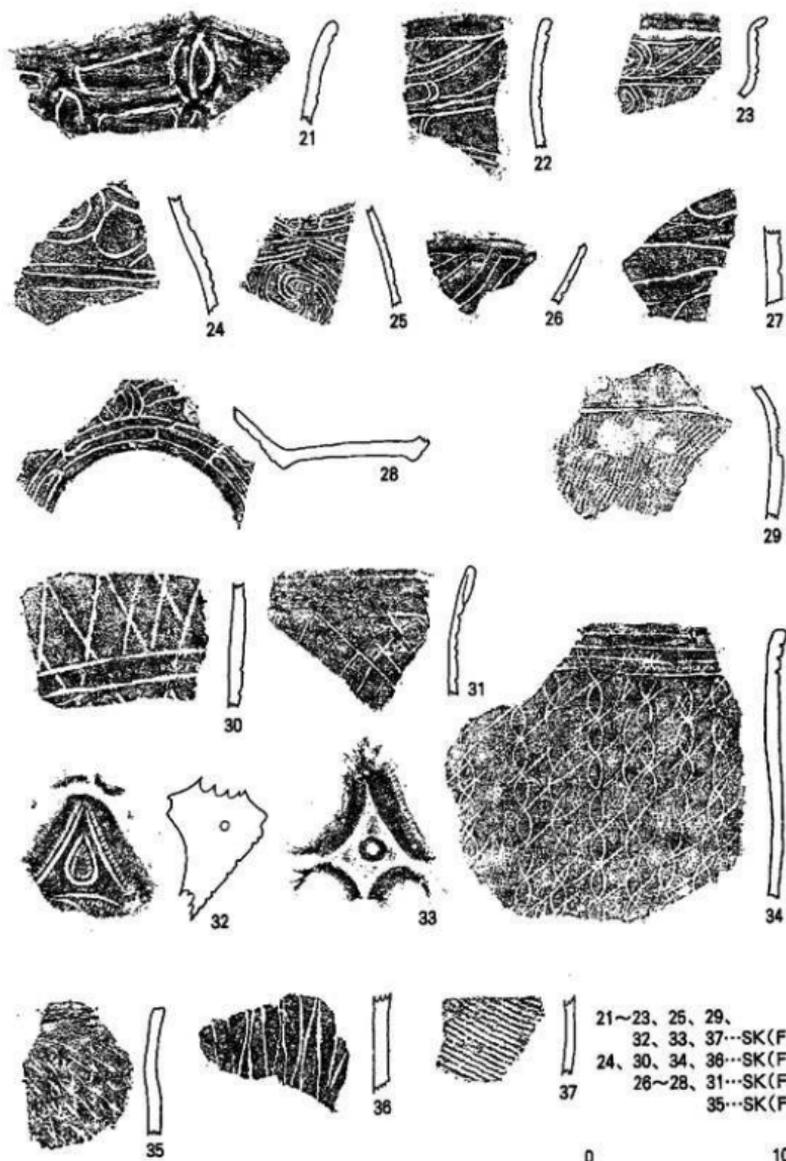
第31図 D区フラスコ状土坑出土土器実測図(1)



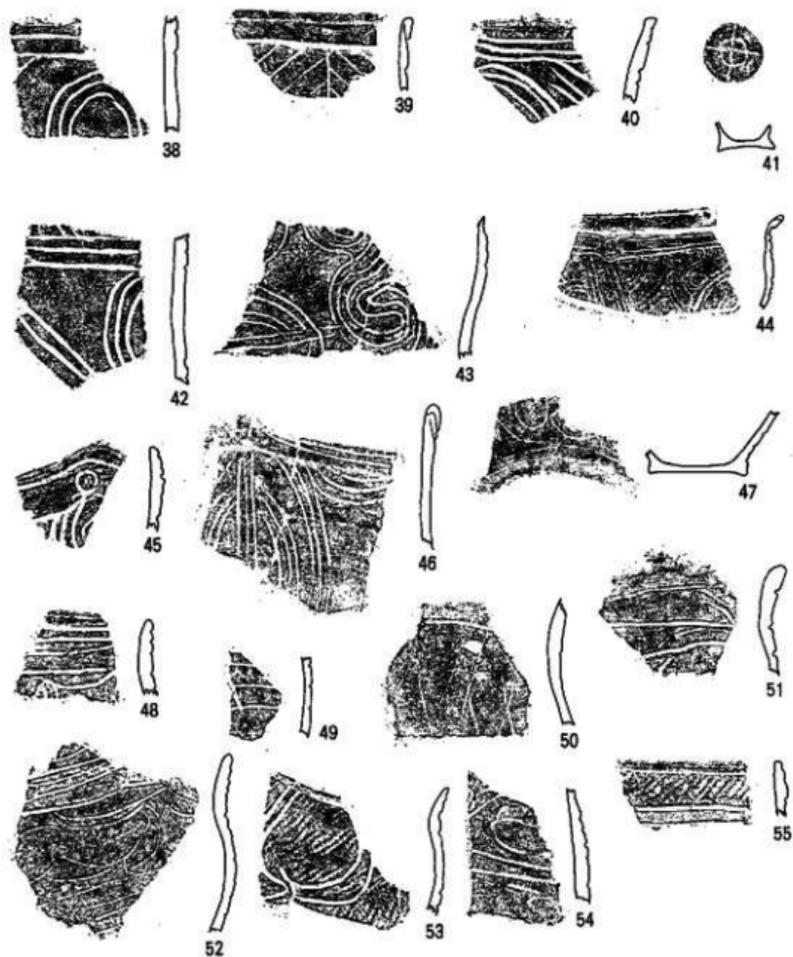
第32図 D区フラスコ状土坑出土土器実測図(2)



第33図 D区フラスコ状土坑出土土器拓影図(1)



第34图 D区フラスコ状土坑出土土器拓影图(2)



- 38、39…SK(F)2
 40、42…SK(F)1、2
 41…SK(F)1、2
 43…SK(F)2
 44～55…SK(F)2

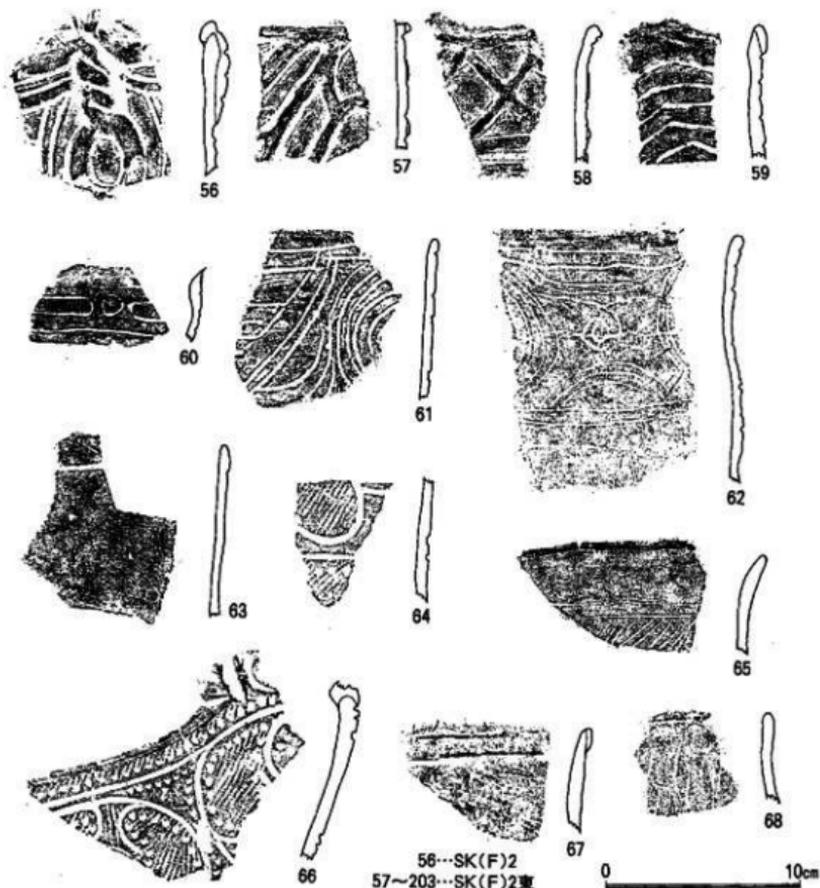
0 10cm

第36図 D.区フラスコ状土坑出土土器拓影図(3)

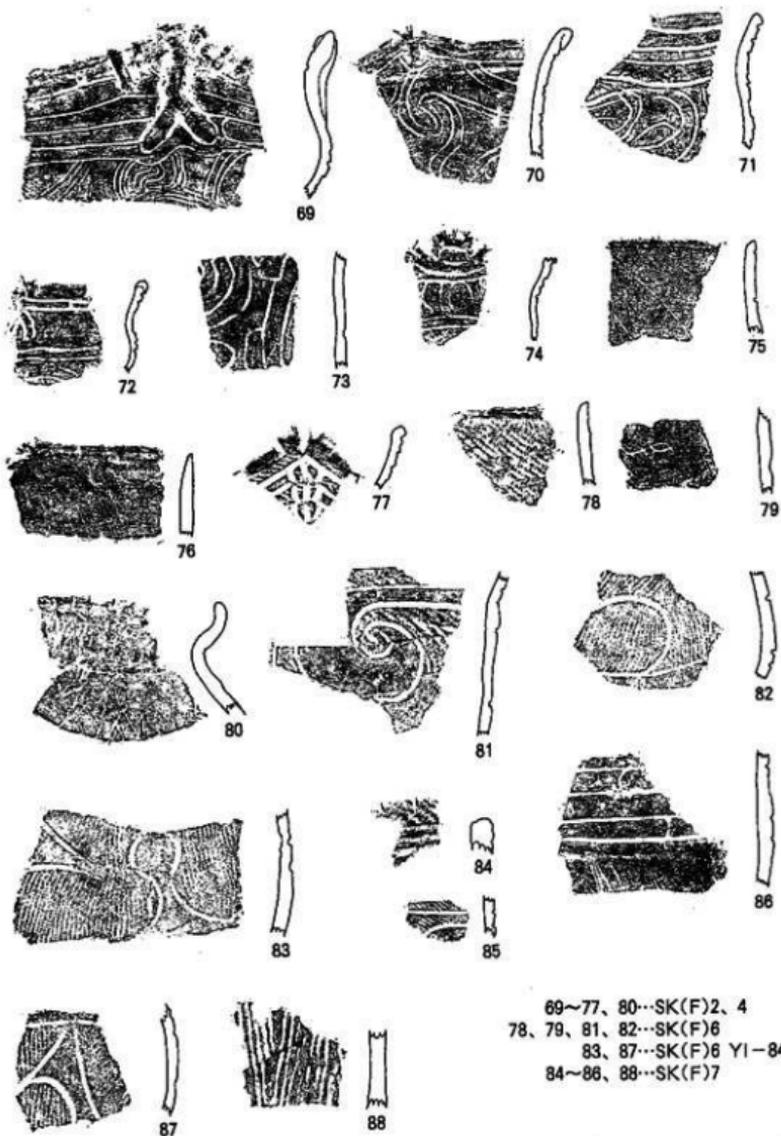
第6号フラスコ状土坑 (第30図, 37図, 42図)

調査区西部のY I-84グリッドに位置し、III d層上面で確認した。確認面からの深さは144 cm。口縁部径は181cm、底径部径は 200cmを測る。基本層序断面より本来の構築面はIV層上面である。底部北側は外側に張り出している。堆積土は7ブロックに区分され、人為堆積である。

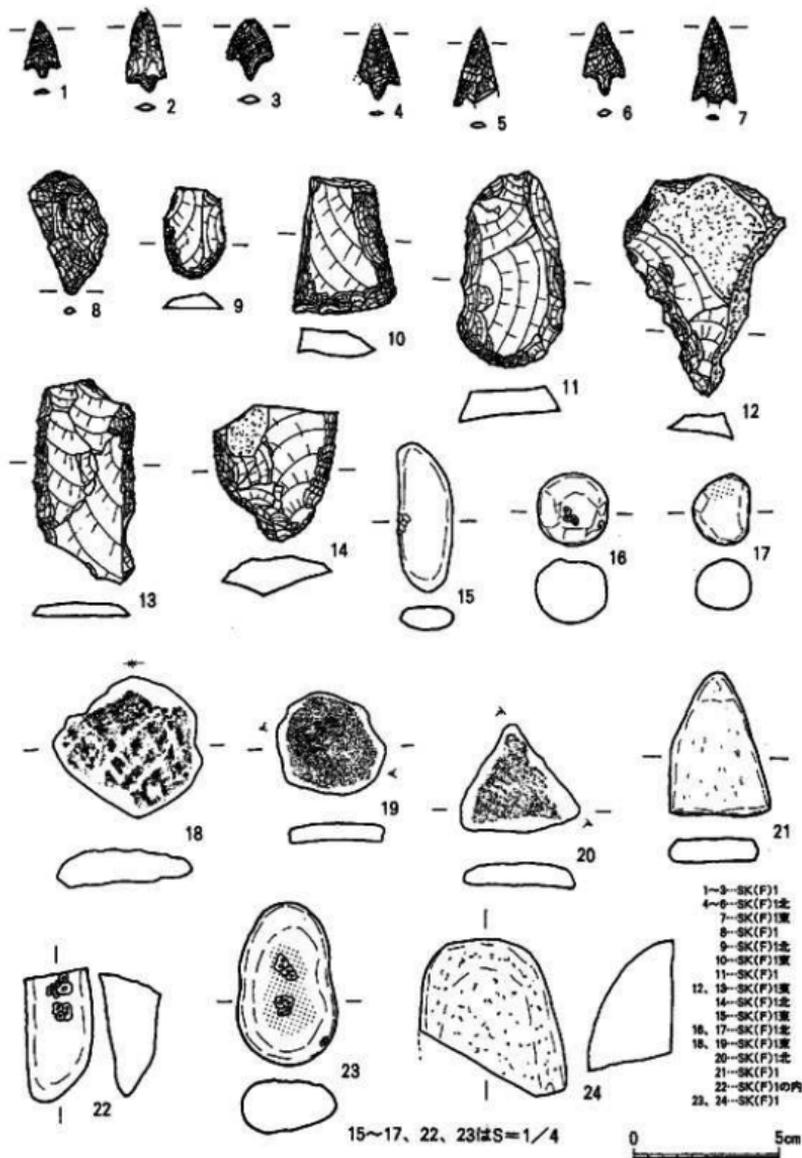
遺構内より、縄文時代後期前葉～中葉の土器破片18点、敲石 2点、土製品1点が出土している。93は、装飾品である。



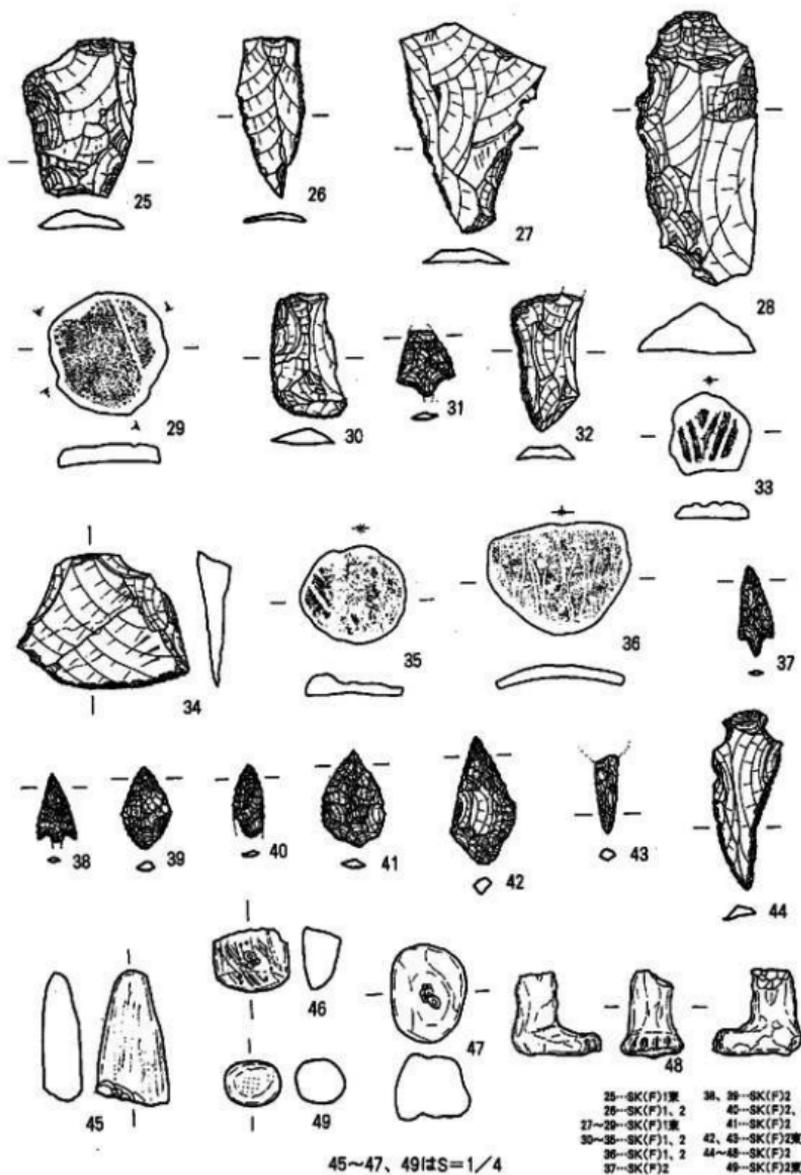
第36図 D区フラスコ状土坑出土土器拓影図(4)



第37图 D区フラスコ状土坑出土土器拓影图 (5)

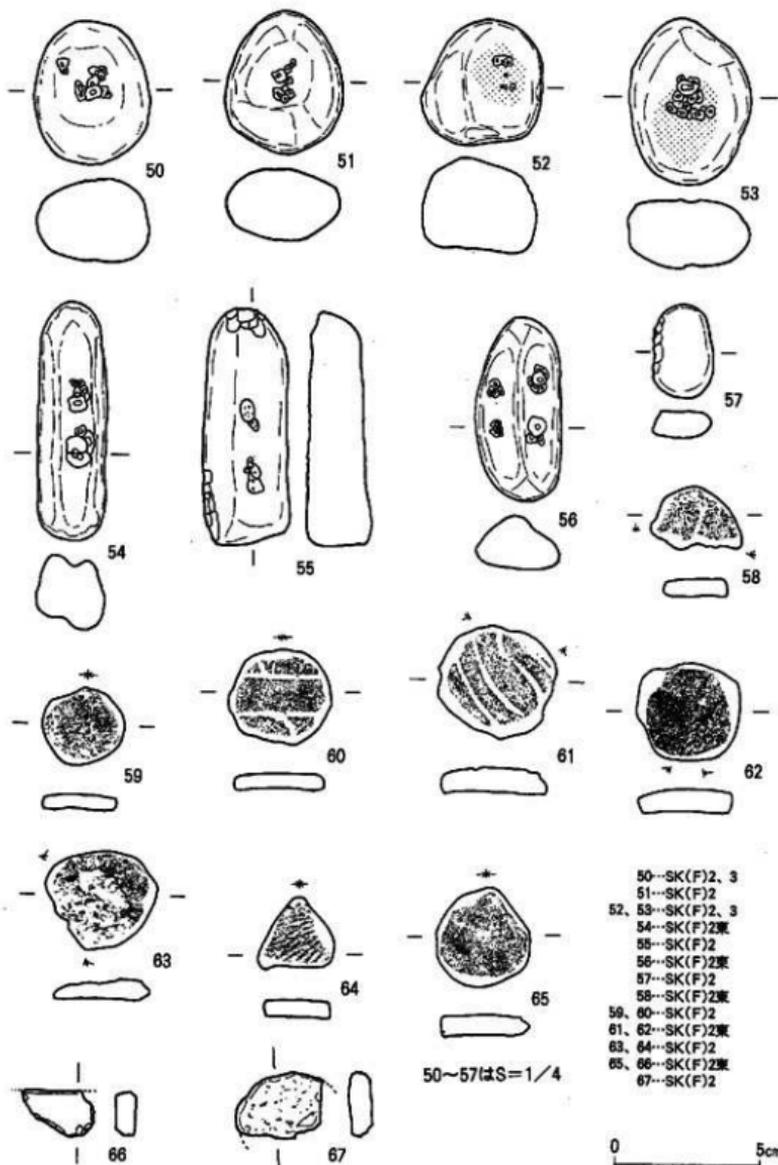


第38図 D₃区フラスコ状土坑出土遺物実測図 (1)



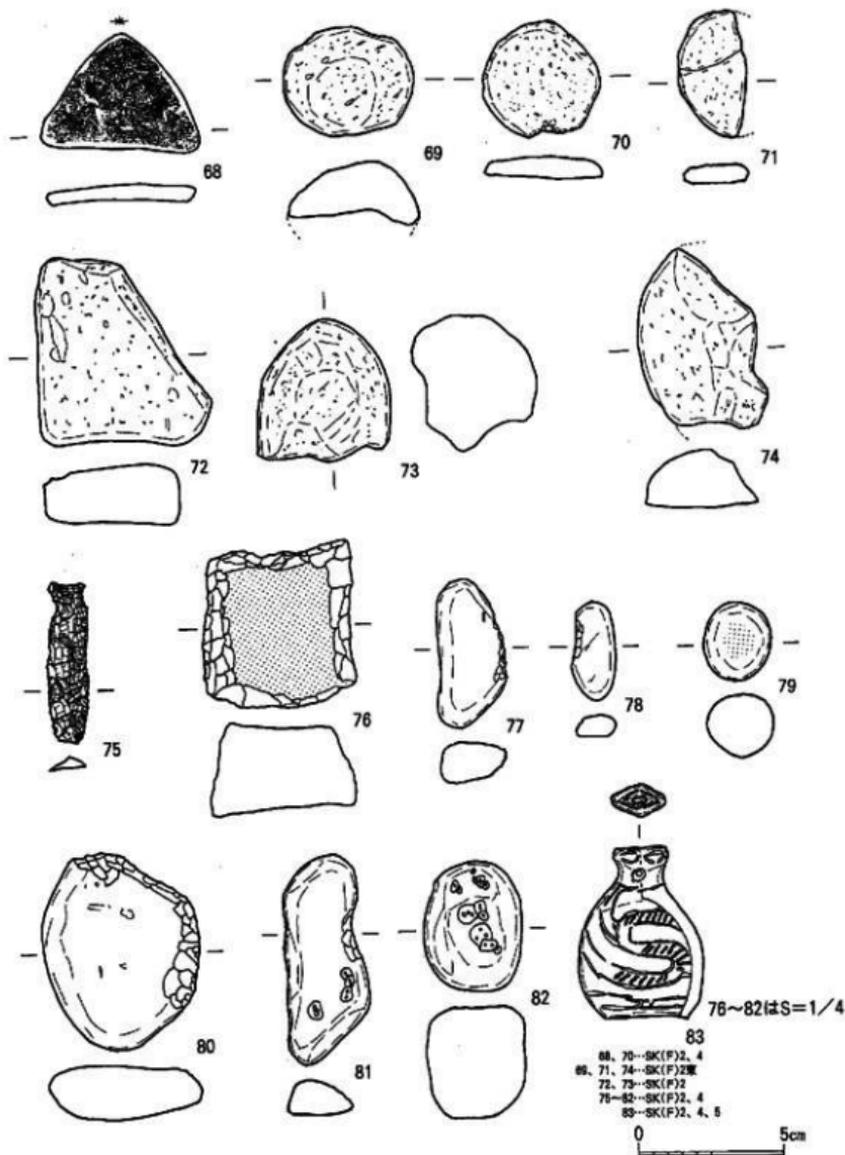
第39図 D区フラスコ状土坑出土遺物実測図(2)

0 5cm



- 50--SK(F)2、3
 51--SK(F)2
 52、53--SK(F)2、3
 54--SK(F)2東
 55--SK(F)2
 56--SK(F)2東
 57--SK(F)2
 58--SK(F)2東
 59、60--SK(F)2
 61、62--SK(F)2東
 63、64--SK(F)2
 65、66--SK(F)2東
 67--SK(F)2

第40図 D、区フラスコ状土坑出土遺物実測図 (3)



第41図 D₃区フラスコ状土坑出土遺物実測図 (4)

構築時期は、出土遺物より縄文時代後期～中葉と考えられる。

第7号フラスコ状土坑 (第30図、37図)

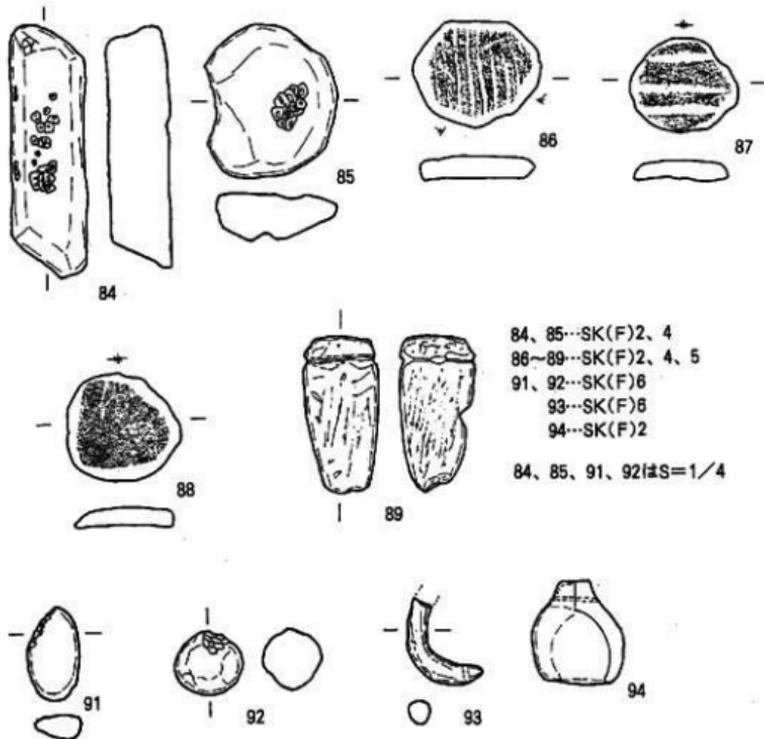
調査区南東部のY I - 80グリッドに位置し、Ⅲ d層上面で確認した。第4号竪穴住居跡と重複し、新旧は不明である。確認面からの深さは180cm。口縁部径は長軸 169cm。底径部径は173cmを測る。確認される堆積土は5ブロックに区分され、人為堆積である。

遺構内より、縄文時代後期前葉の土器破片8点が出土した。

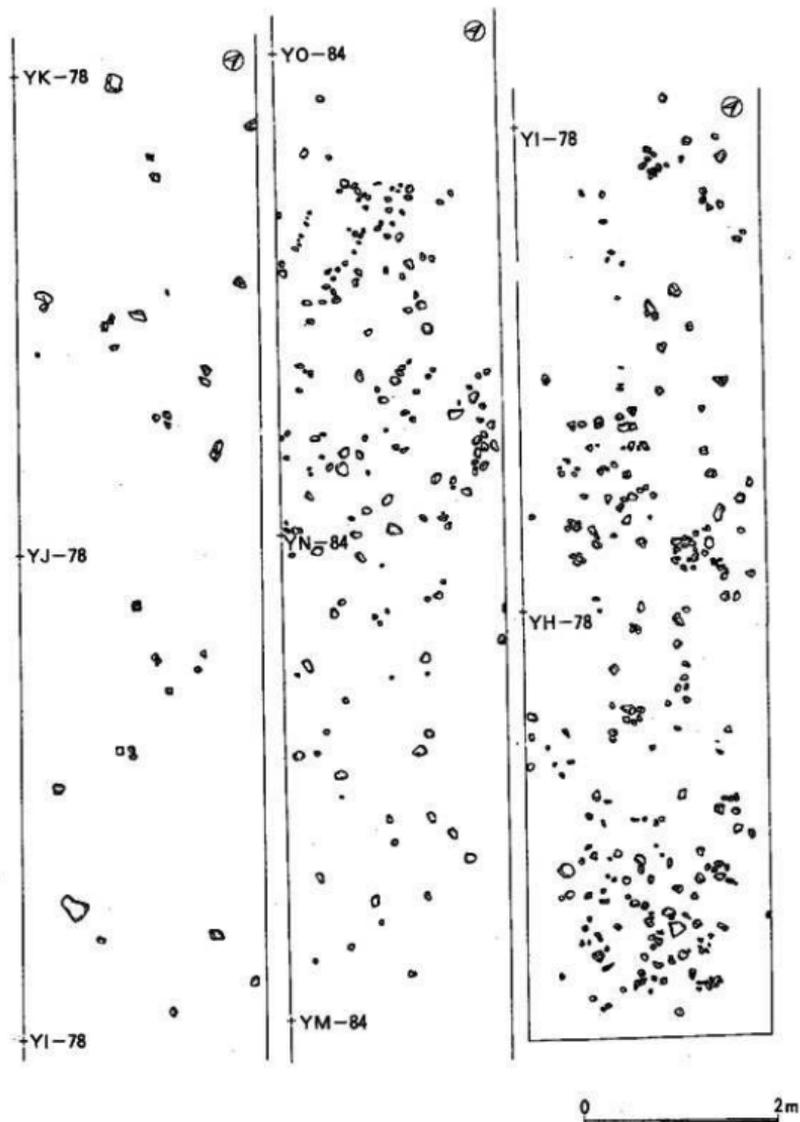
構築時期は、出土遺物より縄文時代後期と判断される。

(4) 礫 群 (第43図、44図)

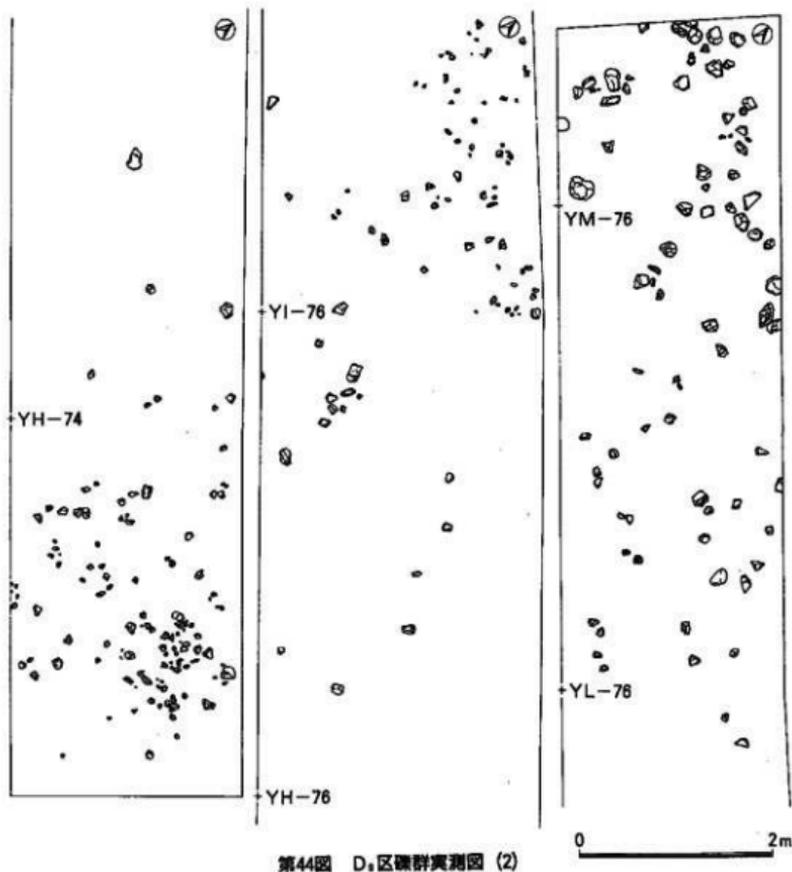
調査区北部、南東部から南西部にかけて単大の礫の集中する区域が確認された。礫の確認面



第42図 D₁区フラスコ状土坑出土遺物実測図 (5)



第43图 D₂区种群类型图 (1)



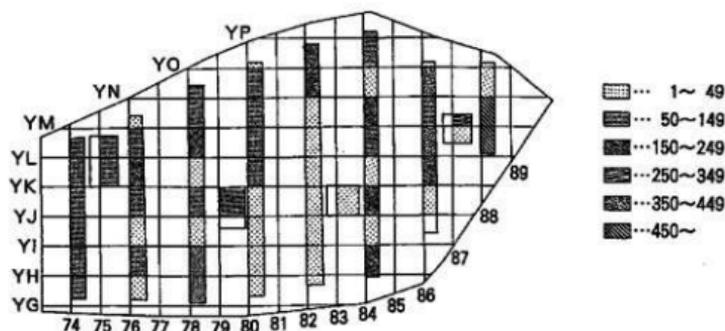
第44図 D.区礫群実測図(2)

はⅢa層～Ⅲd層で混在してみつか。本調査区遺構外で検出した礫石器は、大半がこれらの礫群に混在してみつかっている。また、加熱された礫も観察された。

5. 遺構外出土遺物

(1) 土 器 (第47図～58図)

D.区遺構外からは、13個体の復元・図化土器と5,765点の土器破片が出土した。これらは縄文時代(早期・前期・中期・後期・晩期)、弥生時代の時期に位置づけられるものであるが、その大半を縄文時代後期のものが占めている。



第45図 D区土器片出土分布状況

各時代の土器分布をみると早期土器群は調査区西部～北西部の台地縁辺部・第Ⅲd層下位、前期土器群は分布密度が低いものの、ほぼ全域の第Ⅲd層中位～下位から出土している。第5次調査の分布状況と照合するとその分布範囲はさらに台地内側へ広がっている状況がみられる。中期土器群は本年度初めて出土したものであり、調査区中央のYK-79・第Ⅲd層下位より一箇体土器として出土した。後期土器群は密度の濃淡はあるがほぼ全域から出土している。その密度は竪穴住居の周辺グリッドからの出土量が多く、第Ⅲd層中位～第Ⅲc層から出土している。晚期土器群は点数も少ないが調査区北部より出土している。

土器の分類については、時期ごとに群分し、器形、文様や施文技法によって分類した。なお、分類に関しては発掘調査報告書(5)を基本とした。

第I群土器 早期の土器 (第50図1～11, 15～17, 51図18～23)

1類：貝殻文、貝殻沈線文の土器 (50図1～3)

万座環状列石の西部～北西部台地縁辺部に集中して出土する傾向にある。50図1はYM-86グリッド・Ⅲd層下位から出土したもので胴部上半～口縁部の破片である。器形は山形口縁を呈し、口縁部が僅かに内湾する。沈線によって幾何学文が施文され、それに沿って貝殻文が施文されている。口縁部内面上端にも沈線・貝殻文が施文されている。胎土に砂粒を含み、焼成は極めて良好である。色調は浅黄褐色～褐灰色を呈する。

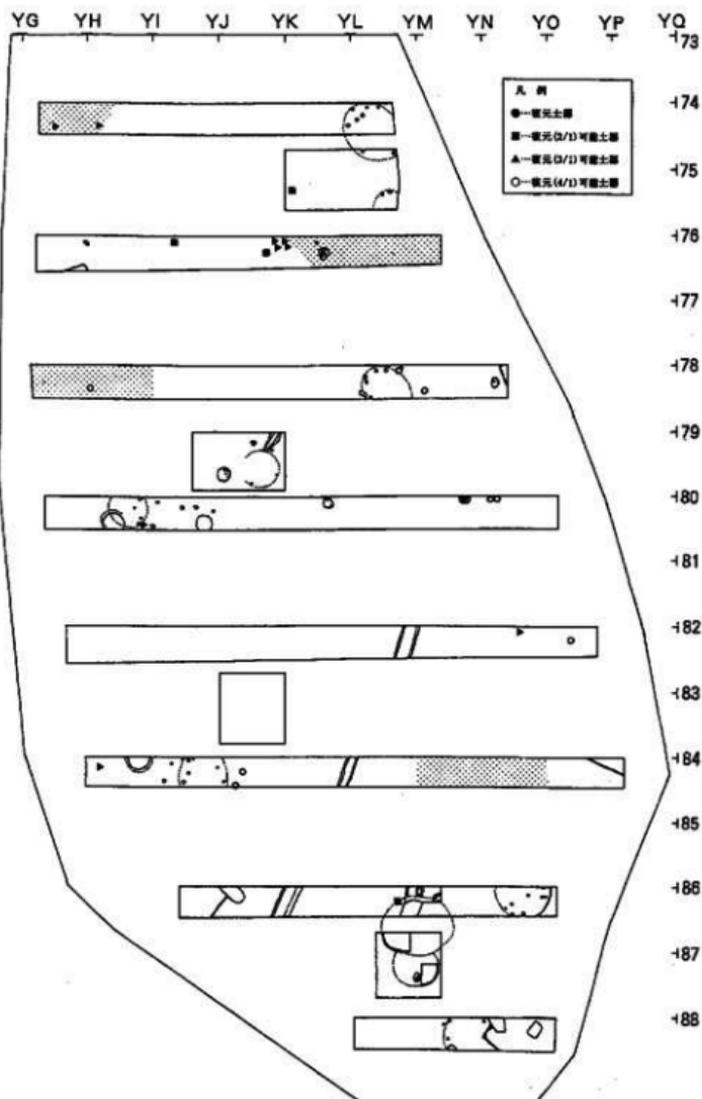
2類：沈線文の土器

本調査区からは出土していない。

3類：縄文の土器 (第50図4～11, 15～17, 51図18～23)

a-1：羽状縄文が施文された土器 (第50図5～11)

羽状縄文が施文され、平底を呈する土器を一括した。4～11は同一個体である。RL縄文を



第46図 D区復元可能土器出土分布状況

原体とした結節の羽状縄文が施文されている。11は底部破片で底面にも縄文が施文されている。胎土には細かな砂粒を多く含んでいることからいわゆる「粉ふき芋」のように粉を吹いている

状況である。焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。

a-2：羽状縄文が施文された土器 (51図18～23)

本類 a-1 と胎土が異なることから細分した。胎土に多量の植物繊維を含む。平口縁を呈する深鉢形土器で胴部上半に僅かにくびれを持つ。器面に複節 (R L R) により羽状縄文が施文されている。焼成は良好で、色調は褐色～黒褐色を呈する。

b：縄文が施文された土器 (第50図4、15～17)

単節の斜縄文を施文した土器を一括した。平口縁または緩やかな波状口縁を呈し、口唇部の断面が丸みを帯びるものと尖り気味のもの (4) がみられる。器形は、15・16から尖底または丸底を呈するものと考えられる。器面に R L 縄文を施文され、口唇部内面には指頭による圧痕が僅かながら認められる。胎土に砂粒のほか少量であるが植物繊維を含み、焼成は良好で、色調は黄褐色～褐色を呈する。

本群土器 1 類は早期中頃の物見台式に、3 類は早期後半の土器に比定され、a-1 は早稲田 5 類に、a-2 は早稲田 6c 類に比定される。b は赤御堂式に比定が可能である。

第Ⅱ群土器 前期の土器 (第50図12～14、51図24～34)

1類：地文上に沈線文、押し沈線文が施文された土器

本調査区からは出土していない。

2類：連続刺突文が施文された土器

本調査区からは出土していない。

3類：縄文または特殊な縄文が施文された土器 (第50図12～14)

粗紐縄文が施文され、胴部に膨らみを持つ土器である。内面は光沢を帯びるほどに調整がされている。胎土には植物繊維は含まれず、焼成は良好で、極めて堅固である。色調は橙色～にぶい橙色を呈する。

4類：単軸結状体の圧痕文が施文された土器 (第51図24～34)

幅の狭い口縁部文様帯に単軸結状体による 3～8 条の平行圧痕文が施文されるもので、口唇部及び口唇部と胴部の境界に逡らした隆起帯には竹管や棒状工具により刺突文が施文されている。胴部には木目状燃系文、結節の羽状縄文が施文されている。胎土にはほとんど植物繊維の混入はみられない。内面は光沢を帯び、焼成はよく、色調は橙色、にぶい赤褐色を呈する。

本群土器 4 類は円筒下層 d 式に比定される。また 3 類は胎土にほとんど植物繊維を含んでいないことから円筒下層 d 式の土器に伴った胴部破片と思われる。

第Ⅲ群土器 中期末～後期初頭の土器 (第47図1、58図185～187)

1類：磨消縄文の土器

これまでの調査では、出土していなかった土器群である。

47図1は、大小の山形口縁を持つ深鉢型土器で器高30.8cmを測る。YK-79・第Ⅲd層下位より一個体土器として出土した。口縁部と胴部文様帯に分けられる。口縁部上端に2条の縄文圧痕文を施文し、大小の山形口縁部直下より2条の刺突文を胴部上端まで垂下している。胴部文様はさらに2段に区画され、上部・下部文様はボタン状貼付文直下より「ノ」字状文を垂下させ、その先端に隆線が貼り付けて主文様としている。58図186～188は口縁部が内湾する深鉢形土器破片で、中期末の土器の様相を示している。

第Ⅳ群土器 後期初頭から前葉の土器 (第47図2～49図、52図～56図139)

1類：隆線文、隆沈文が施文された土器 (第52図37～48)

隆線文、隆沈文が施文されている土器を一括した。深鉢形土器、壺形土器がみられる。

いわゆる十腰内I式、それ以前の後期初頭の土器に施文された隆線文については幅広く、厚みのないものが一般的であったように思うが、43、47、48を除いたものは、幅も狭く、隆線に丸みを帯びており、後期の隆線や隆沈文と趣を異にしている。

37、38は、小さな山形口縁を呈する深鉢形土器で隆線文によって文様が施文される。文様帯は、胴部中程まで達するものと考えられる。42は、粘土紐貼り付けの上さらに棒状工具で押捺している。46は胴部上半に隆線で区画された内部に沈線を施文したものであり、東北地方中部の後期初頭～前葉土器の様相を持っている。

隆沈文の施文された土器は、波状口縁を呈する深鉢形土器、壺形土器がみられる。文様帯は両者とも胴部下半まで及ぶものが多い。深鉢形土器は口縁部・胴部文様帯に区画され、口縁部文様帯には楕円形文や円形文が多用される。壺形土器は口縁部が無文となる。胴部文様帯は幅広となり、主文様として波状文(巴文)を縦位連結させ、楕円形文・円形文・幾何学文を付加するものがみられる。

胎土に大きめの砂粒を含むものが多い。焼成は良好で、堅固なものが多く、色調は浅黄橙色、褐灰色、橙色を呈する。

2類：地文上に沈線文が施文された土器 (第47図2、52図49～56)

地文上に沈線によって文様を施文したものを一括した。山形口縁を呈する深鉢形土器が主体となる。地文としてはLR縄文、RL縄文、L燃糸文が施文される。地文上に引かれる沈線は幅の広いものが多い。47図2は山形口縁を呈するもので、文様帯は胴部中程まで及び、平行沈線で区画された上下の文様帯内には波状曲線文が施文されている。焼成は良好で、色調はにぶ

い赤褐色を呈する。

3類：沈線が施文された土器（第47図3、53図57～54図100）

a：主文様が縦位に施文される土器（第53図57～66、54図78～81）

主文様が縦位に施文された土器を一括した。波状口縁を呈した深鉢形土器、壺形土器、鉢形土器が主体となる。なお、第2号土坑から出土した鉢形土器は、器高24.4cm、口径29.3cmを測る極めて大型のものである。深鉢形土器の文様帯は胴部中程まで、壺形土器は胴部が最も膨大した胴部下半まで、鉢形土器は胴部上半や底部まで及ぶものがある。深鉢形土器は、主文様として垂下する平行沈線によって区画された文様帯内に楕円形文や弧線文、曲線文が施文されるほか、31図9は逆「U」字文を等間隔に配置し、弧線文で連結するものもある。壺形土器は胴部上端に隆沈文を配し、胴部文様帯と口縁部無文帯を区画しているものがみられる。重層・ウロコ状に配置された弧線文や縦位に連結された「S」字文を主文様に弧線文・楕円形文が付加されるものもある。鉢形土器では文様帯は底部まで及び、縦位の連結「S」字文や曲線文が施文されている。焼成は良好で、色調は黄橙色、明赤褐色、明黄褐色、浅黄橙色、褐灰色、橙色、にぶい褐色を呈する。

b：主文様が横位に施文された土器（第53図67～77）

主文様が横位に施文される土器を一括した。波状・平口縁を呈する深鉢形土器、山形口縁を呈する鉢形土器が主体となるほか、壺形土器や蓋形土器もみられる。深鉢形土器では、隆沈文で文様帯を区画するものがあるほか、波状・山形口縁の頂部に粘土紐の装飾的貼り付けが行われるものもある。文様帯は深鉢形土器で胴部中程～下半に、壺形土器で胴部上半に区画される。主文様として入組文がされて、連結文として弧線文や曲線文が付加されている。

焼成は良好で、色調はにぶい褐色、にぶい橙色、暗赤褐色などを呈する。77には赤色顔料の塗布が認められる。

c：幾何学的な文様が施文される土器（第47図3、54図84～95）

幾何学的な文様が施文される土器を一括した。平口縁、山形口縁を呈する深鉢形土器、鉢形土器が主体となるほか、浅鉢形土器、壺形土器が伴う。文様帯は深鉢形土器で胴部中程まで、鉢形土器、浅鉢形土器、壺形土器は底部付近まで及ぶものがある。文様は、楕円形文を重層させ三角形文とするものや楕円形文を組み合わせて幾何学的な文様とするものがある。焼成は良好なものが多く、色調はにぶい黄褐色、褐灰色、にぶい褐色を呈する。

47図3は平口縁を呈する深鉢形土器で、文様帯は口縁部・胴部に区画されている。口縁部文様帯に等間隔に粘土紐の貼り付けが行われる。胴部文様帯は楕円形文を重層させ、三角形文としている。焼成は良好で、色調は浅黄橙色、灰褐色、橙色、にぶい褐色を呈する。本類土器の中には色彩の施されたものが認められる。

d : 格子目状、斜行平行沈線が施文された土器

格子目状、斜行平行沈線が施文された土器を一括した。平口縁の深鉢形土器が主体となる。口縁部は無文となり、文様帯は胴部下半まで及んでいる。最も見受けられる文様は格子目状であるが、これまでの調査では、矢羽根状の文様が施文されるものもみられた。焼成は良好で、色調はにぶい橙色、にぶい褐色、暗褐色を呈する。

4類：帯縄文が施文された土器（第47図4、48図5～6、55図101～112）

本来ならば遺跡の時期を示す土器であるが、本調査区からの出土は少なかった。

a : 主文様が横位に施文される土器（第47図4、48図5～6、55図104・107～109）

帯縄文が横位方向に展開する土器を一括した。深鉢形土器、鉢形土器、壺形土器が主体となるほか肩口土器がみられる。深鉢形土器は平口縁・波状口縁を呈し、口縁部文様帯には楕円形文、長方形文が多くみられる。胴部文様帯は中程～下半に及ぶ。鉢形土器は波状口縁を呈するものが多く見受けられるほか、つまみ出しによる小さな突起を持つものもある。焼成は良好なものが多く、色調は褐色、褐灰色、にぶい橙色、にぶい褐色などを呈する。

48図5は平口縁の深鉢形土器で胴部文様帯は下半まで及ぶ。主文様として入組文が施文され、沈線間にはLR縄文が充填されている。焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。48図6は平口縁の深鉢形土器で、胴部の最大張部付近で文様帯が上下に二分されている。上部文様帯には入組文が施文され、三角形文がその隙間に付加されている。下部文様帯には入組文（巴文）が主文様として施文され、波頭文が付加されている。沈線間にはRL縄文が施文されている。焼成は良好で、色調はにぶい赤褐色を呈する。48図6の上部文様帯と48図5の文様はネガティブな関係にある。第47図4は装飾的な突起を捻り出した鉢形土器で、主文様として未発達な入組文が施文されている。沈線間にはLR縄文が施文されている。色調は橙色を呈する。

b : 幾何学的な文様が施文される土器（第55図106・110）

階段状文や幾何学的な文様が施文された土器を一括した。平口縁・小さな山形口縁を呈する深鉢形土器が主体となる。山形口縁を呈する土器にはその頂部からS字文などを垂下するものもある。階段状文の施文される土器は文様帯が胴部中程まで及び、1～2段となる。焼成は良好なものが多く、色調は黒褐色、にぶい橙色を呈する。

c : 幅の広い帯状文が施文される土器

本調査区からは出土しなかった。

後期前葉から中葉をつなぐ土器に位置づけられるものである。

本群土器は縄文時代後期初頭から前葉に位置づけられるものを一括した。1類には東南北部の土器様式を持ったものもあり、強いて比定するならば後期初頭の宮戸Ⅰ式、南境式や袖塚式

土器に類似性を見いだすことができる。2類は東北部の前十層内式、3類は十層内Ⅰa式に比定される。4類は広義の十層内Ⅰb式に比定され、そのうち4類aが大湯式に比定できよう。

第Ⅳ群土器 後期中葉の土器 (第55図115～139)

1類：口縁部に幅の狭い平行沈線が施文された土器 (第55図115～121)

口縁部に幅の狭い平行沈線文を施文した土器を一括した。深鉢形土器、鉢形土器、台付土器が主体となる。深鉢形土器は胴部から大きく「朝顔」に内湾気味に開く口縁が特徴的であり、口唇部は肥大化する。これら口縁部には3～7条の平行沈線が施文され、弧線文、刺突文、S字文で連結されている。沈線間には節の細かなRL・LR縄文が施文されている。焼成は良好で、色調は浅黄褐色、赤褐色、褐灰色を呈する。

48図7は山形口縁を呈する台付土器で、底部から僅かに内湾気味に口縁部まで立ち上がっている。口縁部上端と胴部中程に2条の平行沈線を施文し、頂部から向かい合う弧線文を付加している。沈線間にはLR縄文が施文されている。焼成はよく、色調は橙色を呈する。

2類：磨り消し縄文が施文された土器

アメーバー的な幾何学文を施文したものを一括した。口縁部が「朝顔」状に開く台付深鉢形土器、平口縁を呈する広口壺が主体となる。沈線内には節の細かなRL縄文が多用される。127～136は同一個体である。焼成はよく、色調は褐灰色、橙色を呈する。

3類：磨り消し縄文に刺突が伴う土器 (第56図122～126)

アメーバー的な幾何学文を施文し、沈線の内側に沿って刺突文が連続して連なるものを一括した。これまでの出土例から台付土器で、口縁部が「朝顔」状に開くものである。口唇部は肥大化し裝飾突起(55図139)が付けられる。沈線間には節の細かなLR縄文が多用される。焼成は良好で、色調は灰黄褐色、にぶい褐色、黒褐色、赤褐色などを呈する。

4類：沈線文系の土器

文様構成は本類aと類似するものである。55図121は縄文が施文されず、丁寧な磨きが行われている。沈線の下二段を連結するように斜位の刻みが連続して施されている。焼成は良好で、色調は暗褐色を呈する。

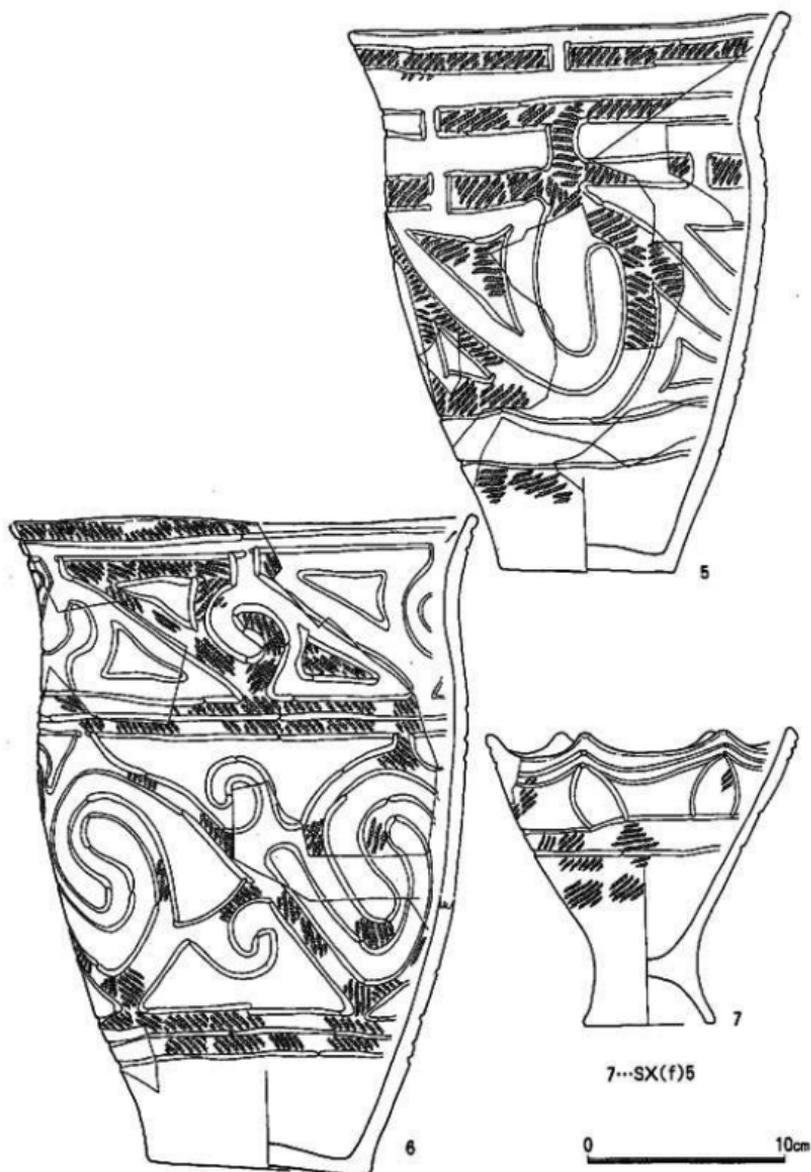
本群土器は、縄文時代後期中葉に位置づけられるもので、東北地方北部の十層内Ⅱ式、Ⅲ式に、東西南部の宝ヶ峯式土器に比定される。本群土器については第2号壜穴住居跡からまとまった資料が出土している。

第Ⅴ群土器 晩期の土器

1類：雲形文が施文された土器 (56図140～144)



第47图 D区遺構外出土土器実測図(1)

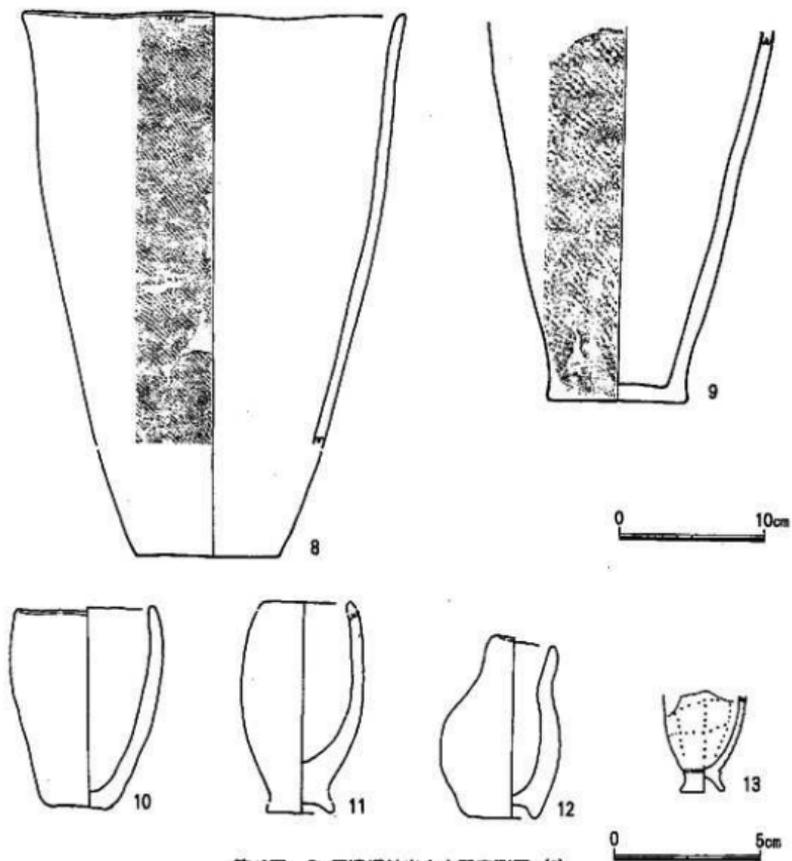


第48图 D₂区遺構外出土土器実測図(2)

調査区のほぼ中央から出土した。同一個体の浅鉢形土器で上部を欠いている。口縁部に羊歯状文、胴部に雲形文が施文されている。LR縄文が施文されている。焼成は良好で、色調は褐色～暗褐色を呈する。

本群土器は、縄文時代晩期の大洞BC式に比定することができる。

第VI群土器 後期から晩期の土器 (第57図144～169、58図170～177)



第49図 D.区遺構外出土土器実測図(3)

第2表 遺構外出土土器（復元・図化土器）観察表

図・番号	出土位置	法	量	文	色	調
		(器高×口径×底径)			そ	の
					他	
47図1	YK-79 Ⅲd層中位	30.8×21.0	×10.9	「ノ」字状文、 RL縄文	にぶい黄褐色	8つの山形口縁
47図2	YO-86 Ⅲd層下位	19.7×26.0	×(7.0)	渦巻文 LR縄文	にぶい赤褐色	4つの山形口縁
47図3	YM-86 Ⅲd層中位	20.8×17.3	×8.5	三角形区画文	にぶい黄褐色	平口縁
47図4	YJ-76 ⅢC層下位	12.4×19.6	×7.0	波状文 LR縄文施文	橙色	
48図5	YH-78 Ⅲb層下位	29.2×21.7	×8.9	入組文(巴文) LR縄文	にぶい橙色	平口縁
48図6	YM-78 Ⅲb層下位	34.4×24.0	×11.4	入組文(巴文) RL縄文	にぶい赤褐色	平口縁
48図7	YK-79 Ⅲd層上位	15.2×16.0	×6.8	弧状文付加 LR縄文	橙色	6つの山形口縁
49図8	YK-76 Ⅲb層下位	()×26.0	×()	LR縄文	にぶい赤褐色	平口縁
49図9	YL-75 Ⅲd層上位	()×()	×9.8	RL縄文	灰褐色	
49図10	YJ-78 ⅢC層中位	7.1×4.6	×2.2	無文	浅黄褐色	
49図11	YM-86 Ⅲd層上位	7.3×3.0	×2.3	無文	褐灰色	
49図12	YM-75 Ⅲd層中位	6.4×2.3	×2.4	無文	にぶい黄褐色	
49図13	YM-87 ⅢC層中位	()×()	×1.6	刺突文	赤褐色	

本群には、縄文（無節・単節）、縋糸文、条痕文、無文、刺突文の土器を一括した。数量的には非常に多く出土している。

1類：無文の土器（第49図10～13、57図144～146）

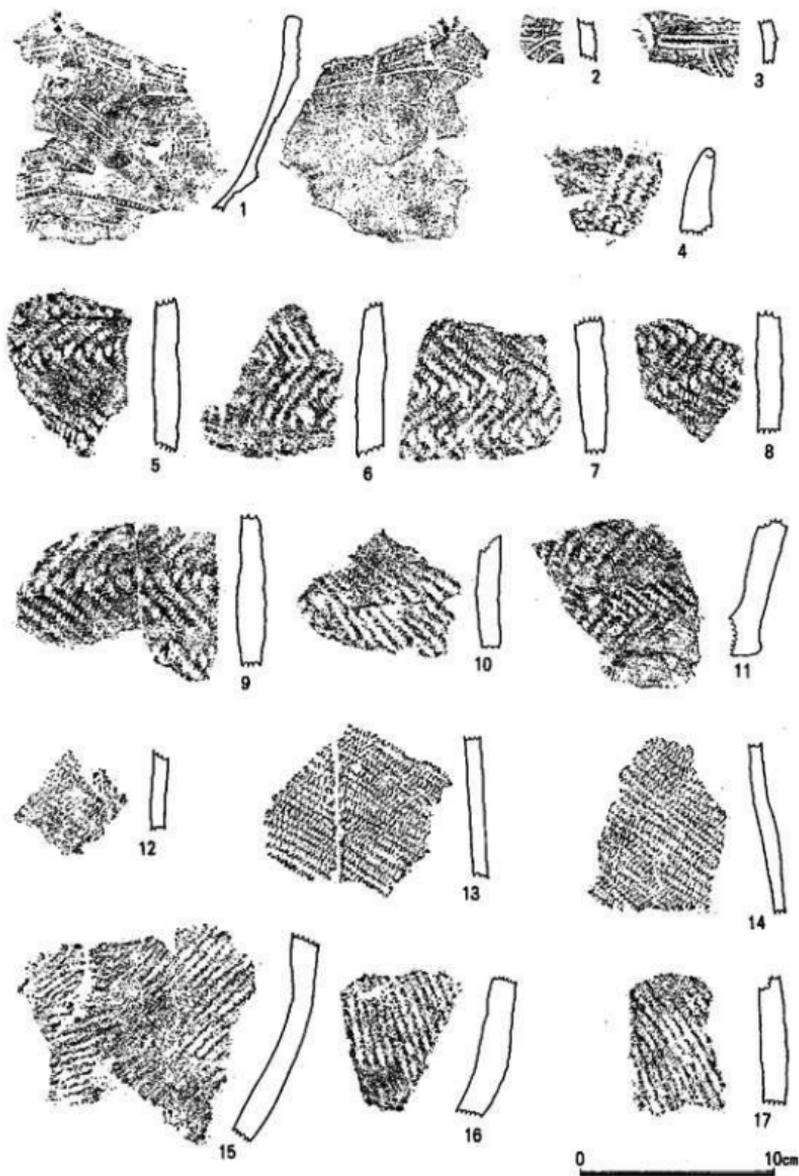
深鉢形土器、鉢形土器、壺形土器のほかミニチュア土器がみられる。深鉢形土器は平口縁、波状口縁を呈し、口唇部に刻みを有するものもある。器外面は調整が施されている。焼成は良好なものが多く、色調は褐灰色、にぶい黄褐色、黒褐色などを呈する。

2類：縄文が施文された土器（第57図147～162）

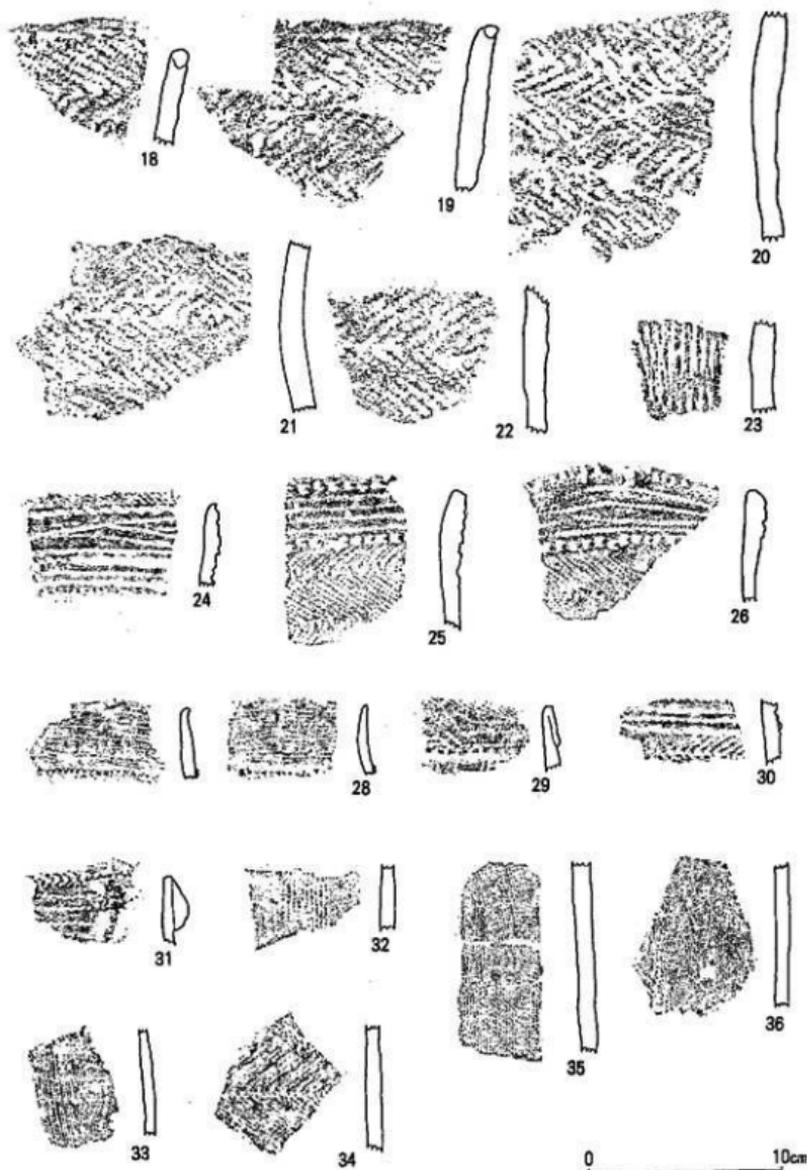
本類には無節、単節、複節の縄文が施文されたものを一括した。

a：無節の縄文が施文された土器（第57図147）

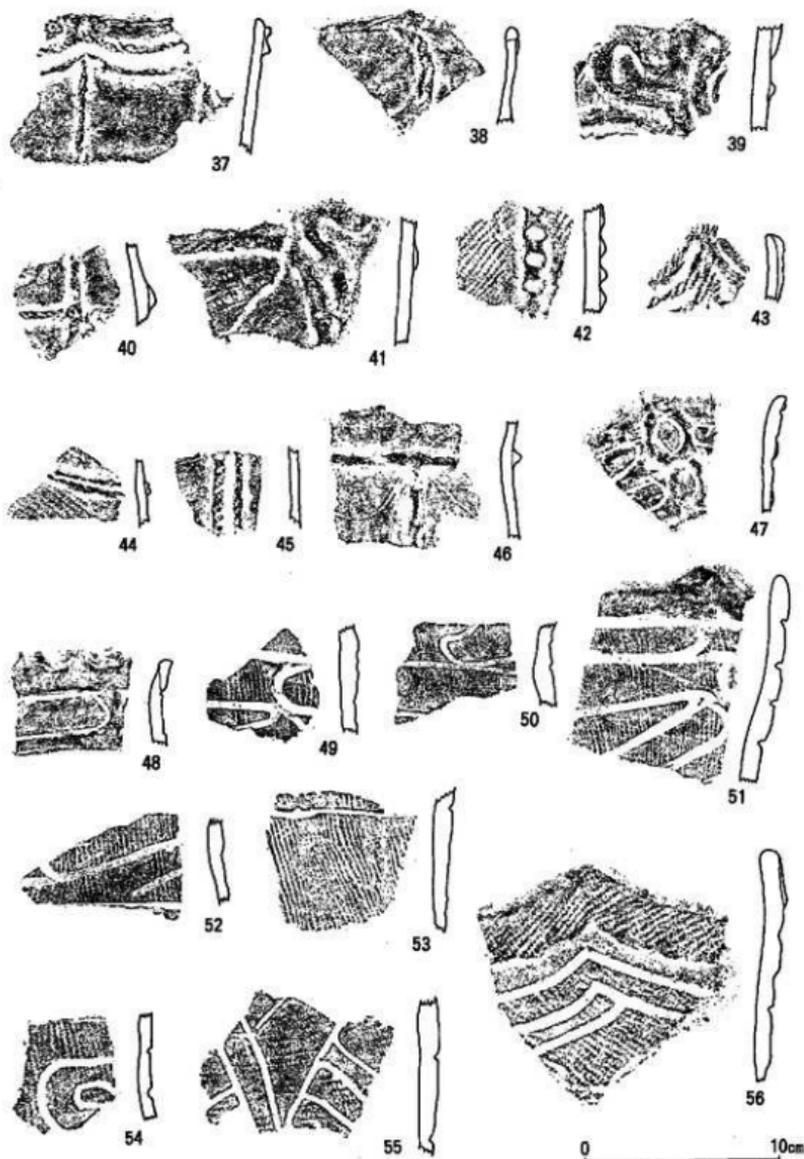
無節の縄文が施文された土器を一括した。平口縁を呈した深鉢形土器が多い。このほかに壺



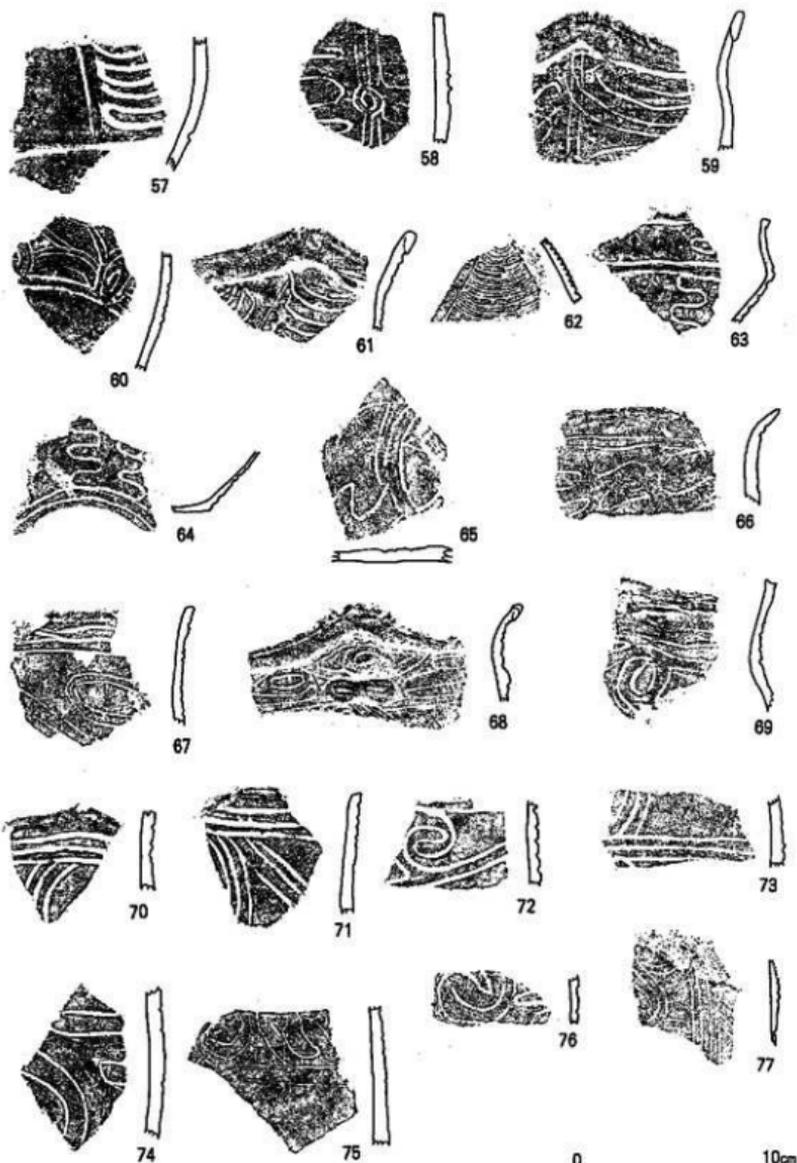
第50图 D₁区遺構外出土土器拓影图 (1)



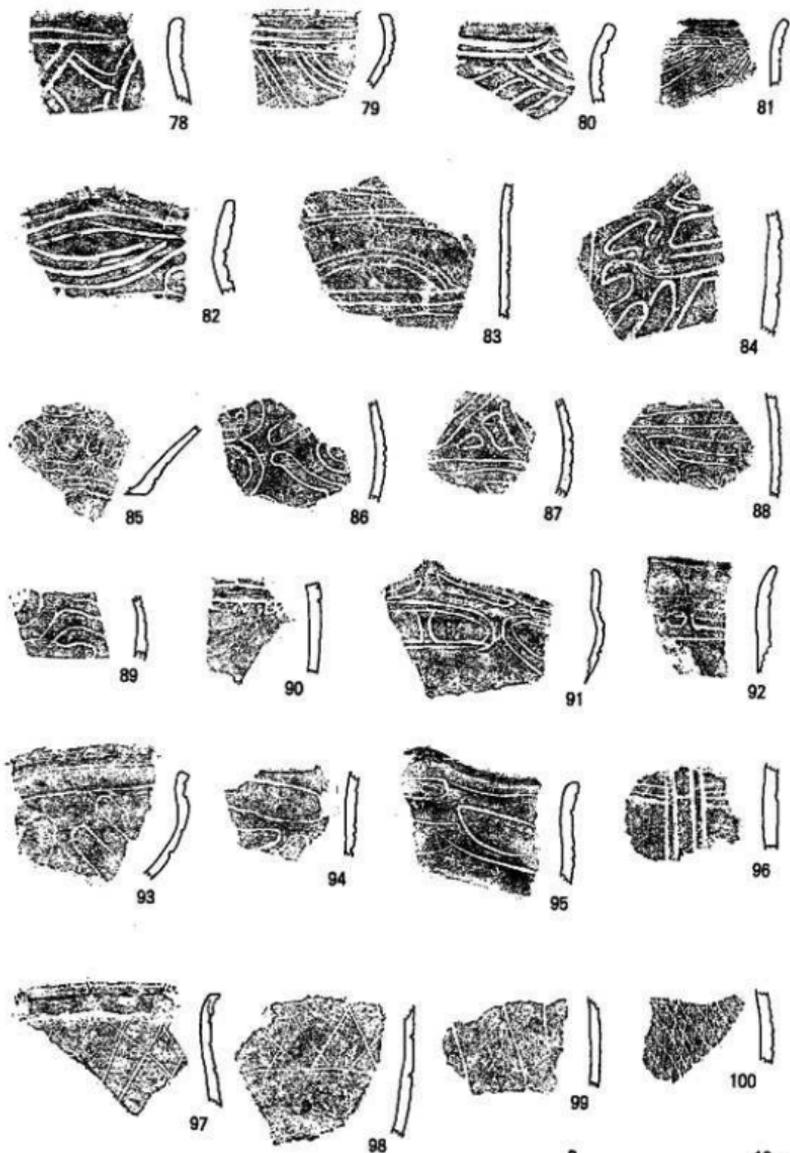
第51图 D₂区遺構外出土土器拓影图 (2)



第52图 D₂区遗址外出土土器拓影图 (3)

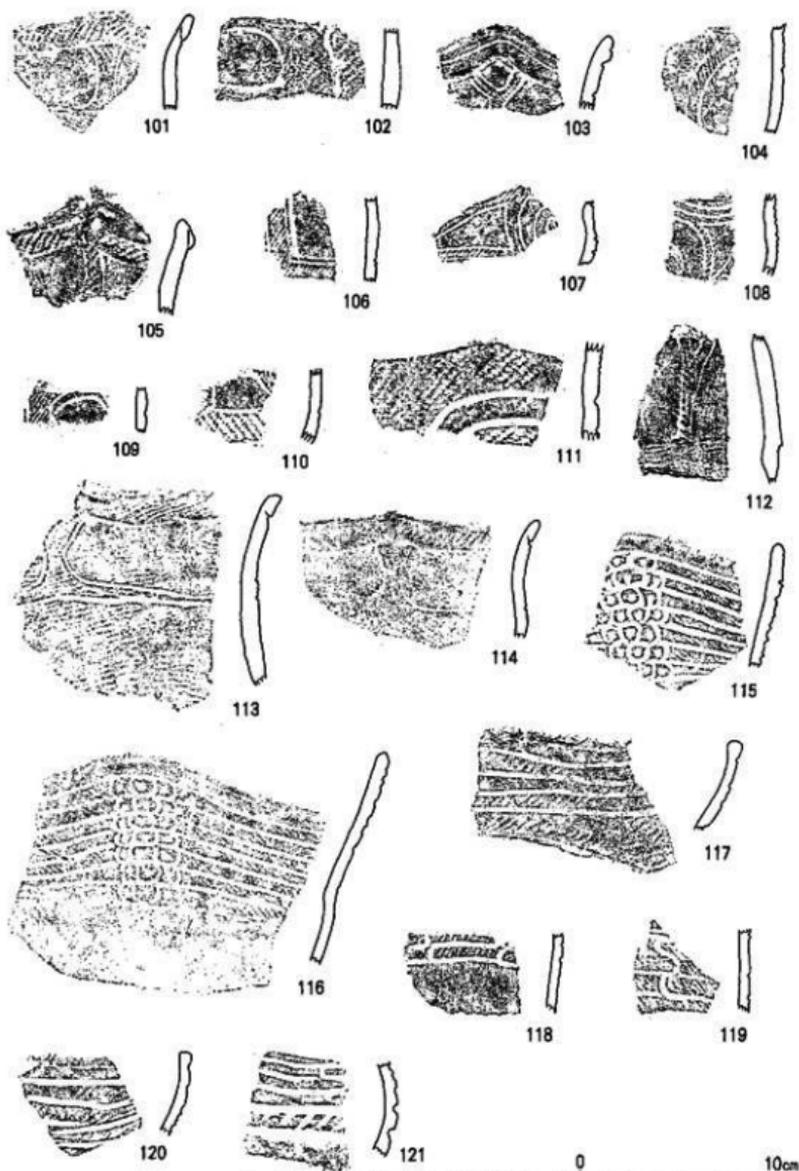


第53图 D.区遺構外出土土器拓影圖(4)

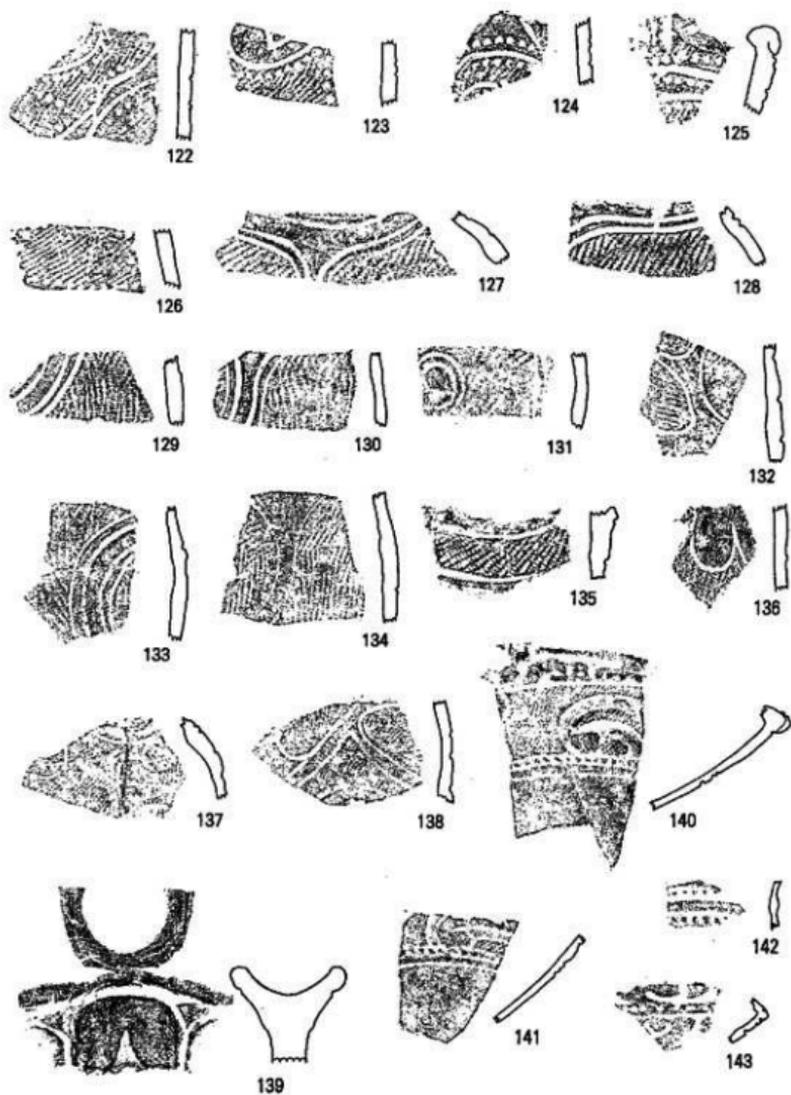


第54图 D.区渡耦外出土土器拓影图 (5)

0 10cm

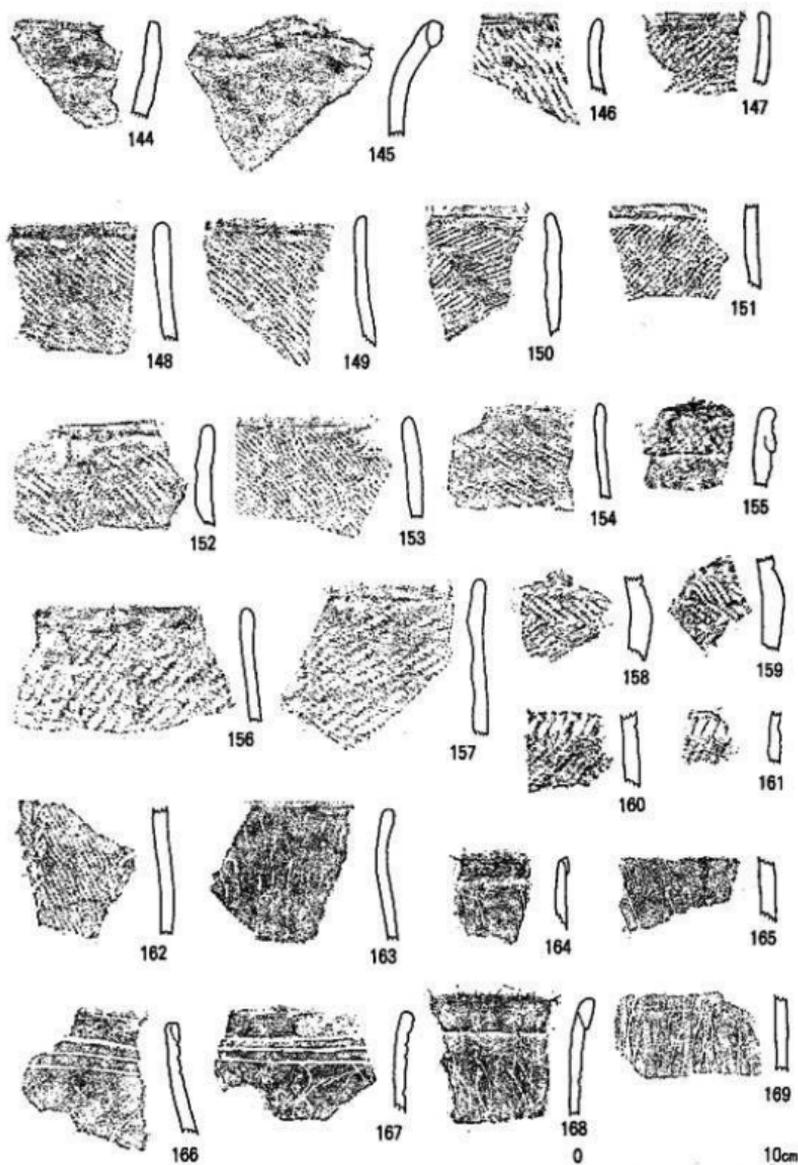


第55图 D₁区遺構外出土土器拓影图(6)



第56图 D.区遺構外出土土器拓影图 (7)

0 10cm

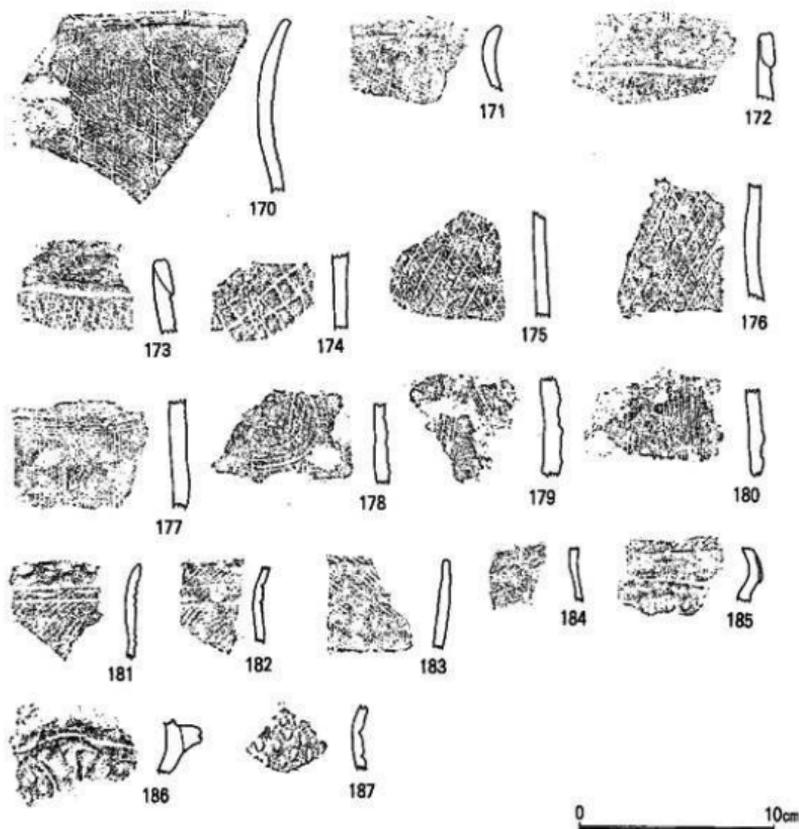


第57图 D₂区遺構外出土土器拓影图 (8)

形土器がみられる。口縁部が直線的に立ち上がるものと、外反して立ち上がるものがみられる。壺形土器においては大きく外反するものもある。焼成は良好で、色調は褐灰色、にぶい褐色を呈する。

b：単節の縄文が施文された土器（第49図8～9、第57図148～162）

単節の縄文が施文された土器を一括した。節の大きいもの、細かなものがみられる。LR・RL縄文のいずれもみられ、LR縄文が多用される。57図162には綾くり文が、57図159～162には竹管や筒状工具による刺突文がみられる。平口縁を呈する深鉢形土器が主体を占め、このほかに壺形土器や鉢形土器がみられる。深鉢形土器の口縁部は直線的に立ち上がるもの、外反



第58図 D区遺構外出土土器拓影図(9)

して立ち上がるもの、内湾気味に立ち上がるものがみられる。器外面に煤状炭化物が付着するものが多くみられる。焼成は良好のものが多い。

49図8は、平口縁を呈するもので、口縁部はわずかに外反して立ち上がる。器全面にR L縄文が施文されている。焼成は良好で、色調は呈する。49図9は、口縁部を欠く深鉢形土器で、器面に撚りのあまいR L縄文が施文されている。

181図181～182は鉢形土器で、地文上に平行沈線が施文後、短刻線が付加されるものである。晩期土器に伴う粗精土器である。

3類：撚糸文が施文された土器（第57図164～58図177）

短軸絡条帯、網目状撚糸文が施文されたものを一括した、平口縁を呈する深鉢形土器が主体となり、壺形土器もみられる。口縁部上端に沈線文を施文し、縄文帯と区画するものがある。口縁部が折り返しとなるものが多く見受けられる。無節のL縄文が多用される。焼成は良好で、色調は浅黄橙色、橙色、にぶい褐色、黒褐色などを呈する。

4類：条痕文が施文された土器（第58図178～181）

平口縁を呈した深鉢形土器が圧倒的に多い。条痕は器面に対して縦位、横位、斜位に施文される。焼成は良好で、色調は明褐色、橙色を呈する。

5類：刺突文が施文された土器（第49図13）

49図13は、口縁部を欠くミニチュア土器で、格子目状に刺突文が施文されている。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

第七群土器 弥生時代の土器

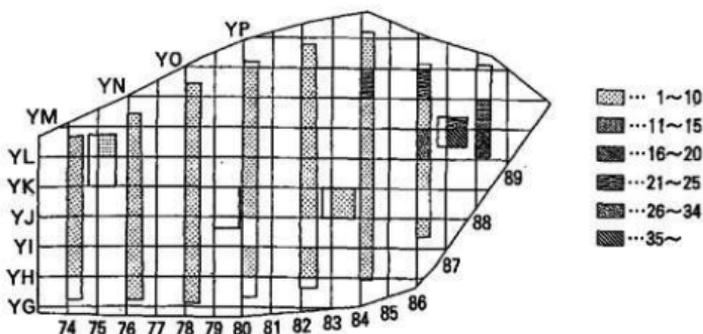
1類：撚糸文が施文された土器（第58図183～184）

調査区北部・YM-86グリッド・Ⅲb層上位より出土した。L縄文の撚糸文・綾くり文を伴う撚糸文が施文されている。焼成はよく、色調は橙色を呈する。

本群土器は、弥生時代後半のいわゆる小坂X式に比定することができる。

② 石 器

D₁区遺構外より出土した石器は、剥片石器81点、礫石器が129点の総計210点である。遺物は調査区の北部に集中する傾向がみられる。遺物の大半は遺物包含層Ⅲa～Ⅲd層からの出土である。なお、遺構検出区域と遺物の分布が集中する区域が重複する部分については、遺構確認面及び構築面の上面からの層位のもをグリッド出土量とした。石器の分類については、これまでの調査に準じ、形態別に類別・細分した。



第59図 D区石器出土分布状況

石 鏃 (第60図)

形態から2群6類に分類した。石材は硬質頁岩が多く、珪質頁岩、黒・赤色頁岩と続く。

1群…有茎石鏃で、基部形態から以下のように細別した。

a…平基有茎石鏃で、本調査区からは3点出土した。

利離調整はていねいである。(1~3)

b…凹基有茎石鏃で、本調査区からは出土しなかった。

基部に挟れをもつものである。

c…凸基有茎石鏃で、本調査区からは2点出土した。

基部は細長く、全体的に厚みがある。(4、7)

2群…無茎石鏃で、基部形態から以下のように細別した。

a…平基無茎石鏃で、本調査区からは出土しなかった。

全体的に薄く、調整は丁寧である。

b…凹基無茎石鏃で、本調査区からは2点出土した。

全体的に薄く、調整は丁寧である。(5、6)

c…尖基石鏃で、本調査区からは1点出土した。

基部は細長く、全体的に厚みがある。(8)

石 鏃 (第60図)

形態から3群に分類した。石材は硬質頁岩、珪質頁岩である。

1群…つまみ部と鏃部の境が明確なもので、本調査区からは1点出土した。鏃部、つまみ部

に丁寧な利離調整がなされている。(9)

2群…つまみ部と鏃部の境が明確でないもので、本調査区からは出土しなかった。つまみ部

から鏃部にかけて逆三角形になり、比較的丁寧な利離調整がなされている。

3群…剥片の一部に鑿部を作り出しているもので、本調査区からは1点が出土した。鑿部には破損や摩耗が著しい。(10)

石 匙 (第60図)

形態から2群に分け、さらにつまみ部を上にして主要刃部が作り出される位置から、5類に細分した。石材は硬質頁岩、珪質頁岩、黒色頁岩である。

1群…縦型石匙である。刃部先端が破損しているものがみられる。

a…主要刃部が、一側縁に作り出されるもので、本調査区からは出土しなかった。

b…主要刃部が二側縁に作り出されるもので、本調査区からは、1点出土した。(11)

c…主要刃部が先端部に作り出されるもので、本調査区からは出土しなかった。

2群…横型石匙である。刃部の作りはいいである。

a…主要刃部が一側縁に作り出されるもので、本調査区からは出土しなかった。

b…主要刃部が二側縁に作り出されるもので、本調査区からは出土しなかった。

c…主要刃部が三側縁に作り出されるもので、本調査区からは出土しなかった。

石 鑿 (第60図)

形態別に2群に分類した。石材は硬質頁岩である。

1群…基部に対して刃部の幅が広くなる、撥状のものである。本調査区からは出土しなかった。

1群…基部に対して刃部の幅がやや広くなる、台形状のものである。本調査区からは、3点出土した。(12, 13)

播 器 (第60図, 61図)

打面を上にして、主要刃部が作り出される位置および、刃部の形態別に5群に分類した。石材は硬質頁岩、珪質頁岩が大半を占め、黒色頁岩もみられる。

1群…主要刃部が左、右、先端いずれか一側縁に作り出されるもので、33点出土した。(14, 15)

2群…主要刃部が二側縁に作り出されるもので、13点出土した。(16, 17)

3群…主要刃部が三側縁に作り出されるもので、5点出土した。(18, 19)

4群…主要刃部が周縁全域に作り出されるもので、2点出土した。(20)

5群…刃部に抉れをもつもので、本調査区からは13点出土した。(21)

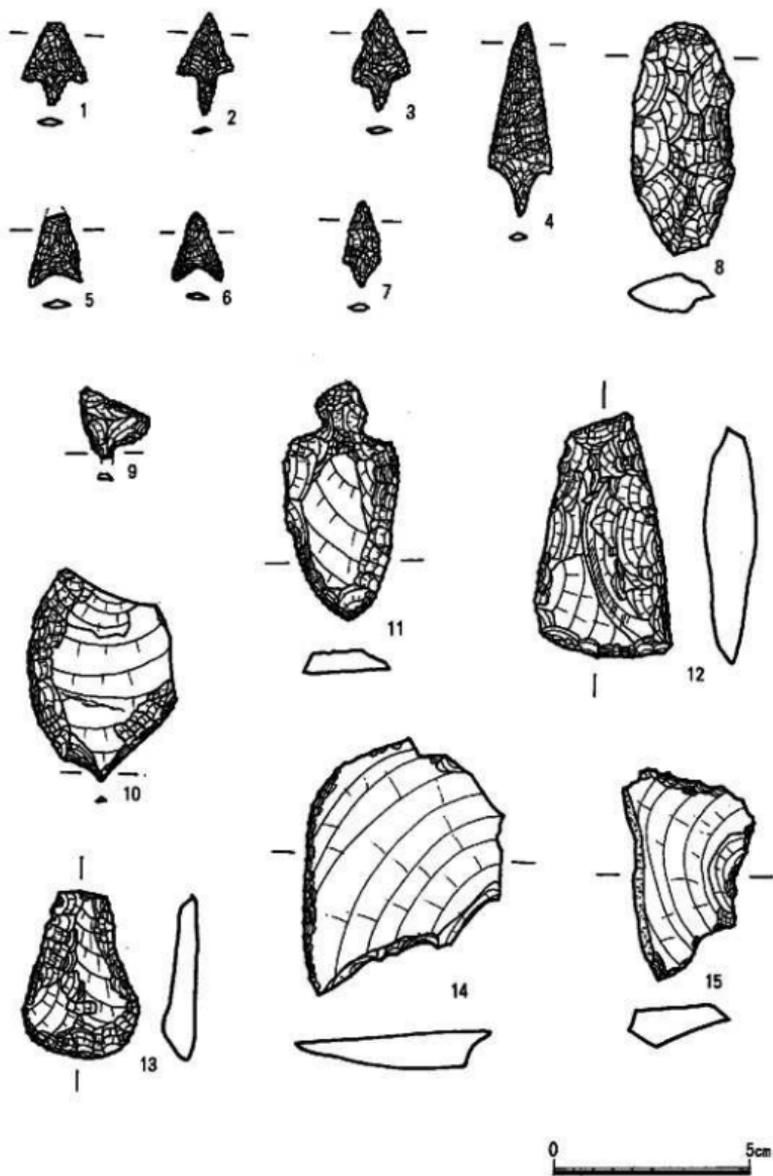
石 斧 (第61図)

定角式磨製石斧が、1点出土し、基部は凹石として転用されている。石材は蛇紋岩である。

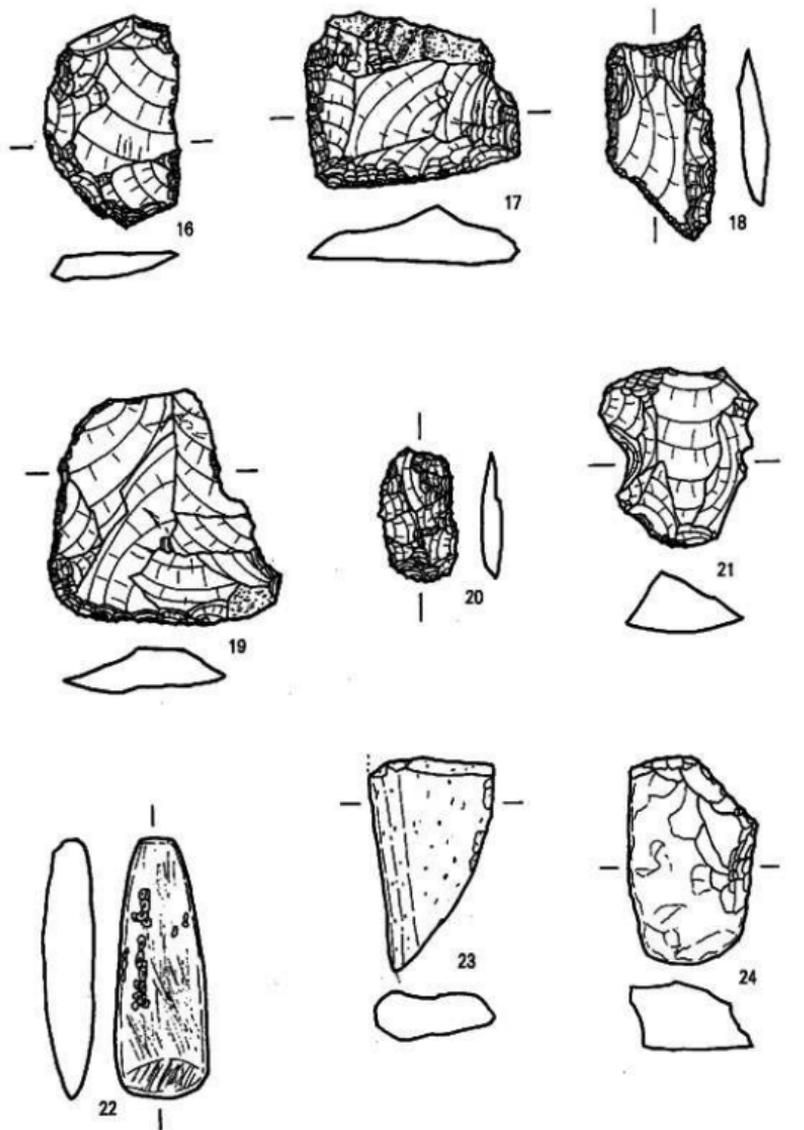
(22)

石 錘

扁平な川原石の一部が打ち欠かれているもので、本調査区からは出土しなかった。



第60图 D.区遺構外出土石器実測图 (1)



第61图 D₂区遗址外出土石器类图(2)

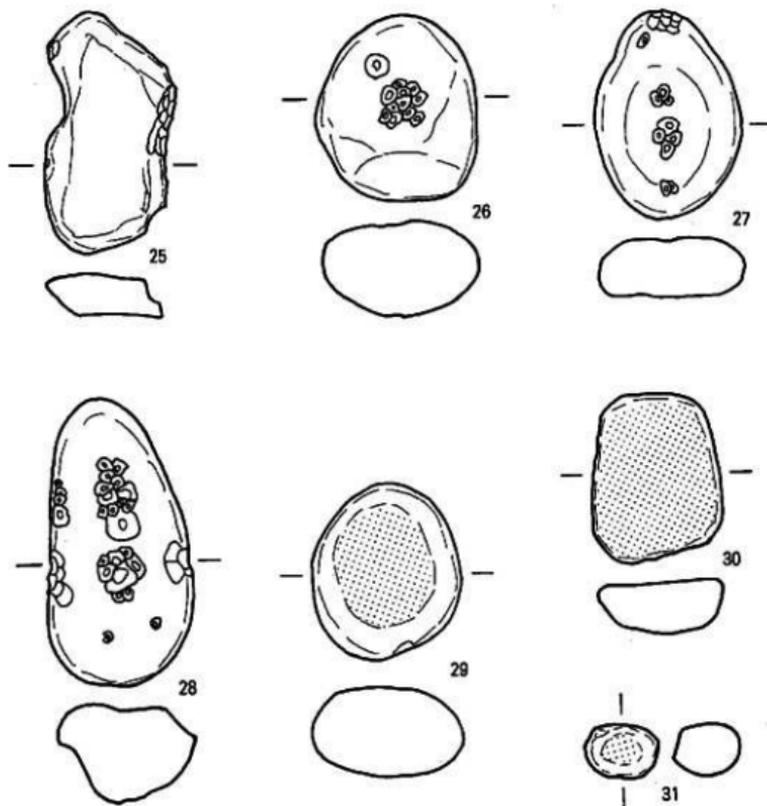
敲 石 (第62図)

円礫、扁平な川原石の一部が打痕によって打ち欠かかれているもので、本調査区からは30点出土した。石材は凝灰質泥岩、泥質凝灰岩が多く、安山岩、石英安山岩、泥岩もみられる。

(25)

凹 石 (第62図)

円礫、棒状の礫、扁平な川原石に使用痕として凹が観察されるもので、84点出土した。両面を使用しているものがほとんどである。磨面が観察されるものもみられる。石材は石英閃緑王分岩、凝灰質泥岩、泥質凝灰岩、砂質凝灰岩、石英安山岩、泥岩である。(26~28)



第62図 D区遺構外出土石器実測図 (3)



磨石 (第62図)

円礫、扁平な川原石に磨痕が観察されるもので、12点出土した。石材は石英閃緑王分岩、凝灰質泥岩、石英安山岩、凝灰質泥岩泥岩、砂質泥岩、瑠璃である。(29~31)

石皿 (第61図)

1点出土した。欠損品で、石材は軽石質凝灰岩である。(23)

(3) 土製品

D区遺構外より出土した土製品は、土偶3点、三角形土製品1点、板状土製品1点、土器片利用土製品29点が出土した。調査区の北部から南部にかけてまばらに出土した。

土偶 (第64図)

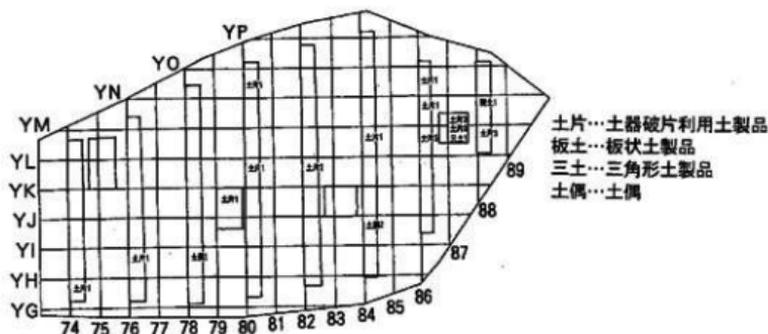
3点出土し、いずれも板状土偶である。1は土偶の胴部下半で、格子状の沈線文が施文され突起状のヘソが表現されている。また、胴部中央には単刻沈線による菱形状文で正中線が表現されている。2は胴部下半部の破損品で、腰部と思われる張り出しをもつ。脚部は省略されているが、連続する刺突により胴部と脚部とが区画され、股部には陰部と思われる深さ1.8cmの穿孔が観察される。中央には沈線により正中線が表現され、腰部側面にも穿孔が観察される。3は破損品の胴部である。突起状の乳房とヘソが表現され、前面には二重の連結する刺突により、背面には細い沈線による単刻文により胴部形の輪郭が描かれている。

三角形土製品 (第62図4)

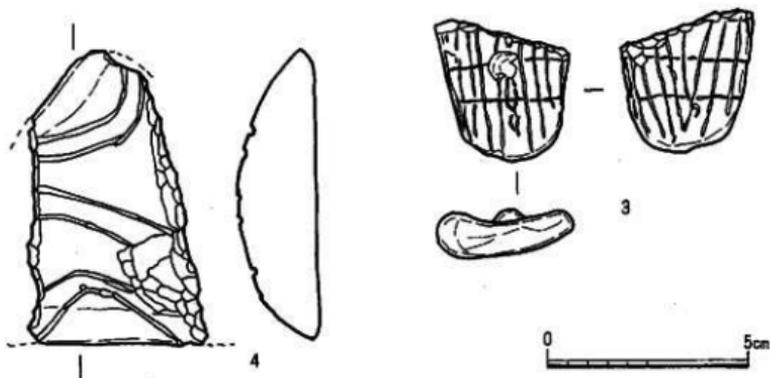
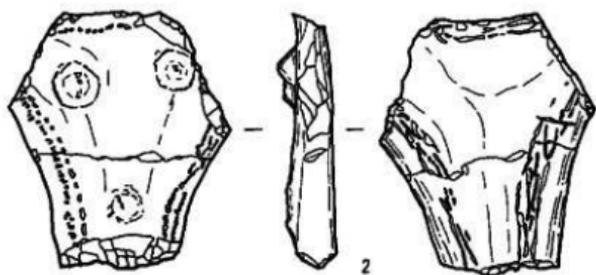
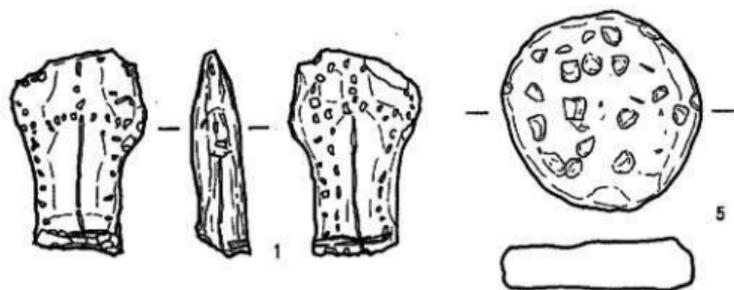
1点出土し、破損品であるが残存部の形状から三角形土製品と判断した。沈線による文様が観察される。

板状土製品 (第62図5)

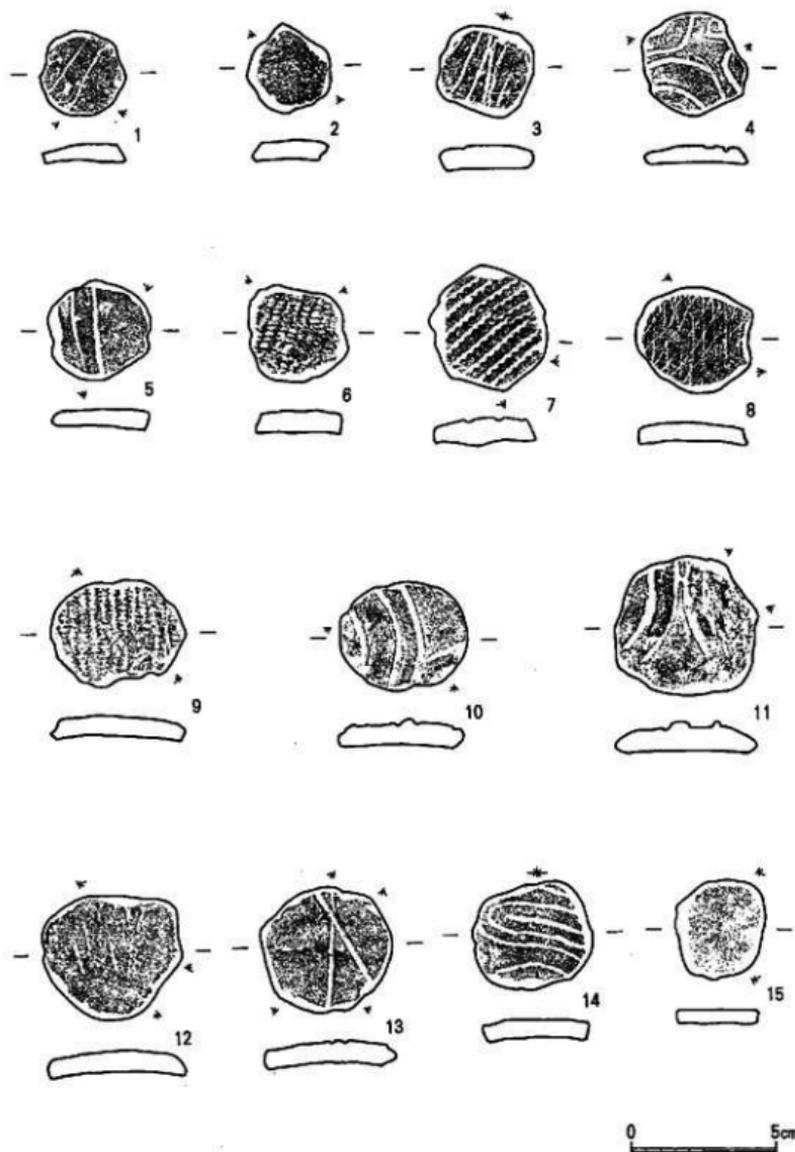
円形に作成された板状土製品で1点出土した。器面には竹管による押し厚痕が充填されてい



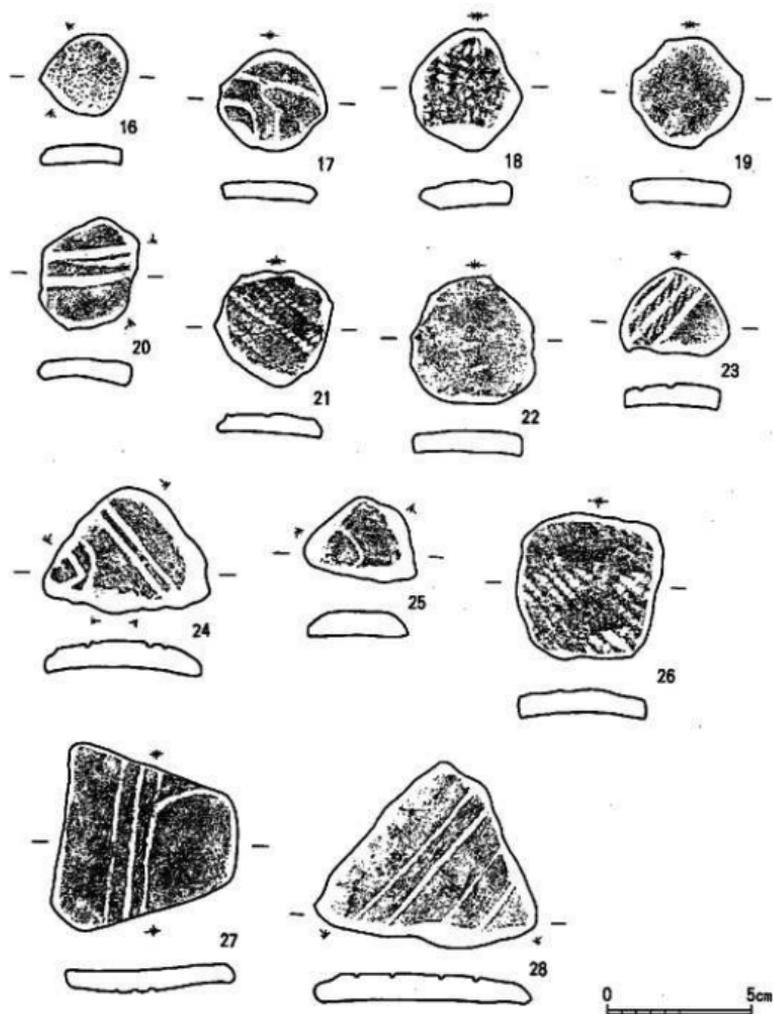
第63図 D区土製品出土分布状況



第64图 D。区道隅外出土土製品実測図



第65图 D₂区遗址外出土土器片利用土製品拓影图



第66图 D₃区遺構外出土土器片利用土製品拓影图

第四章 G₃区縄文時代検出遺構と出土遺物

G₃区において、確認された縄文時代の遺構は、焼土遺構3基、Tピット5基、フラスコ状土坑2基が検出された。また、遺構外より縄文土器破片83点、石器8点、土製品1点が出土した。

1. 焼土遺構 (G₃区)

焼土遺構は、調査区南端部、南西部及び北東部に点在している。本調査区では4基が確認された。

第1号焼土遺構 (第69図)

調査区北東端部 ZW-70グリッド、Ⅲb層上面で確認。焼土範囲は68×51cmである。

第2号焼土遺構 (第69図)

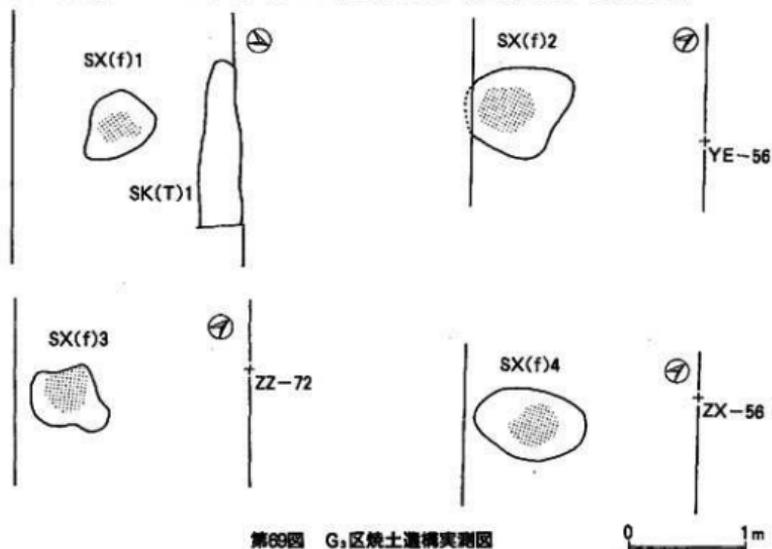
調査区西端部の YE~YF-55グリッド、Ⅲa層上面で確認。焼土範囲は75×58cmである。

第3号焼土遺構 (第69図)

調査区北東端部の ZZ~YA-71グリッド、Ⅲc層上面で確認。焼土範囲は75×58cmである。

第4号焼土遺構 (第69図)

調査区南端部の ZX-55グリッド、Ⅲd層上面で確認。焼土範囲は94×60cmである。



第69図 G₃区焼土遺構実測図

2. 土 坑

(1) Tピット

Tピットは、調査区内の南西部より延びる沢頭部に構築されている。

第1号Tピット (第70図)

調査区北東端部のZ W-70~71グリッドに位置し、Ⅲd層中位で確認した。確認面からの深さは推定114cm、口縁部径は長軸306cm×短軸42cm (推定値) を測る。本遺構北側一部は未発掘である。確認された堆積土は3ブロックに区分され、人為堆積である。

構築時期については、確認面より縄文時代後期と考えられる。

第2号Tピット (第70図)

調査区中央部のZ Z-64グリッドに位置し、Ⅳ層上面で確認した。本来の構築面は基本層序断面よりⅢd層上面である。深さは推定157cm、口縁部径は長軸225cm (推定値) を測り、短軸は不明である。本遺構北側半部は未発掘である。確認された堆積土は4ブロックに区分され、人為堆積である。

構築時期については、構築面より縄文時代後期と考えられる。

第3号Tピット (第70図)

調査区中央部のY A-62~63グリッドに位置し、Ⅳ層上面で確認した。本来の構築面は基本層序断面よりⅢd層上面である。深さは推定193cm、口縁部径は短軸140cm (推定値) を測り、長軸は不明である。本遺構北西側半部は未発掘である。確認された堆積土は7ブロックに区分され、人為堆積である。

構築時期については、構築面より縄文時代後期と考えられる。

第4号Tピット (第70図)

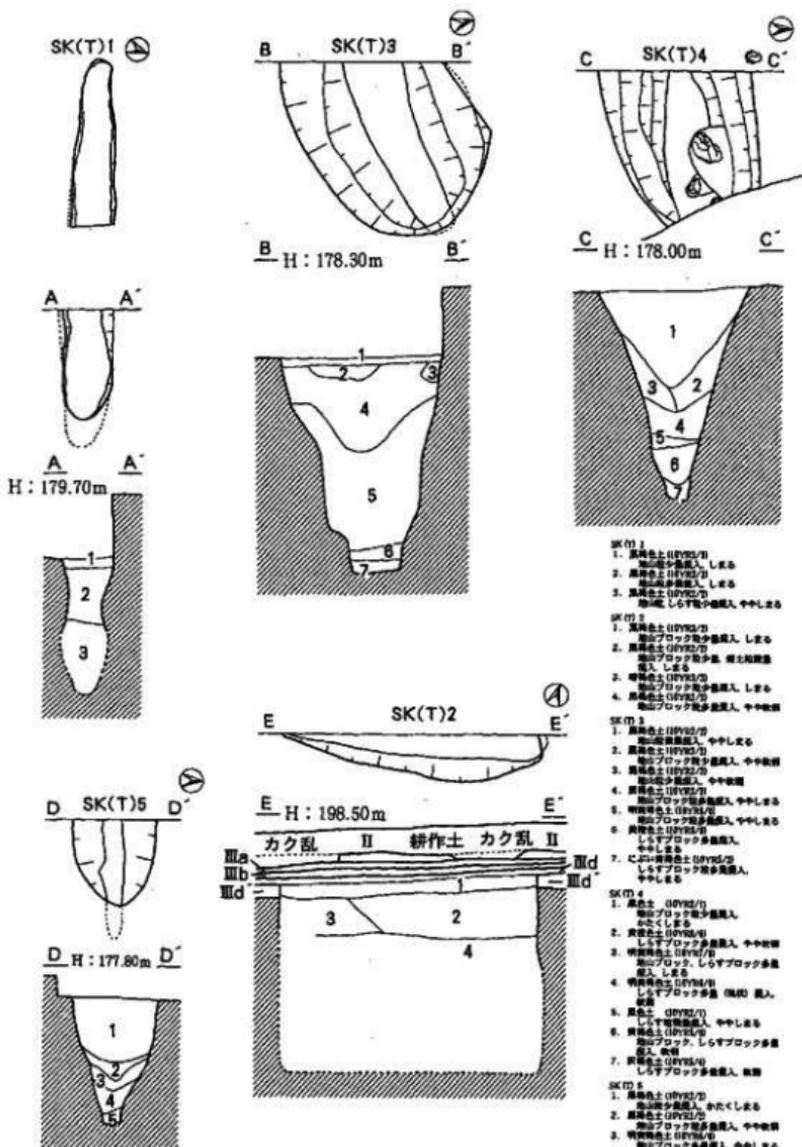
調査区北西部中央寄りのY B-64グリッドに位置し、Ⅳ層上面で確認した。本来の構築面は基本層序断面よりⅢd層上面である。深さは推定183cm、口縁部径は短軸49cm (推定値) を測り、長軸は不明である。本遺構南東側及び北西側一部は未発掘である。確認された堆積土は7ブロックに区分され、人為堆積である。

構築時期については、確認面より縄文時代後期と考えられる。

第5号Tピット (第70図)

調査区南東部のZ V~Z W-59グリッドに位置し、Ⅳ層上面で確認した。深さは推定108cm、口縁部径は短軸71cm (推定値) を測り、長軸は不明である。本遺構西側半部は未発掘である。確認された堆積土は5ブロックに区分され、人為堆積である。

構築時期については、周辺構築Tピットと同様の縄文時代後期と考えられる。



- SK(T)1
1. 黒褐色土 (IVb2/IV)
 2. 灰土 (IVb2/IV)
 3. 黒褐色土 (IVb2/IV)
- SK(T)2
1. 黒褐色土 (IVb2/IV)
 2. 黒褐色土 (IVb2/IV)
 3. 黒褐色土 (IVb2/IV)
 4. 黒褐色土 (IVb2/IV)
 5. 黒褐色土 (IVb2/IV)
 6. 黒褐色土 (IVb2/IV)
 7. 黒褐色土 (IVb2/IV)

- SK(T)3
1. 黒褐色土 (IVb2/IV)
 2. 黒褐色土 (IVb2/IV)
 3. 黒褐色土 (IVb2/IV)
 4. 黒褐色土 (IVb2/IV)

- SK(T)4
1. 黒褐色土 (IVb2/IV)
 2. 黒褐色土 (IVb2/IV)
 3. 黒褐色土 (IVb2/IV)
 4. 黒褐色土 (IVb2/IV)
 5. 黒褐色土 (IVb2/IV)
 6. 黒褐色土 (IVb2/IV)
 7. 黒褐色土 (IVb2/IV)

- SK(T)5
1. 黒褐色土 (IVb2/IV)
 2. 黒褐色土 (IVb2/IV)
 3. 黒褐色土 (IVb2/IV)
 4. 黒褐色土 (IVb2/IV)
 5. 黒褐色土 (IVb2/IV)
 6. 黒褐色土 (IVb2/IV)

- SK(T)5
1. 黒褐色土 (IVb2/IV)
 2. 黒褐色土 (IVb2/IV)
 3. 黒褐色土 (IVb2/IV)
 4. 黒褐色土 (IVb2/IV)
 5. 黒褐色土 (IVb2/IV)
 6. 黒褐色土 (IVb2/IV)

第70図 G区T-ピット実測図

(2) フラスコ状土坑

フラスコ状土坑は、調査区北部内の小丘部に集中している。

第6号フラスコ状土坑 (第71図)

調査区北東部北寄りのYD-67~68グリッドに位置し、Ⅲd層上面で確認した。深さは推定157cm、口縁部径は長軸101cm (推定値) を測り、短軸は不明である。底部径は、短軸168cm (推定値) を測り、長軸は不明である。本遺構北側半部は未発掘である。確認される堆積土は6ブロックに区分され、人為堆積である。

遺構内より、遺物は出土しなかった。

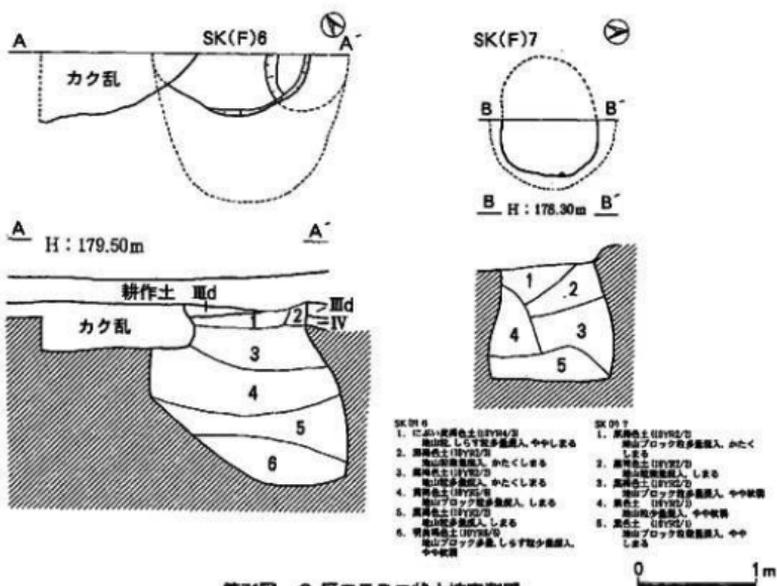
構築時期は確認面より縄文時代後期と判断される。

第7号フラスコ状土坑 (第71図)

調査区北西部のYC~YD-65グリッドに位置し、Ⅳ層中面~下面で確認した。確認面からの深さは推定102cm、口縁部径は長軸103cm×短軸81cm (推定値)、なお底部径は短軸108cm (推定値) を測り、長軸は不明である。確認される堆積土は5ブロックに区分され、人為堆積である。

遺構内より、遺物は出土しなかった。

構築時期は、第7号フラスコ状土坑と同様な縄文時代後期と判断される。



第71図 G₃区フラスコ状土坑実測図

3. 遺構外出土遺物

(1) 土器 (第72図)

G₂区遺構外からは、83点の土器が出土した。これらの土器は縄文時代後期に位置づけられるものである。土器の出土状況はまとまって出土することはなかった。

土器の分類については、D₂区と同じ基準で行った。なお、出土しなかった土器群・類については記載していない。

第Ⅰ群土器 早期の土器

本調査区からは出土していない。

第Ⅱ群土器 前期の土器

本調査区からは出土していない。

第Ⅲ群土器 中期末～後期初頭の土器

本調査区からは出土していない。

第Ⅳ群土器 後期初頭から前葉の土器 (第72図)

1類：陸線文、陸沈文が施文された土器 (第72図1～3)

陸線文、陸沈文が施文されている土器を一括した。深鉢形土器、壺形土器がみられる。

陸沈文により主文様が施文されるもの(2～3)、区画文(1)となるものがある。区画文となるものには単節の斜縄文が施文されている。

焼成は良好で、堅固なものが多く、色調は浅黄橙色、明赤褐色を呈する。

2類：地文上に沈線文が施文された土器

本調査区からは出土しなかった。

3類：沈線が施文された土器 (第72図4～8、12)

a：文様が縦位に施文される土器 (第72図12)

文様が縦位に施文された土器を一括した。12は平口縁を呈する深鉢形土器で、口縁部文様帯内には弧線文が、胴部にはRL縄文が施文されている。焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。

b：文様が横位に施文された土器 (第72図4～8)

文様が横位に施文される土器を一括した。小破片であり全体の器形は不明であるが、これまでの調査では波状・平口縁を呈する深鉢形土器、山形口縁を呈する鉢形土器が主体となるほか、

壺形土器や蓋形土器がみられた。4～8はいずれも深鉢形土器の破片で、横位の展開する沈線文が施文されている。焼成は良好で、色調はにぶい褐色、にぶい橙色を呈する。

c：幾何学的な文様が施文される土器

本調査区からは出土しなかった。

d：格子目状、斜行平行沈線が施文された土器

本調査区からは出土しなかった。

4類：帯縄文が施文された土器（第72図9～10）

本来ならば遺跡の時期を示すキーポイント的な土器であるが、本調査区からの出土は少ない。

a：文様が横位に施文される土器（第72図9～10）

帯縄文が横位方向に展開する土器を一括した。これまでの調査では深鉢形土器、鉢形土器、蓋形土器が主体となるほか肩口土器がみられた。72図9は深鉢形土器の胴部破片で、入組文が施文されている。地文としてRL縄文が施文されている。焼成は良好で、色調は浅黄褐色を呈する。

b：幾何学的な文様が施文される土器

本調査区からは出土しなかった。

c：幅の広い帯状文が施文される土器

本調査区からは出土しなかった。

本群土器は縄文時代後期初頭から前葉に位置づけられるものを一括した。本群3類は十腰内I a式に比定される。4類は広義の十腰内I b式に比定され、そのうち4類aが大湯式に比定できよう。

第IV群土器 後期中葉の土器（第72図11）

1類：口縁部に幅の狭い平行沈線が施文された土器

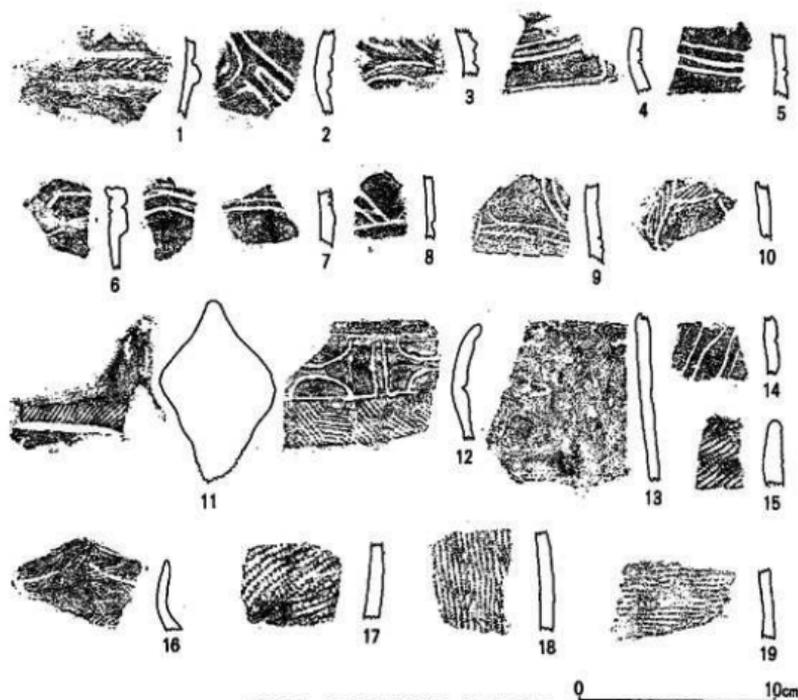
本調査区からは出土しなかった。

2類：磨り消し縄文が施文された土器（第72図11）

アメーバー的な幾何学文を施文したものを一括した。これまでの調査では口縁部が「朝顔」状に開く台付深鉢形土器、平口縁を呈する広口壺が主体となっている。第72図11は裝飾突起の破片で、沈線内には節の細かなRL縄文が施文されている。焼成はよく、色調は良好で、色調は褐灰色を呈する。

3類：磨り消し縄文に刺突が伴う土器

本調査区からは出土しなかった。



第72図 G₃区遺構外出土土器拓影圖

4類：沈線文系の土器

本調査区からは出土しなかった。

本群土器は、縄文時代後期中葉に位置づけられるもので、東北地方北部の十腰内Ⅱ式、Ⅲ式に、東西南部の宝ヶ峯式土器に比定される。

第V群土器 晩期の土器

本調査区からは出土しなかった。

第VI群土器 後期から晩期の土器 (第72図13～19)

本群には、縄文(無節・半節)、捺糸文、条痕文、無文、刺突文の土器を一括した。数量的には非常に多く出土している。

1類：無文の土器（第72図13）

深鉢形土器、鉢形土器、壺形土器がみられる。これまでの調査では深鉢形土器は平口縁、波状口縁を呈するものがみられた。器外面は調整が施されている。72図13の焼成は良好で、色調は浅黄色を呈する。

2類：縄文が施文された土器（第72図15～19）

本類には無節、単節、複節の縄文が施文されたものを一括した。

a：無節の縄文が施文された土器

本調査区からは出土しなかった。

b：単節の縄文が施文された土器（第72図15～19）

単節の縄文が施文された土器を一括した。節の大きいもの、細かなものがみられる。LR・RL縄文のいずれもみられる。72図16は山形口縁を呈する深鉢形土器である。焼成は良好で、色調は浅黄色、にぶい黄橙色を呈する。

3類：縞糸文が施文された土器（第72図14）

網目状縞糸文が施文されたものを一括した。14は深鉢形土器の胴部破片でL縄文を使用した縞糸文が施文されている。焼成は良好で、色調は浅黄橙色～褐灰色を呈する。

4類：条痕文が施文された土器

本調査区からは出土しなかった。

5類：刺突文が施文された土器

本調査区からは出土しなかった。

第VII群土器 弥生時代の土器

本調査区からは出土しなかった。

(2) 石 器

G₃区遺構外より出土した石器は、剥片石器5点、礫石器が3点の総計8点である。遺物の大半は調査区の北部に集中し、西部に点在する。遺物の大半は遺物包含層Ⅲa～Ⅲd層からの出土である。石器の分類については、形態別に類別細分した。

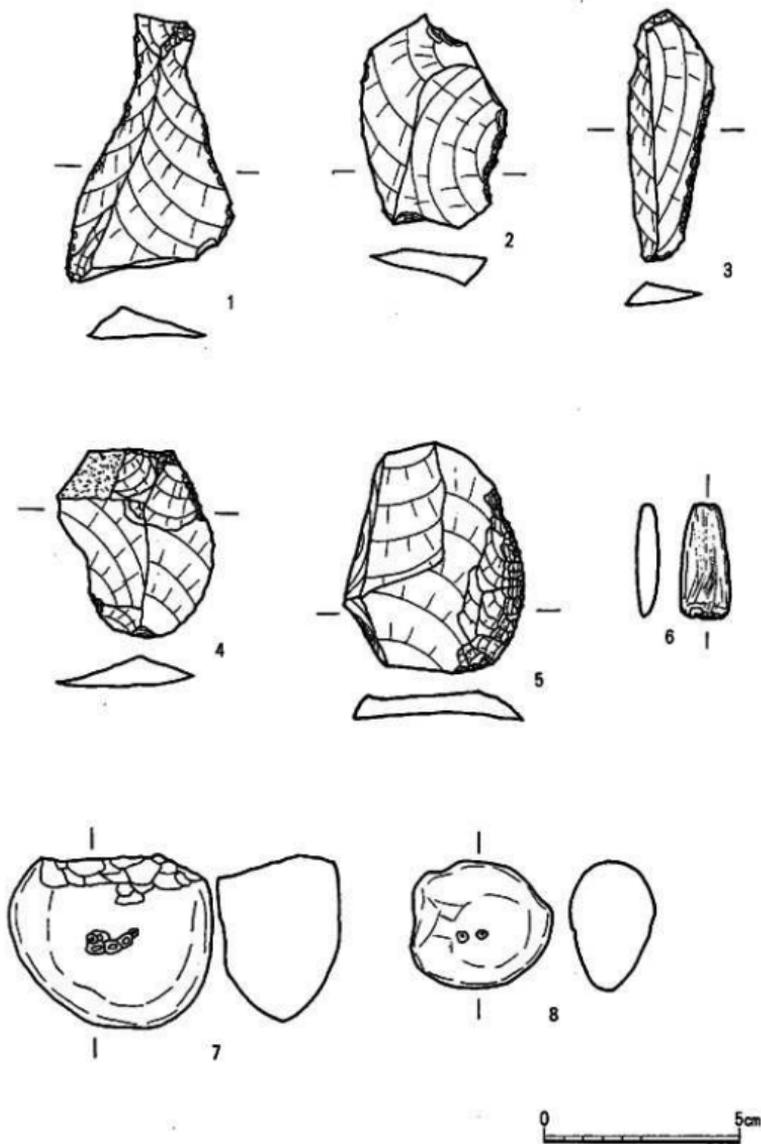
石 鏃

本調査区からは出土しなかった。

石 鏃

本調査区からは出土しなかった。

石 匙（第73図）



第73图 G₂区遗址外出土石器实测图

形態から2群に分け、さらにつまみ部を上にして主要刃部が作り出される位置から、5類に細分した。石材は、珪質頁岩である。

1群…縦型石匙である。

- a…主要刃部が、一側縁に作り出されるもので、本調査区からは出土しなかった。
- b…主要刃部が二側縁に作り出されるもので、本調査区からは、1点出土した。(1)
- c…主要刃部が先端部に作り出されるもので、本調査区からは出土しなかった。

2群…横型石匙である。刃部の作りはていねいである。

- a…主要刃部が一側縁に作り出されるもので、本調査区からは出土しなかった。
- b…主要刃部が二側縁に作り出されるもので、本調査区からは出土しなかった。
- c…主要刃部が三側縁に作り出されるもので、本調査区からは出土しなかった。

播 器 (第73図)

打面を上にして、主要刃部が作り出される位置および、刃部の形態別に5群に分類した。石材は硬質頁岩、珪質頁岩、黒色頁岩である。

1群…主要刃部が左、右、先端いずれか一側縁に作り出されるもので、4点出土した。

(2~5)

2群…主要刃部が二側縁に作り出されるもので、本調査区からは出土しなかった。

3群…主要刃部が三側縁に作り出されるもので、本調査区からは出土しなかった。

4群…主要刃部が周縁全域に作り出されるもので、本調査区からは出土しなかった。

5群…刃部に抉れをもつもので、本調査区からは出土しなかった。

石 斧 (第73図)

定角式磨製石斧が、1点出土し、刃部、基部ともに破損部が確認される。石材は緑色片岩である。(6)

石 鏟

扁平な川原石の一部が打ち欠かれているもので、本調査区からは出土しなかった。

敲 石

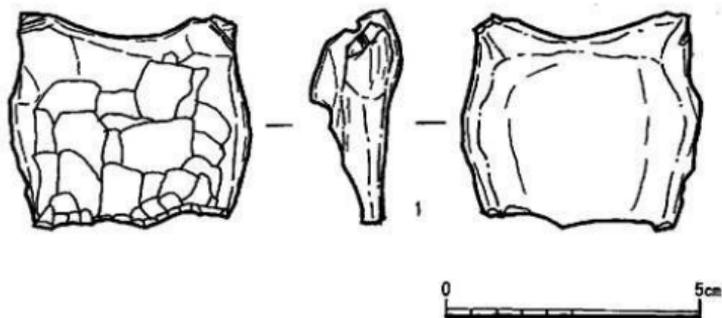
円礫、扁平な川原石の一部が打ち欠かれているもので、本調査区からは出土しなかった。

凹 石 (第73図)

円礫、扁平な川原石に使用痕として凹が観察されるもので、2点出土した。両面を使用しているものもある。石材は石英安山岩、凝灰質泥岩である。(7、8)

石 皿

本調査区からは出土しなかった。



第74図 G区遺構外出土土製品実測図

(3) 土製品

G区遺構外より出土した土製品は、用途不明な土製品1点が出土した。調査区南端部のZ X-55グリットから出土している。

その他の土製品 (第74図)

破損品の一部である。残部は扁平な方形を呈し、両面には浅い凹状の丁寧な調整が施されている。表面と考えられる部分には剥落痕が確認でき、本来は凹凸のある器形であった可能性も考えられる。器面上部両端には耳状のつまみによる整形がなされ、斜斜に貫通孔を有している。

(4) 石製品

本調査区からは出土しなかった。

第V章 歴史時代の遺構

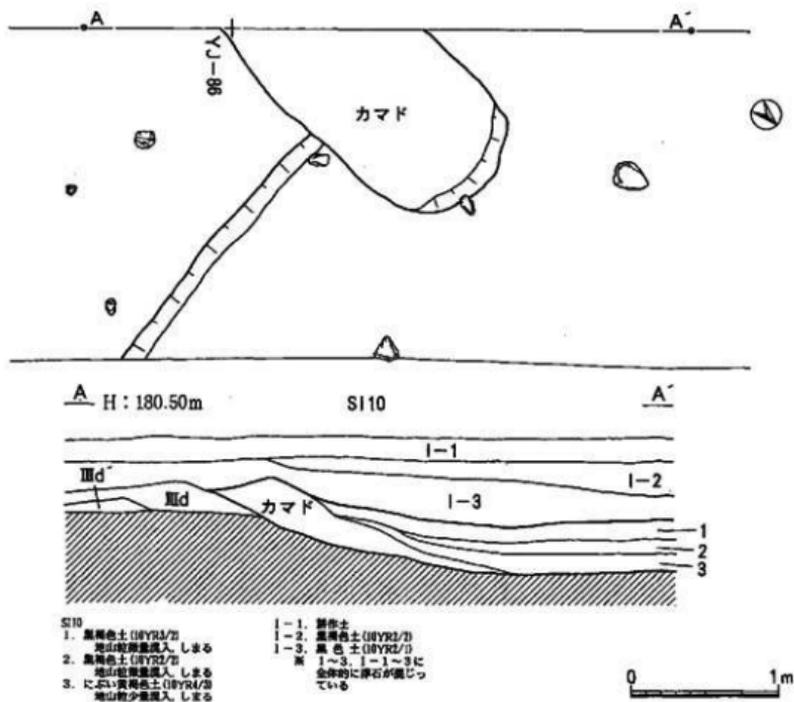
G,区、D,区において確認された歴史時代の遺構は、G,区では溝状遺構2条、D,区では竪穴住居跡5軒、土坑1基、溝状遺構1条である。遺物では遺構内・外より復元可能土師器1点、土師器破片56点が出土した。

1. 竪穴住居跡

竪穴住居跡はD,区の北部から西部にかけて確認されている。

第10号竪穴住居跡 (第75図)

調査区北東部YK-86グリッドでの確認である。確認面はII層までの攪乱のため不明である。大半が未発掘であるが、平面形は方形プランと判断される。住居内南側にカマドが付設されて



第75図 D,区第10号竪穴住居跡実測図

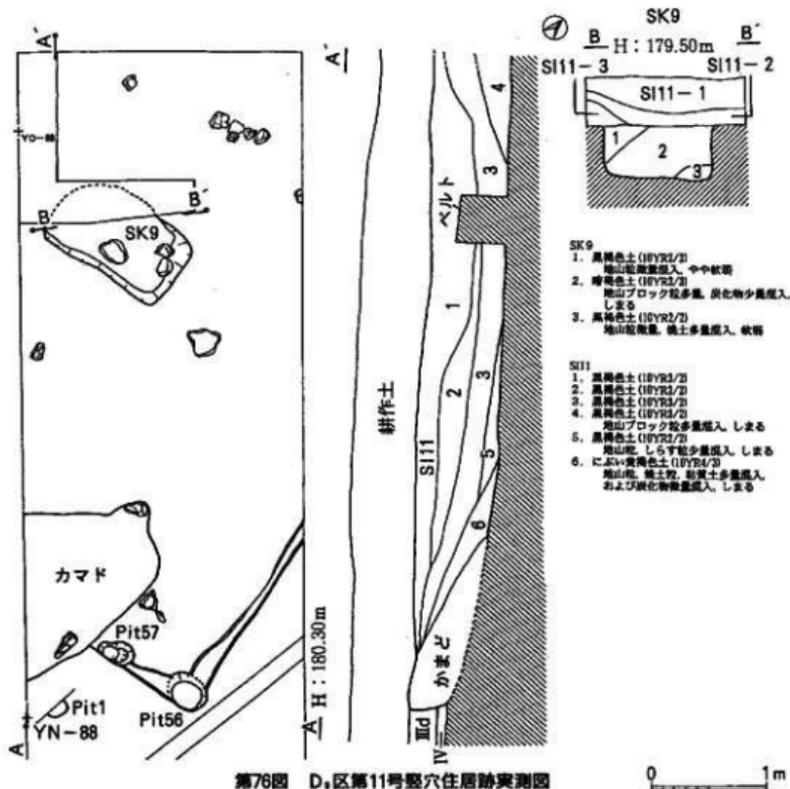
いる。壁は底面よりほぼ垂直に立ち上がり、壁高は34cmを測る。底面は平坦で貼床はみられない。堆積土は3層に区分され自然堆積と考えられる。

出土遺物は床直より土師器破片24点、覆土中より縄文土器破片18点が出土した。

本住居跡の構築時期は堆積土混入物である大湯淨石層及び出土遺物より、大湯淨石層降下以後、平安時代後半と考えられる。

第11号竪穴住居跡・第9号土坑 (第76図)

調査区北端部 YP・YO-88グリットでの確認である。確認面はⅡ層までの攪乱のため不明である。一部未発掘であるが、平面形は方形プランと判断される。住居内南側にカマドが付設されている。壁は底面よりほぼ垂直に立ち上がり、壁高は70cmを測る。底面は平坦で貼床はみられない。壁に沿って幅10~20cm、深さ10~15cmの壁溝が存在し、壁際・壁溝内に柱穴状ピツ



トが確認される。堆積土は6層に区分され自然堆積と考えられる。また、住居内ほぼ中央部に土坑(SK09)が付設され、規模は長軸120cm×短軸70cmを測る方形プランである。堆積土は3ブロックに区分され、人為堆積である。

出土遺物は床直より土師器破片27点、覆土中より縄文土器破片47点、石器12点が出土した。

本住居跡の構築時期は堆積土混入物である大湯浮石層及び出土遺物より、大湯浮石層降下以後、平安時代後半と考えられる。

第12号壘穴住居跡(第77図)

調査区北西部YQ・P-84グリットでの確認である。確認面はⅡ層までの攪乱のため不明である。一部確認したのみで、規模、平面形は不明である。確認された壁は底面よりほぼ垂直に立ち上がり、壁高は68cmを測る。底面は平坦で貼床はみられない。壁に沿って幅12cm、深さ12cmの壁溝が存在する。堆積土は1層で人為堆積と考えられる。

出土遺物はない。

本住居跡の構築時期は堆積土混入物である大湯浮石層より、大湯浮石層降下以後、平安時代後半と考えられる。

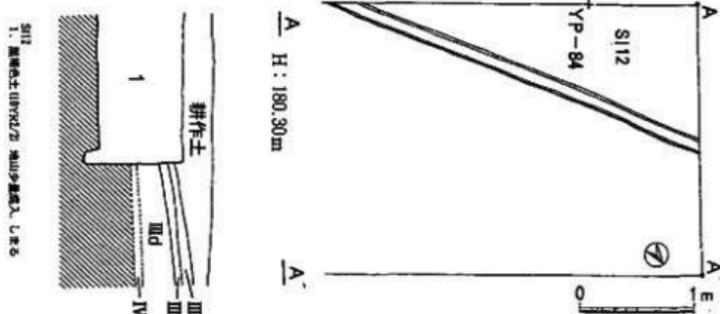
第13号壘穴住居跡(第78図)

調査区西端部YO-78グリット、Ⅱ層上面での確認である。一部確認したのみで、規模、平面形は不明である。確認された壁は底面よりほぼ垂直に立ち上がり、壁高は80cmを測る。底面は平坦で貼床はみられない。堆積土は1層で人為堆積と考えられる。

出土遺物はない。

本住居跡の構築時期は堆積土混入物である大湯浮石層より、大湯浮石層降下以後、平安時代後半と考えられる。

第14号壘穴住居跡(第78図)



第77図 D₃区第12号壘穴住居跡実測図

調査区南端部 YH・YI-76グリット、II層上面での確認である。一部確認したのみで、規模、平面形は不明である。確認された壁は底面よりほぼ垂直に立ち上がり、壁高は66cmを測る。底面は平坦で貼床はみられない。堆積土は1層で人為堆積と考えられる。

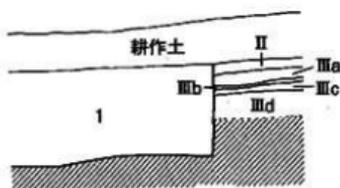
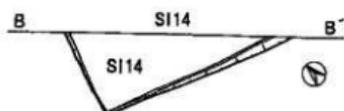
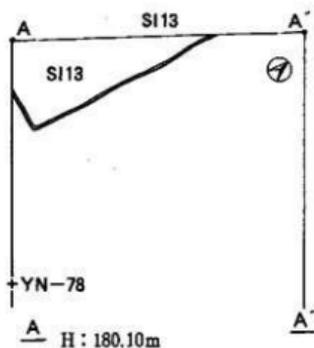
出土遺物はない。

本住居跡の構築時期は堆積土混入物である大湯浮石層より、大湯浮石層降下以後、平安時代後半と考えられる。

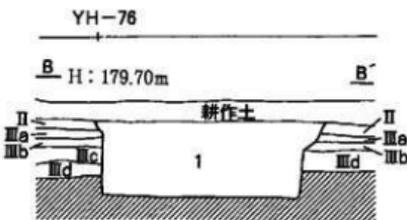
2. 溝状遺構 (第79図)

溝状遺構はG区、D区において計3条がみつまっている。いずれの溝状遺構もⅢa層上面において、非常に堅いしまりのある幅70~125cmの凹が確認された。G区では、調査区北西側から南西側へ1条と南部で1条、D区では調査区頭部から西部へ横断するように連続して確認された。道路状の遺構になる可能性が高い。

構築時期は、確認面から大湯浮石層降下直前と考えられる。



SI13
1. 黒褐色土 (I FYR2/2) 地山少量混入。しまる



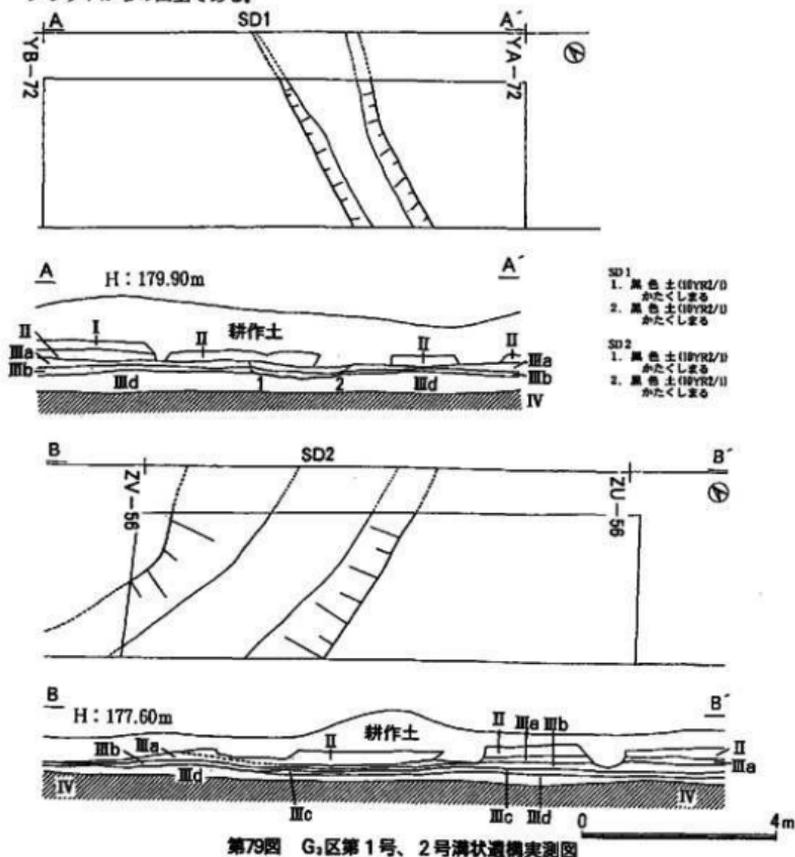
SI14
1. 黒褐色土 (I FYR2/2) 地山少量混入。しまる

0 1m

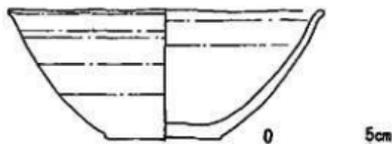
第78図 D区第13号、14号竪穴住居跡実測図

3. 遺構外出土遺物 (第80図)

遺構外より出土した遺物は、D区からのみの出土で、復元可能土師器1点、土師器破片7点である。第80図は調査区南端部YK-74グリットから、土師器破片は調査区南西部YL-78グリットからの出土である。



第79図 G₃区第1号、2号溝状遺構実測図



第80図 D区遺構外出土土器実測図

第VI章 自然科学的調査

定性分析結果報告書

〔特別史跡大湯環状列石第19次発掘調査出土土器破片及び史跡周辺粘土の胎土分析〕

株式会社 大館分析センター

分析技術課 主任 田村 英雄

〔特別史跡大湯環状列石第19次発掘調査出土土器破片及び史跡周辺粘土の胎土分析〕 2 試料についてX線回折及び鉱物鑑定試験を下記のとおりに実施した。

記

1. 試料調整

- ・ 全試料につき鉄板上で1 cm角まで粗砕し、室内にて自然乾燥。
- ・ 粗砕試料から約100 gを分取し、震動ミルにて約30秒間磨砕。
- ・ 磨砕試料から約30 gを分取し、メノウ乳鉢にて指頃に感じない程度まで磨砕。
- ・ 下記の条件によりX線回折に供した。

2. 測定条件

- X線回折装置 .. 理学電機㈱ ガイガーフレックス
- 対陰極 .. Cu
- フィルター .. Ni
- 管電圧 .. 40 KV
- 管電流 .. 20 mA
- カウントフルスケール .. 1000 cps
- 時定数 .. 1 sec
- 走査速度 .. 2° min/
- 記録紙速度 .. 2 cm/min
- デバージェンススリット .. 1°
- スキヤッタースリット .. 1°
- レシービングスリット .. 0.3 mm
- 走査範囲 .. 2θ = 2° ~ 40°

3. 解析

(1) 鉱物鑑定表は全試料にわたる鉱物別相対強度として次表の「X線回折強度分類基準」により作成した。

4. 分析結果

大湯環状列石第19次発掘調査出土土器破片及び史跡周辺(黒森山)粘土の胎土は、成分比較において相違すると判断される。

試料の相対強度測定値からなる鉱物別相対強度として以下の基準により作成した。
〔X線回折強度分類基準〕

鉱物名 (JSP)	強度 (相対)	2θ (度)	強度 (相対)	2θ (度)	強度 (相対)
石英 (SiO ₂)	1000.0	88~90	48~10	1000	
クアツツル石 (SiO ₂)	1000.0	27~29	12~10	1000	
正長石 (SiO ₂)	200.0	18~19	8~8	800	
斜長石 (SiO ₂)	200.0	19~19	8~8	800	
輝石 (SiO ₂)	200.0	19~19	8~8	800	
角閃石 (SiO ₂)	200.0	19~19	8~8	800	
雲母 (SiO ₂)	200.0	19~19	8~8	800	
粘土鉱物 (SiO ₂)	200.0	19~19	8~8	800	
方解石 (CaCO ₃)	400.0	44~46	12~10	1000	
重晶石 (BaSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
石膏 (CaSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸バリウム (BaSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸カルシウム (CaSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸マグネシウム (MgSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸ナトリウム (Na ₂ SO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸カリウム (K ₂ SO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸アンモニウム (NH ₄) ₂ SO ₄	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸鉄 (FeSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸銅 (CuSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸亜鉛 (ZnSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸マンガン (MnSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸コバルト (CoSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸ニッケル (NiSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸モリブデン (MoSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸セシウム (Cs ₂ SO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸ストロンチウム (SrSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸バリウム (BaSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸カルシウム (CaSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸マグネシウム (MgSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸ナトリウム (Na ₂ SO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸カリウム (K ₂ SO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸アンモニウム (NH ₄) ₂ SO ₄	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸鉄 (FeSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸銅 (CuSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸亜鉛 (ZnSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸マンガン (MnSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸コバルト (CoSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸ニッケル (NiSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸モリブデン (MoSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸セシウム (Cs ₂ SO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸ストロンチウム (SrSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸バリウム (BaSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸カルシウム (CaSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸マグネシウム (MgSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸ナトリウム (Na ₂ SO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸カリウム (K ₂ SO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸アンモニウム (NH ₄) ₂ SO ₄	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸鉄 (FeSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸銅 (CuSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸亜鉛 (ZnSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸マンガン (MnSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸コバルト (CoSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸ニッケル (NiSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸モリブデン (MoSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸セシウム (Cs ₂ SO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸ストロンチウム (SrSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸バリウム (BaSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸カルシウム (CaSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸マグネシウム (MgSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸ナトリウム (Na ₂ SO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸カリウム (K ₂ SO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸アンモニウム (NH ₄) ₂ SO ₄	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸鉄 (FeSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸銅 (CuSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸亜鉛 (ZnSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸マンガン (MnSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸コバルト (CoSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸ニッケル (NiSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸モリブデン (MoSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸セシウム (Cs ₂ SO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸ストロンチウム (SrSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸バリウム (BaSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸カルシウム (CaSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸マグネシウム (MgSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸ナトリウム (Na ₂ SO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸カリウム (K ₂ SO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸アンモニウム (NH ₄) ₂ SO ₄	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸鉄 (FeSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸銅 (CuSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸亜鉛 (ZnSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸マンガン (MnSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸コバルト (CoSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸ニッケル (NiSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸モリブデン (MoSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸セシウム (Cs ₂ SO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸ストロンチウム (SrSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸バリウム (BaSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸カルシウム (CaSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸マグネシウム (MgSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸ナトリウム (Na ₂ SO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸カリウム (K ₂ SO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸アンモニウム (NH ₄) ₂ SO ₄	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸鉄 (FeSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸銅 (CuSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸亜鉛 (ZnSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸マンガン (MnSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸コバルト (CoSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸ニッケル (NiSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸モリブデン (MoSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸セシウム (Cs ₂ SO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸ストロンチウム (SrSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸バリウム (BaSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸カルシウム (CaSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸マグネシウム (MgSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸ナトリウム (Na ₂ SO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸カリウム (K ₂ SO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸アンモニウム (NH ₄) ₂ SO ₄	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸鉄 (FeSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸銅 (CuSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸亜鉛 (ZnSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸マンガン (MnSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸コバルト (CoSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸ニッケル (NiSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸モリブデン (MoSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸セシウム (Cs ₂ SO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸ストロンチウム (SrSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸バリウム (BaSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸カルシウム (CaSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸マグネシウム (MgSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸ナトリウム (Na ₂ SO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸カリウム (K ₂ SO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸アンモニウム (NH ₄) ₂ SO ₄	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸鉄 (FeSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸銅 (CuSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸亜鉛 (ZnSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸マンガン (MnSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸コバルト (CoSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸ニッケル (NiSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸モリブデン (MoSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸セシウム (Cs ₂ SO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸ストロンチウム (SrSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸バリウム (BaSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸カルシウム (CaSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸マグネシウム (MgSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸ナトリウム (Na ₂ SO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸カリウム (K ₂ SO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸アンモニウム (NH ₄) ₂ SO ₄	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸鉄 (FeSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸銅 (CuSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸亜鉛 (ZnSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸マンガン (MnSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸コバルト (CoSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸ニッケル (NiSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸モリブデン (MoSO ₄)	400.0	44~46	12~10	1000	
硫酸セシウム (Cs ₂ SO ₄)					

分析結果

No.	試料名	Li	Be	B	Na	Mg	Al	SiO ₂	K	Ca	Sc	Ti	V	Cr	Mn	Fe	Co	Ni	Cu
		(ppm)	(ppm)	(ppm)	(ppm)	(ppm)	(ppm)	(%)	(ppm)	(ppm)	(ppm)	(ppm)							
1	大湯 黒森山 出土粘土	19	< 1	240	10700	8300	18800	53.1	3300	4400	16	5100	118	20	480	145000	8	8	34
2	02 大D9 P-1203	33	< 1	220	9600	8300	18200	51.96	5600	2200	15	4800	70	39	280	38000	4	6	45
No.	試料名	Zn	Ga	Ge	As	Se	Br	Rb	Sr	Y	Zr	Nb	Mo	Ru	Rh	Pd	Ag	Cd	In
		(ppm)	(ppm)	(ppm)	(ppm)	(ppm)	(ppm)	(ppm)	(ppm)	(ppm)	(ppm)	(ppm)	(ppm)						
1	大湯 黒森山 出土粘土	123	19	0.85	4	< 10	19	27	113	32	78	4	< 0.1	< 1	< 2	< 1	< 1	< 1	< 0.5
2	02 大D9 P-1203	107	22	0.45	4	< 10	6	83	91	16	78	8	0.6	< 1	< 2	< 1	< 1	< 1	< 0.5
No.	試料名	Sn	Sb	Te	I	Cs	Ba	La	Ce	Pr	Nd	Sm	Eu	Gd	Tb	Dy	Ho	Er	Tm
		(ppm)	(ppm)	(ppm)	(ppm)	(ppm)	(ppm)	(ppm)	(ppm)	(ppm)	(ppm)	(ppm)	(ppm)						
1	大湯 黒森山 出土粘土	2	1	< 2	3	3	300	14	32	5	20	6	2	7	1	7	1	4	< 1
2	02 大D9 P-1203	6	1	< 2	< 1	7	390	17	45	5	22	5	1	5	< 1	5	< 1	3	< 1
No.	試料名	Yb	Lu	Hf	Ta	W	Re	Os	Ir	Pt	Au	Hg	Tl	Pb	Bi	Th	U		
		(ppm)	(ppm)	(ppm)	(ppm)	(ppm)	(ppm)	(ppm)	(ppm)	(ppm)	(ppm)	(ppm)							
1	大湯 黒森山 出土粘土	3	< 1	4	1	1	< 2	< 5	< 2	< 1	< 1	< 1	< 1	19	< 2	5	1		
2	02 大D9 P-1203	2	< 1	5	2	2	< 2	< 5	< 2	< 1	< 1	< 1	< 1	10	< 2	11	3		

* SiはSample溶解にFを使用するため除数。

X線鉱物鑑定一覧表

No.	試料名	珪酸塩鉱物										硫酸塩鉱物		炭酸塩鉱物		その他の鉱物		備考	処理
		石英	長石	粘土	カス	スメク	ハ	S	C	沸石	その他	石膏	重晶石	方解石	アモナイト	黄鉄鉱	磁鉄鉱		
1	大湯 黒森山 出土粘土	○	△	△															
2	02 大D9 P-1203	○		○					○										

○：多量 ○：中量 △：少量 ∙：微量 ?：不明
 S/S：絹雲母-スメクタイト混合層粘土鉱物
 C/S：緑泥石-スメクタイト混合層粘土鉱物

第七章 調査のまとめ

特別史跡大湯環状列石は、鹿角市の北東部、大湯川の左岸に形成された標高180m前後の舌状台地上に位置し、万座・野中堂環状列石を中心とする縄文時代後期の大規模な「祭祀場」である。

本年度第19次調査からは、昨年度第18次調査において史跡の主要部である野中堂・万座環状列石隣接地の調査をほぼ終了したことから、今後は史跡全体の「場の使われ方」を解明する目的を前提に調査を行うこととした。

第19次調査は、万座環状列石南西側約70mの区域（G₂区）及び同西側50mの区域（D₂区）の遺構・遺物分布状況の把握と地形の把握を目的に行った。

1. D₂、G₂区遺構・遺物について

D₂区の調査では、縄文時代の竪穴住居跡8軒、柱穴状ピット4個、焼土遺構8基、Tピット1基、プラスチック土坑遺構3基、土坑2基、礫群が確認された。

竪穴住居跡は、いずれもⅢd層上面から掘り込まれ、石囲炉をもつ、主柱穴と明確に判断されるピットを確認することはできなかったが、おおよそ円形のプランのものである。炉は川原石によって円形に作られ、強い焼痕が認められ、鑑定の結果、かなり使い込まれたものと判断されたことから、生活の痕跡を伺わせる。第2号竪穴住居跡以外は全て縄文時代後期前葉の構築期と考えられる。

遺構保存を最優先と考え、トレンチ掘りを多用した調査であったため、住居跡の数は更に増えるものと予想される。調査区内での住居跡の分布は台地縁辺部下の湧水地を囲むように半円形に配置され、中央部は空洞化する傾向にある。構築条件については、これまで大湯環状列石周辺で確認されてきた大半の遺構は地形を考慮して小丘部に構築される傾向にあったが、本調査区で確認された竪穴住居跡は、この小丘部に限定されず、そのため遺構確認に苦慮した。

竪穴住居跡は、これまでの調査から本調査地北東側（F₁区・第6次）区域で7軒、第17次野中堂環状列石周囲で確認された2軒の計9軒が存在は知られていた。野中堂環状列石周囲で検出した竪穴住居跡は1軒が縄文時代後期中葉のものである。また、F₁区で確認された竪穴住居跡のうち3軒は炉跡や焼土を伴わず、規模も大きいことから住居跡とは性格を異にする可能性が強いものとされているため、本来F₁区域では4軒の竪穴住居跡の存在を考えたことが妥当であろう。さらに、同区域では、調査区内の一部区域に住居跡が集中し、重複関係もみられ、住居内には「コ」の字型の石組の特殊施設を持つなど、F₁区域は生活区域とは性格が異なる地域であると判断できる。また、F₁区域の住居跡はその後の調査で北側に広がらないこ

とが判明している。これらのことから、史跡内での本来の性格を意味する竪穴住居跡群とよばれるものの検出は本調査区が初といえる。しかし、大湯環状列石を構築している夥しいほどの配石の敷に見合う住居跡数が確認できなかったことから、本調査区で確認された住居跡は、大湯環状列石を作り始めた人々、若しくは、万座環状列石を構成する一小塊のグループの生活の場である可能性が強いと考えられる。今後は史跡内・外を問わず、大湯環状列石を構築した人々の集落解明のための調査も必要となる。

調査区内で比較的多く確認された焼土遺構は、住居跡と近接する場所や構築時期を異にして住居跡堆積土上部で確認される特徴を示した。また、完形復元土器を伴う遺構や近接して復元可能土器を伴う遺構が目立った。このことから、住居跡廃棄以降もこの区域が利用されていたことを示唆する。また、後期中葉の構築時期の第2号竪穴住居跡の近接地に構築された大型の第1、2、4号フラスコ状土坑は後期前葉から中葉の土器が出土したことから長期間にわたり同区域が利用されていたものと判断できる。

礫群の分布は、住居跡、遺構と関連（セット）する様相を示すと思われる。遺構構築時期に投げ捨てられた可能性が考えられ、通常は沢部分を捨て場にすると考えられるが、湧水地の保護を考慮に入れていたことを伺わせる。

昨年度に続き、大半の遺物に関しては、レベル測量を行い、出土状況を図化して取り上げ、調査区一部での基本層序ごとの土器編年を試みた。明確な成果を得ることができなかったが、今後も粘り強く継続することで好結果を見いだすことができると考える。なお、遺物では、第6次調査でもその傾向はあったが、縄文時代前期の復元可能土器・土器破片がまとまって出土している。また、鐔型土製品に「人体文」状の文様を施したものが出土している。

G₂区では、旧地形の確認を主な目的に調査を行った。その結果、西側台地縁辺部からのびる大きな沢とそれに平行するように小沢が確認された。旧地形は全体的に波状の起伏のある地形であることが判明した。また、Tピット、フラスコ状土坑が確認され、フラスコ状土坑は小丘部に集中し、Tピットは沢部に構築されている。特に、第7次F₂区で確認されたTピットは沢部の流れる方向に対して平行に構築されるのに対し、本調査区では、沢部に対し直交する状況で構築されている。規模もこれまで検出した中で最大のものである。構築法、規模の違いは狩猟目的動物の違いを示すものであろうか。

遺物の出土は少量であったが、遺物集中分布域は2区域に区分される傾向にある。1区域は調査区北東端で、この区域は万座環状列石の遺物廃棄域（図4）の境界部分である。もう一方は南西部端である。この区域の遺物集中要素としては、台地縁辺部に竪穴住居跡域が広がることを伺わせるものであろう。

2. 歴史時代の遺構について

D₂・G₂区で検出した歴史時代の遺構は、竪穴住居跡、溝状遺構である。溝状遺構は竪穴形態から古代の道路の可能性が高いものである。住居跡はD₂区で台地縁辺部の沢部を取り囲むように検出した。これまでの調査からも数多くみつかっており、台地縁辺部付近に比較的大きな平安時代の集落があり、D₂区、G₂区双方で検出した溝状遺構により当時の人々の流動を垣間見ることができる。

3. D₂区出土土器破片及び史跡周辺出土粘土の胎土分析について

本調査では、調査によって土器・土器破片が出土して以来、課題であった、土器製作用の粘土産地確定のため自然科学的分析による同定を試みた。同定のための試料としては、調査地(D₂区)出土の土器破片と史跡周辺産出の土器製作に適すと思われる粘土について分析を試みた。

粘土は、史跡より北側約1kmにある黒森山より流れ出る小川から採取したものである。分析の結果は、第VI章で記したが、本分析に使用した粘土は調査出土の土器破片の胎土と違うことが判明した。

粘土の特徴としては、水分を多くふくみ、乾きが早いという点があげられる。また、土器破片胎土の成分と比較し鉄が多く、粘土鉱物が少なく、通常「焼き物」に利用される良質の粘土に多くふくまれる長石が少ないこと等が挙げられる。これらのことから、今回分析を試みた粘土は、土器製作に適さないことが判明した。

分析を行った田村氏によれば、通常、「焼き物」に利用される粘土にはX線鉱物鑑定一覧表にある絹雲母が多くふくまれているものが多く、これらの粘土は鉱山地帯に多くみられるという。このことからすれば、大湯環状列石を構築する石(石英閃緑岩)の産出地である安久谷川付近が偶然ながら鉱山地帯であるため、今後は同付近に粘土の産出地を求めていきたいと思う。

本分析を行ったことにより、これまで全く不明であった粘土の産地のめどが多少ながら明確となってきたことは、今後の大湯環状列石解明と史跡活用にむけて大きな成果であったといえる。

来年度で大湯環状列石の調査も20年目という節目を迎えるにあたって、今後はこれまでの膨大な資料の再考・再分析を行い、調査のまとめを行っていく方針である。併せて史跡外の関連遺跡も視野に入れていきたいと思う。

参 考 文 献

- 文化財保護委員会 「大湯町環状列石」 1953年
- 青森県教育委員会 「中の平遺跡発掘調査報告書」 1975年
「長七谷地貝塚」 1980年
- 青森市教育委員会 「小牧野遺跡発掘調査報告書」Ⅰ～Ⅶ 1996年～
- 岩手県教育委員会 「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書 西田遺跡」 1980年
- 大迫町教育委員会 「立石遺跡 昭和52年・53年度発掘調査報告書」 1979年
- 鷹巣町教育委員会 「伊勢堂岱遺跡詳細分布調査報告書(1)～(3)」 1998年～
- 秋田県教育委員会 「高屋館跡発掘調査報告書」 1988年
「東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅱ-歌内遺跡一」 1982年
「東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅲ
一鳥居平遺跡・飛鳥平遺跡・北の林Ⅰ遺跡一」 1982年
「東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅴ
一上葛岡Ⅳ遺跡・駒林遺跡・案内Ⅱ遺跡・猿ヶ平Ⅰ遺跡一」 1982年
「東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅵ
一猿ヶ平Ⅱ遺跡・室田遺跡・一本杉遺跡・案内Ⅲ遺跡一」 1983年
「東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅶ
一館平館Ⅰ遺跡・館平館Ⅱ遺跡・白長根館Ⅰ遺跡・白長根館Ⅱ遺跡・
丑森遺跡・道合Ⅰ遺跡・道合Ⅱ遺跡・大岱Ⅱ遺跡・大岱Ⅲ遺跡・
円川原遺跡・大岱Ⅳ遺跡一」 1984年
「東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅹ
一はりま館遺跡・横館遺跡・大岱Ⅰ遺跡一」 1984年
「東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅺ
一孫右工門館遺跡・案内Ⅰ遺跡・妻の神Ⅱ遺跡・下乳牛遺跡・
西町Ⅰ遺跡・西町Ⅱ遺跡一」 1984年
「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅲ
一上野台遺跡・寺沢遺跡・半仙遺跡一」 1989年
「東北横断自動車道東和秋田線発掘調査報告書ⅩⅢ
一茂竹沢遺跡一」 1993年
「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ⅩⅣ-小田Ⅳ遺跡一」 1994年
「湯前遺跡(第2次)」 2000年

- 【上野遺跡】 2000年
 【竜毛沢館跡発掘調査報告書】 1990年
 【国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書VI
 一上野遺跡一】 1992年
 【桐内C遺跡】 2000年
 【根下戸道下遺跡】 2000年
 【八木遺跡発掘調査報告書】 1989年
 【曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書V
 一中山遺跡一】 1994年
 【はりま館遺跡発掘調査報告書】 1990年
 【一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書I
 一寒川I遺跡・寒川II遺跡一】 1988年
 【国道103号大館南バイパス建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査概報
 一山王岱遺跡一】 1988年
 ニツ井町教育委員会【東北電力(株)北奥幹線新設工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
 一茶葉ノ木遺跡・加世神館遺跡・竜毛沢III遺跡・竜毛沢IV遺跡・
 竜毛沢V遺跡一】 1996年
 【烏野遺跡第4次発掘調査概報】 1993年
 阿部 義平 【日時計の考察 大湯環状列石の配石類型の意味】
 【よねしろ考古 第2号】 よねしろ考古学研究会 1986年
 小林 達雄 【縄文人の世界】朝日選書557 朝日新聞社 1996年
 【縄文時代の自然の社会化】『季刊考古学・別冊6』雄山閣 1995年
 【縄文土器の研究】小学館1994
 小林 達雄 ほか 【縄文時代の考古学】学生社 1998年
 岡村 道雄 【ここまでわかった日本の先史時代】角川書店 1997年
 富樫 泰時 【秋田県大湯遺跡】『季刊考古学・別冊6』雄山閣 1995年
 【日本の古代遺跡24 秋田県】保育社 1985年
 林 謙作 【II 縄文時代 3マツリと記念物】
 【発掘が語る日本史1 北海道・東北編】新人物往来社 1986年
 戸沢 充則 編 【縄文時代研究事典】東京堂出版 1994年
 浅川 滋男 編 【先史日本の住居とその周辺】
 【奈良国立文化財研究所シンポジウム】同成社 1998年

- 成田 滋彦 「青森県の土器」『縄文文化の研究 4』 雄山閣 1984年
- 小林 克 「東北地方北部縄文時代の墓制」『月刊考古学ジャーナル 422』
ニュー・サイエンス社 1997年
- 葛西 勳 「十腰内Ⅰ式土器の編年的細分」『北奥古代文化11』
北奥古代文化研究会1980年
- 鈴木 克彦 「北日本の縄文後期土器編年の研究」雄山閣 2001年
『日本の古代遺跡29 青森』保育社 1986年
- 水野 正好 「環状組石墓群の意味するもの」『信濃20-4』1968年
- 村越 潔 「円筒土器文化」雄山閣 1974年
『土偶とその情報』研究会
『東北・北海道の土偶Ⅰ』土偶シンポジウム2 秋田大会 1994年
- 玉川時雄・小金井晴 「土師器・須恵器の知識」東京美術 1984年
- 麻生 優・白石浩之 「縄文土器の知識Ⅰ」東京美術 1986年
- 藤村 東男 「縄文土器の知識Ⅱ」東京美術 1984年
- 江坂 輝彌 「石神遺跡」ニューサイエンス社 1970年
- 岩手県立博物館 「岩手の土器 県内出土資料の集成」1982年
- 野村 崇・宇田川洋 「旧石器・縄文文化」北海道新聞社 2001年

上記の他に多くの研究論文、報告書を活用させていただいた。

報 告 書 抄 録

ふりがな	とくべつしせきおおゆかんじょうれつせきはつくつちようさほうこくしよ (19)							
書名	特別史跡 大湯環状列石発掘調査報告書 (19)							
副書名								
巻次								
シリーズ名	鹿角市文化財調査資料							
シリーズ番号								
編著者名	鹿角市教育委員会 (生涯学習課)							
編集機関	鹿角市教育委員会							
所在地	〒018-5292 秋田県鹿角市花輪字荒田4番地1							
発行年月日	西暦2003年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
特別史跡 大湯環状列石	秋田県鹿角市 十和田大湯 字万座 字野中堂 字一本木 後口	05209	123	40度 16分 20秒	140度 48分 49秒	2003. 5.21 ? 2003.11. 6	1,545㎡	万座環状 列石西側 台地縁辺 部、西側 周辺の遺 構分布。 地形の把 握
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
特別史跡 大湯環状列石	環状列石	縄文時代後期 (平安)	竪穴住居跡 土坑 フラスコ状土坑 焼土遺構 Tピット など		縄文土器 石器 石製品 土製品	環状列石周辺で 竪穴住居跡域が みつかる。		



PL 2 万座环状列石、G₃区、D₃区全景



P L 3 G, 区、D, 区全景



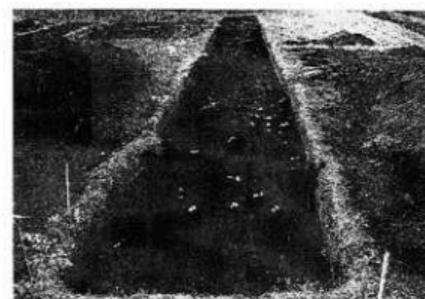
f トレンチ SE→NW



d トレンチ SE→NW



h トレンチ NW→SE



j トレンチ SE→NW



k トレンチ SE→NW



b トレンチ E→W

PL 4 D。区遺構確認状況



」トレンチ NW→SE



iトレンチ SE→NW



fトレンチ NW→SE



gトレンチ NW→SE



gトレンチ SE→NW



iトレンチ NW→SE

PL5 D,区遺構確認状況



Aトレンチ SE→NW



第1号竪穴住居跡



第1号竪穴住居跡



第4号竪穴住居跡



第4号竪穴住居跡、炉(1)



第4号竪穴住居跡、炉(2)

PL 6 D₉区Aトレンチ、第1・4号竪穴住居跡



Cトレンチ NW→SE



Cトレンチ NW→SE



第2号竪穴住居跡 N→S



第2号竪穴住居跡 S→N



第2号竪穴住居跡



第2・3・4・5号 土坑

PL7 D₃区Cトレンチ、第2号竪穴住居跡、土坑遺構確認状況



第3号竪穴住居跡



第3号竪穴住居、炉



Iトレンチ NW→SE



第7号竪穴住居跡 (1)



第7号竪穴住居跡 (2)

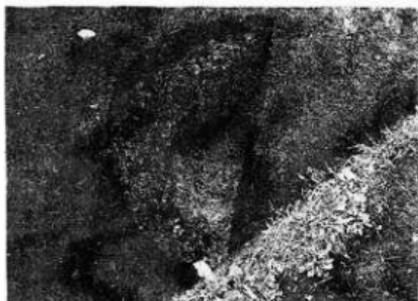


第7号竪穴住居跡 (3)

PL8 D区Iトレンチ、第3・7号竪穴住居跡



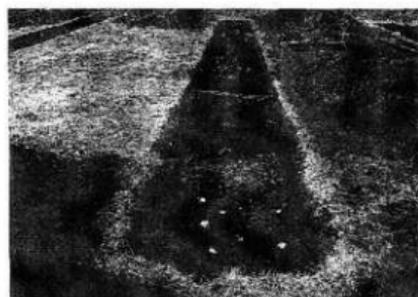
第6号フラスコ状土坑



第7号フラスコ状土坑



佐藤調査員による調査指導



Cトレンチ SE→NW



第10号竪穴住居跡(平安)



第19次発掘調査現地説明会風景

PL9 D区Cトレンチ、フラスコ状土坑、竪穴住居跡、作業風景、現地説明会風景



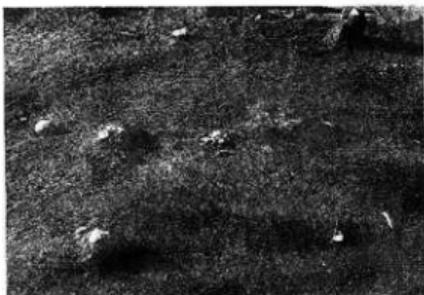
第6号竖穴住居跡



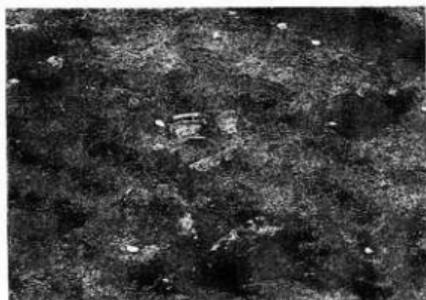
第7号竖穴住居遺物出土状況



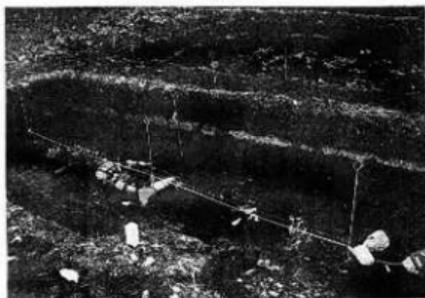
遺物出土状況



第5号焼土跡遺物出土状況

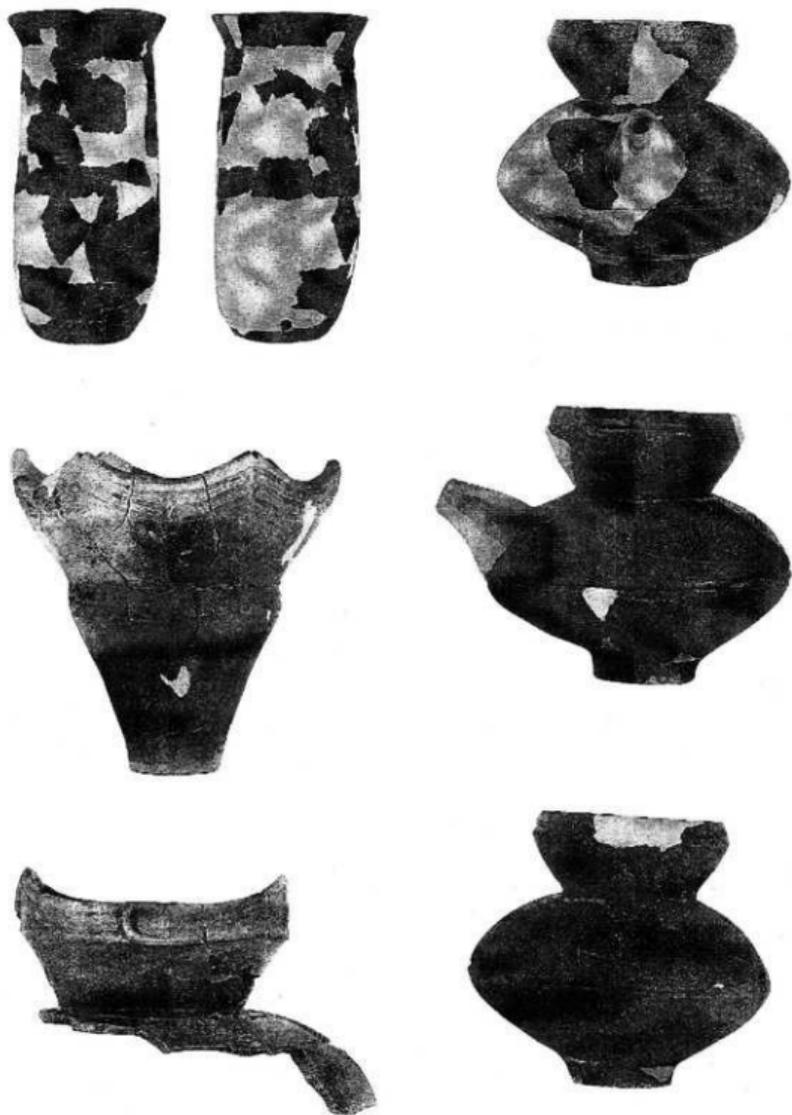


遺物出土状況

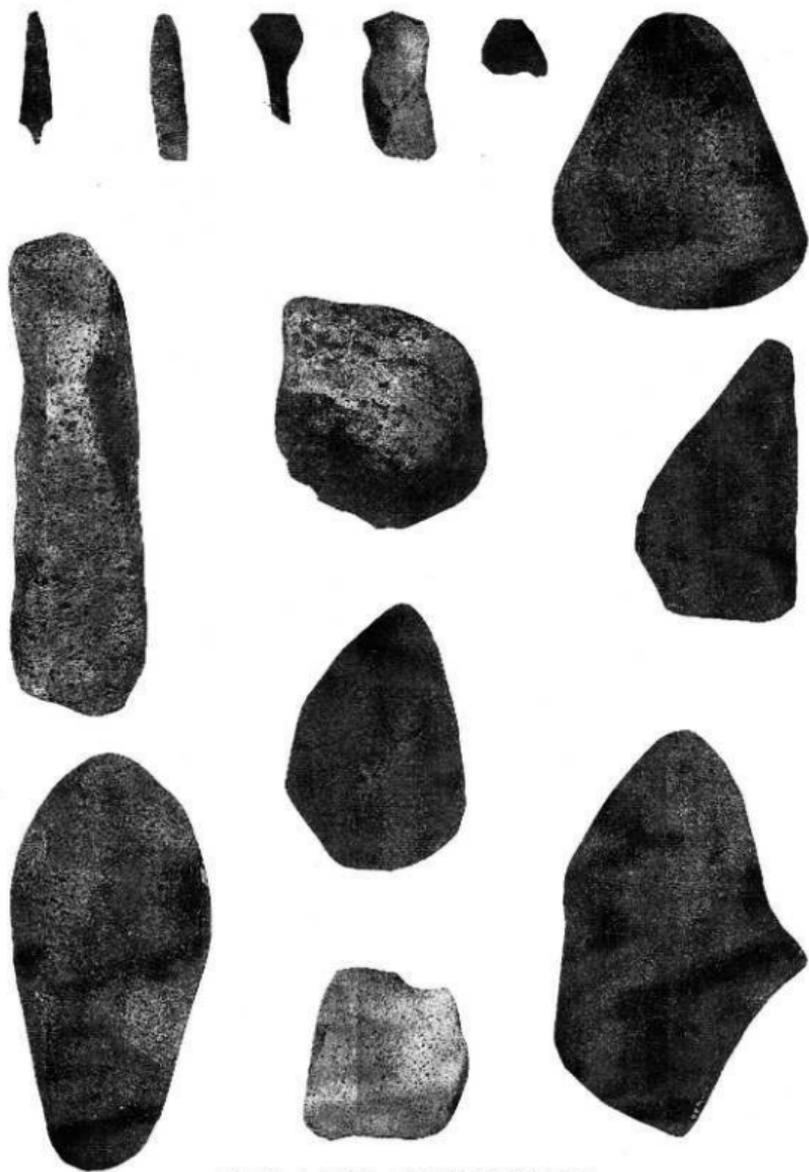


住居跡実測状況

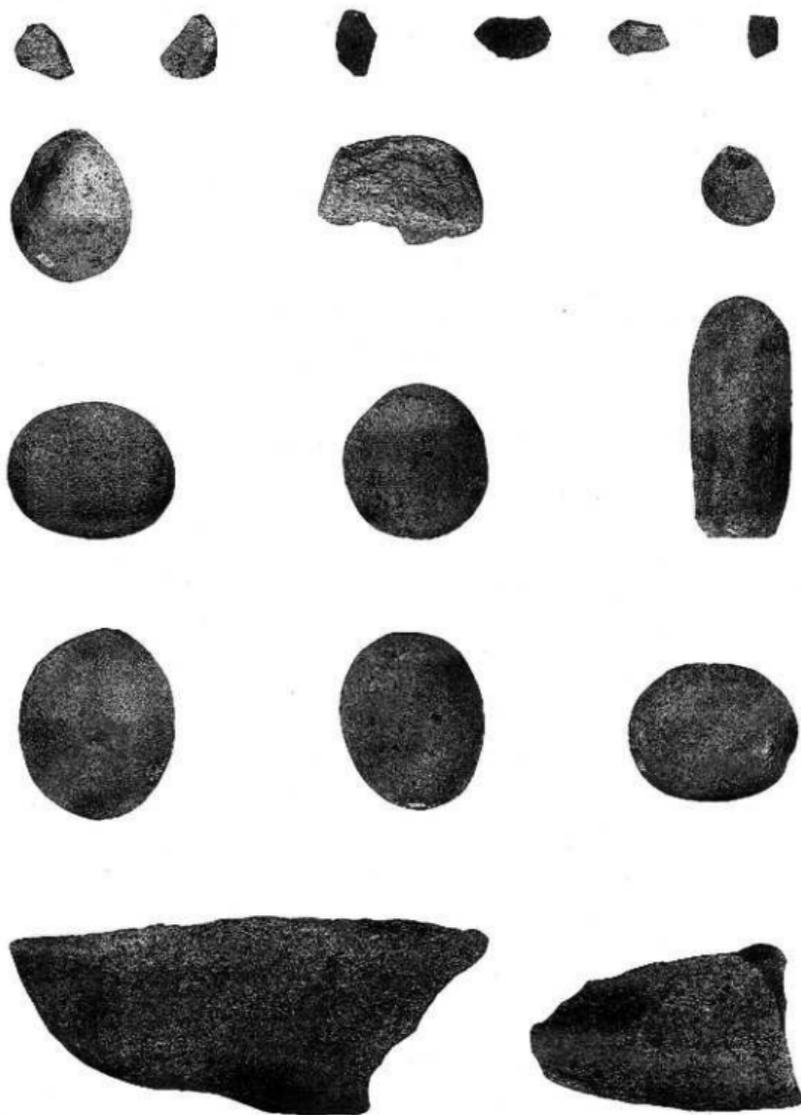
P L 10 D₉区第6号竖穴住居跡遺物出土状況、実測状況



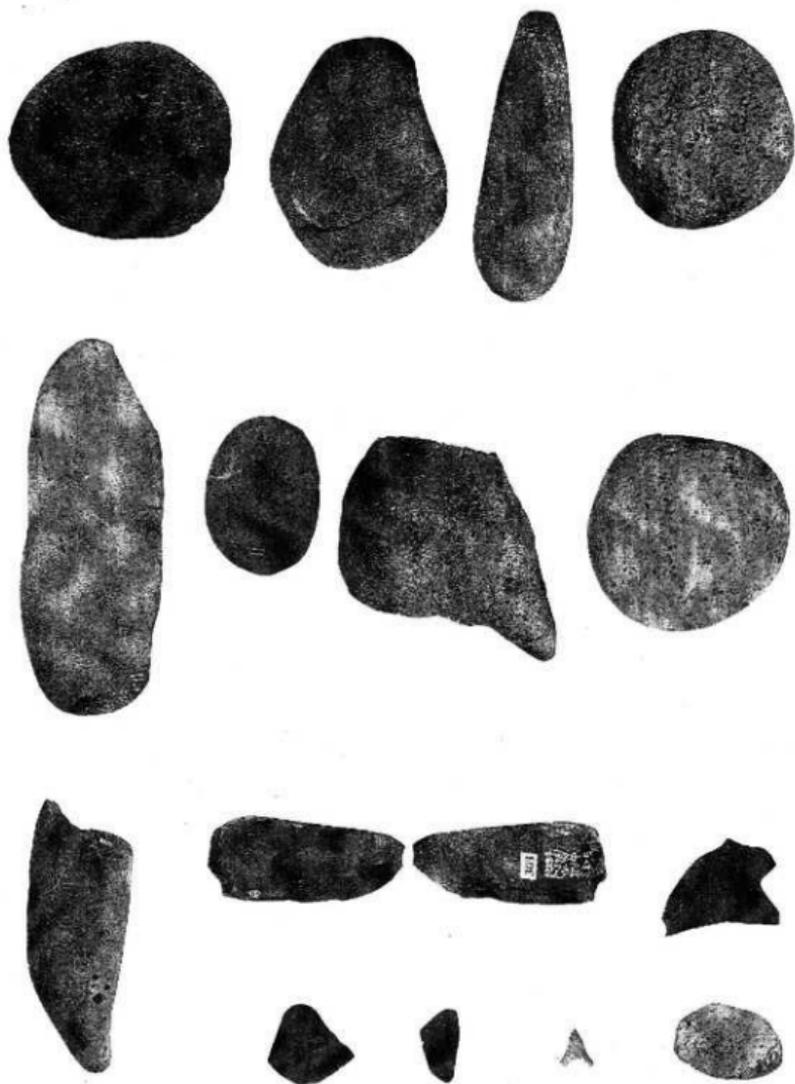
P L 11 D,区第2号整穴住居跡出土土器 (1)



P L 12 D。区第 1 · 2 号整穴住居跡出土石器



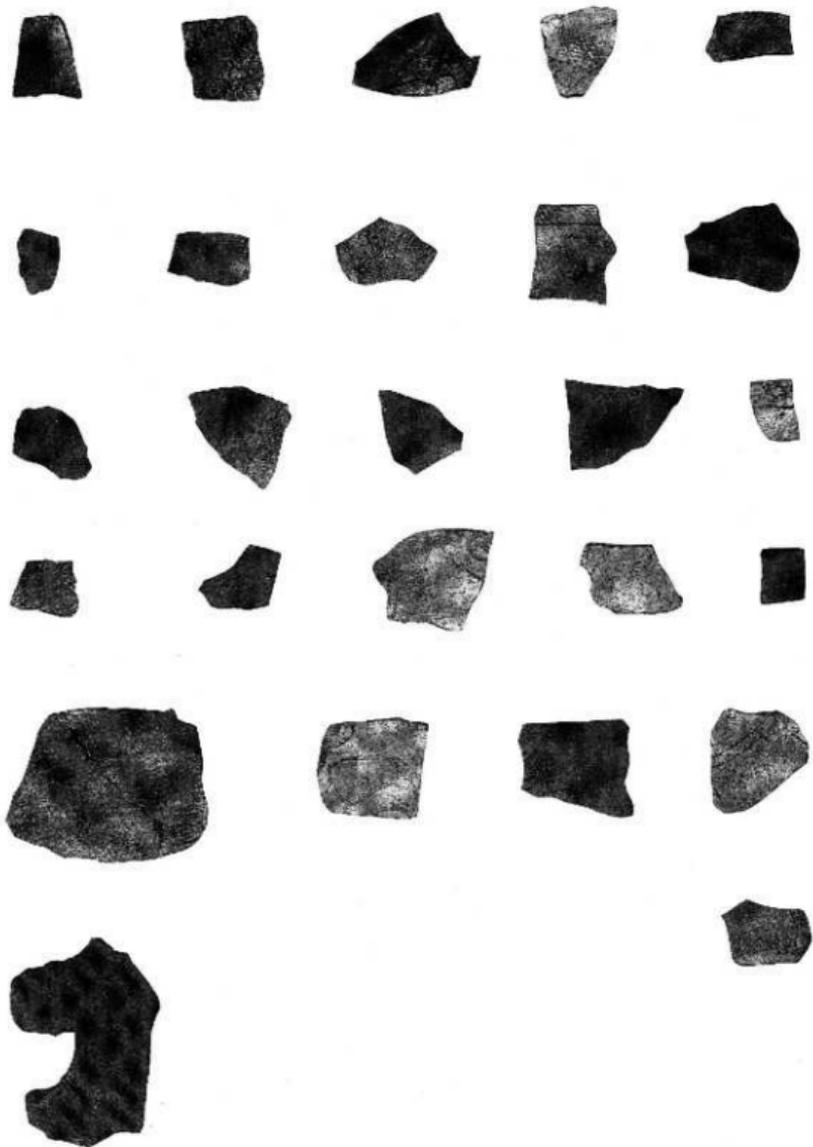
P L 13 D.区第2号竖穴住居跡出土石器



P L 14 D₉区第3·4·5号竖穴住居跡出土石器



P L 15 D。区第 2 · 5 号 竖穴 住居 跡 出 土 土 器、石 器



P L 16 D₉区第1·2号竖穴住居跡出土土器



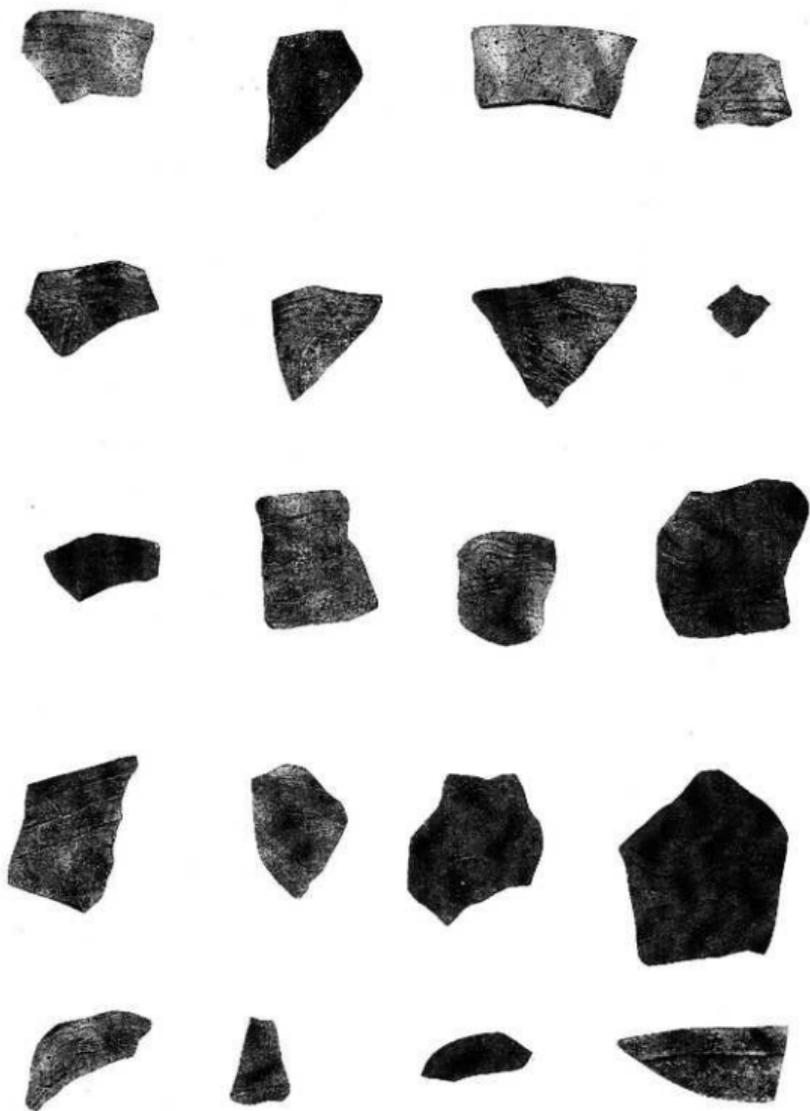
PL 17 D₂区第2号竖穴住居跡、第1号土坑、遺構内出土土器(2)



P L 18 D₉区第2号土坑出土土器(4)



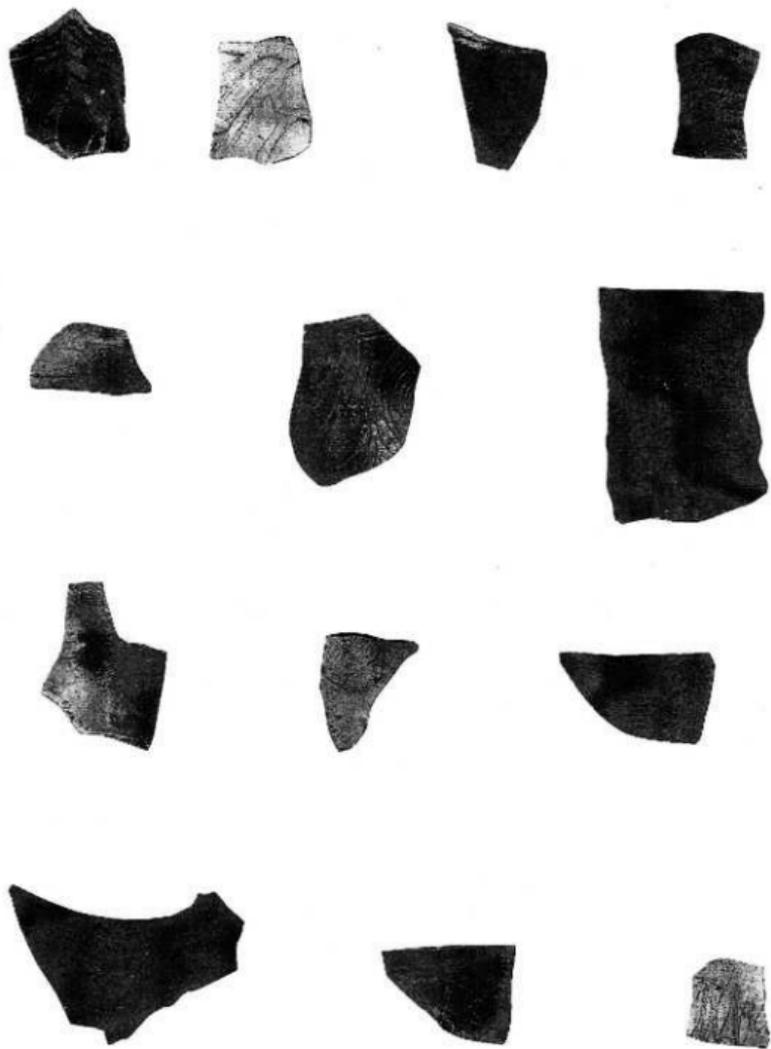
P L 19 D,区第2号土坑出土土器 (3)



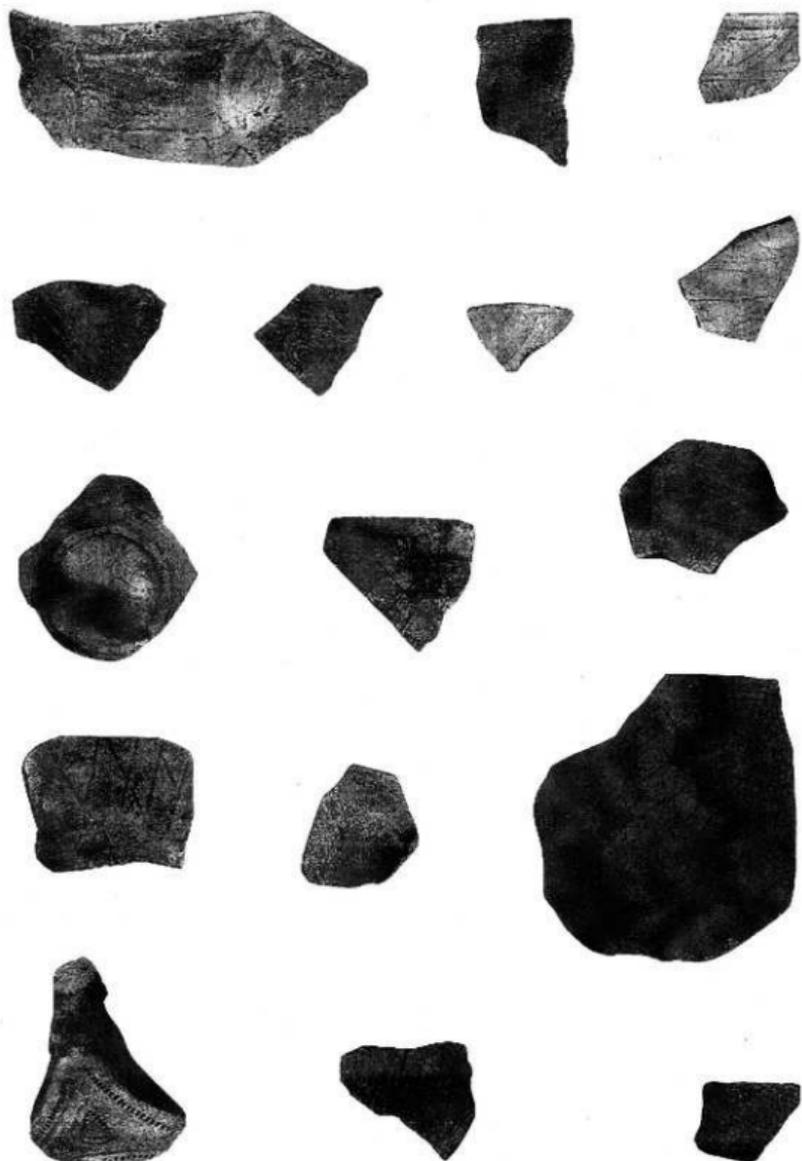
P L 20 D。区第 1 号土坑出土土器



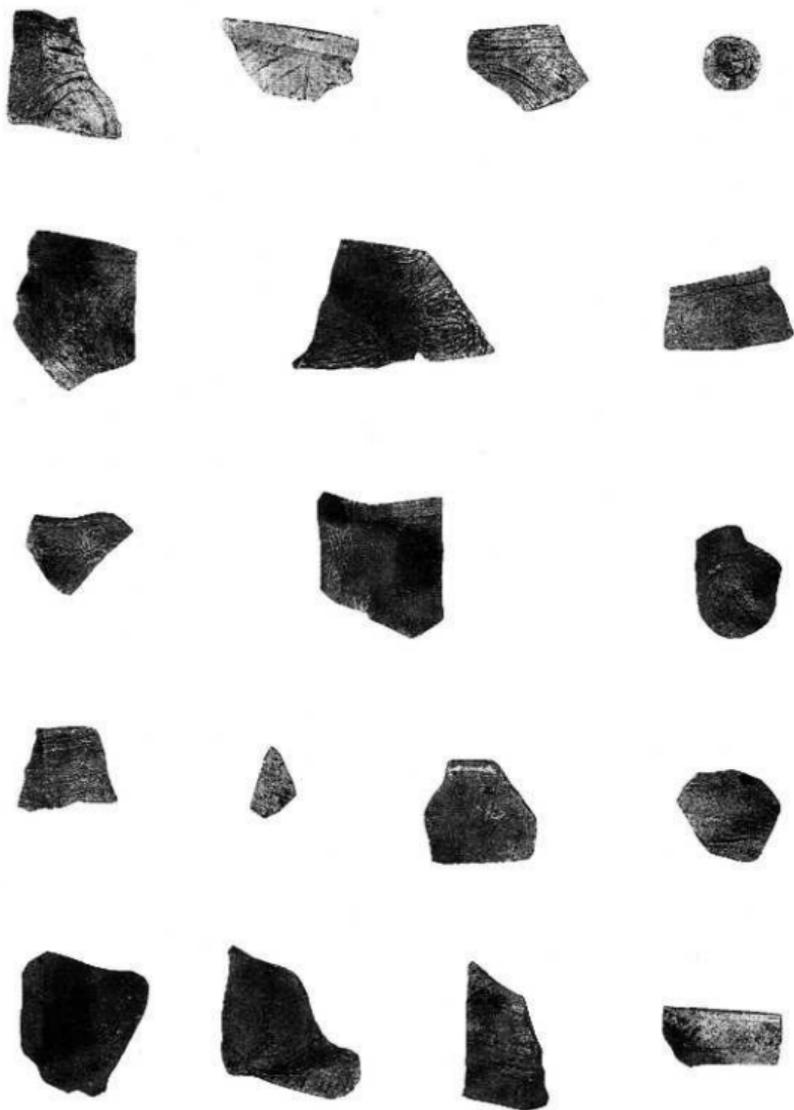
P L 21 D。区第1号土坑出土土器、石器



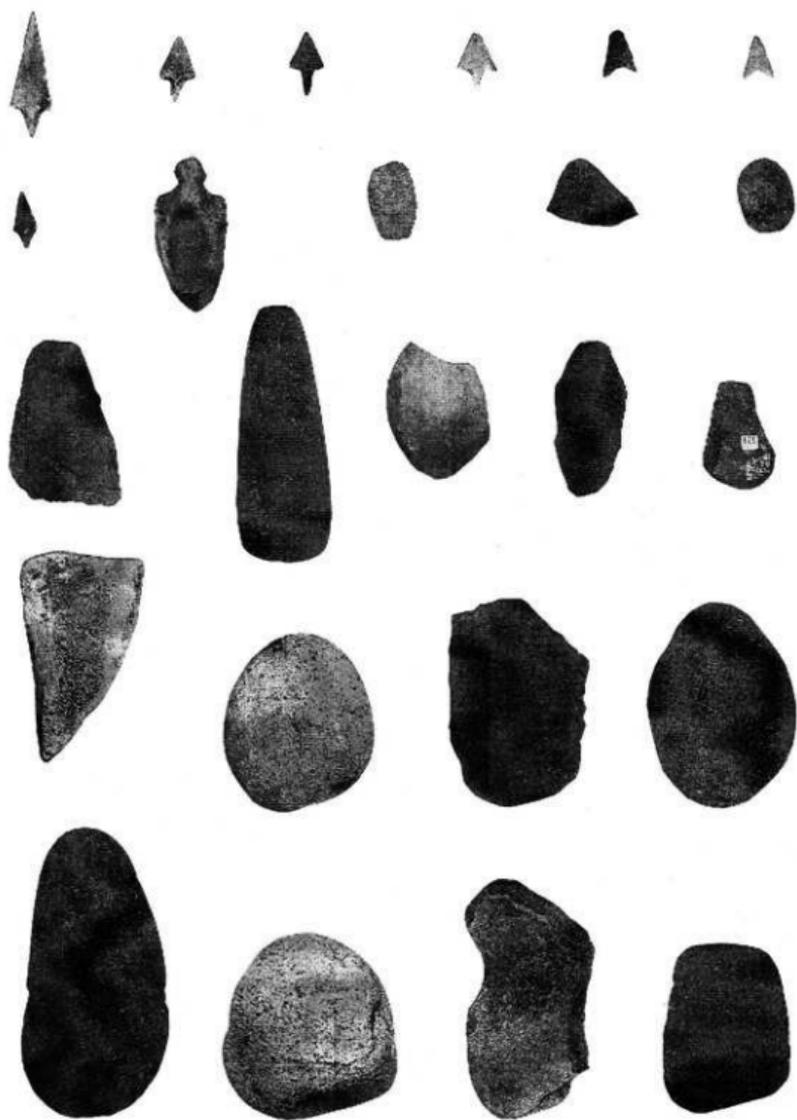
P L 22 D₉区第2号土坑出土土器



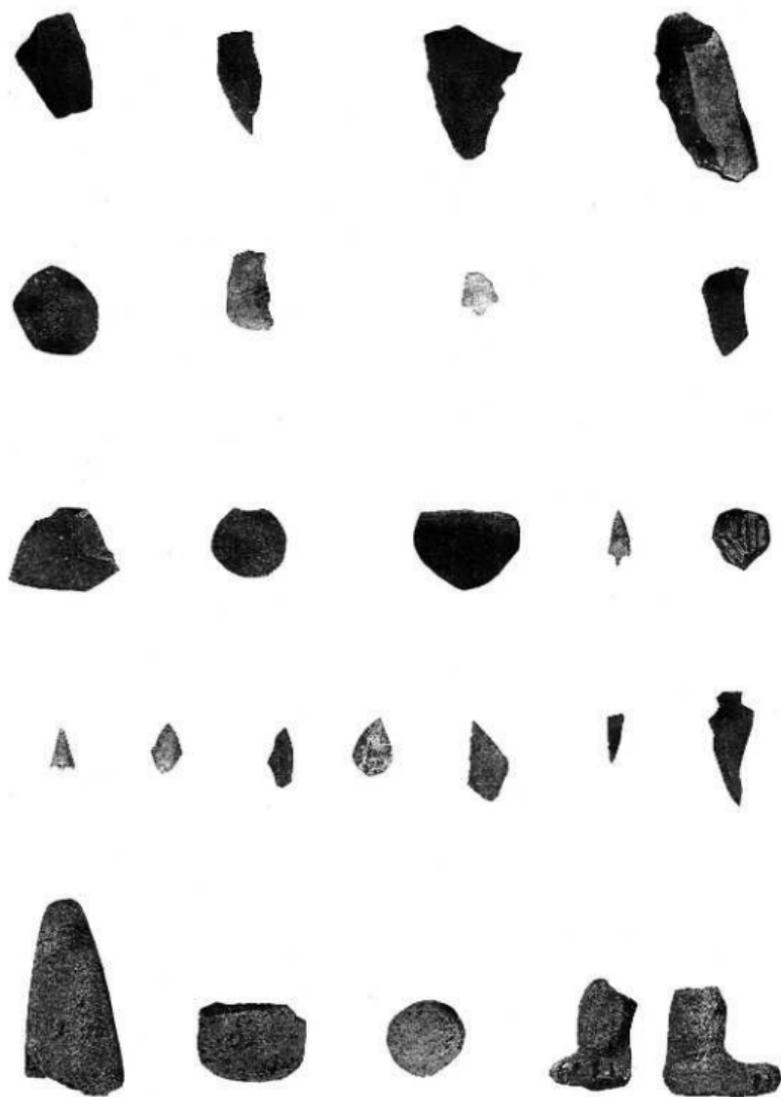
P L 23 D, 区第 1 号土坑出土土器



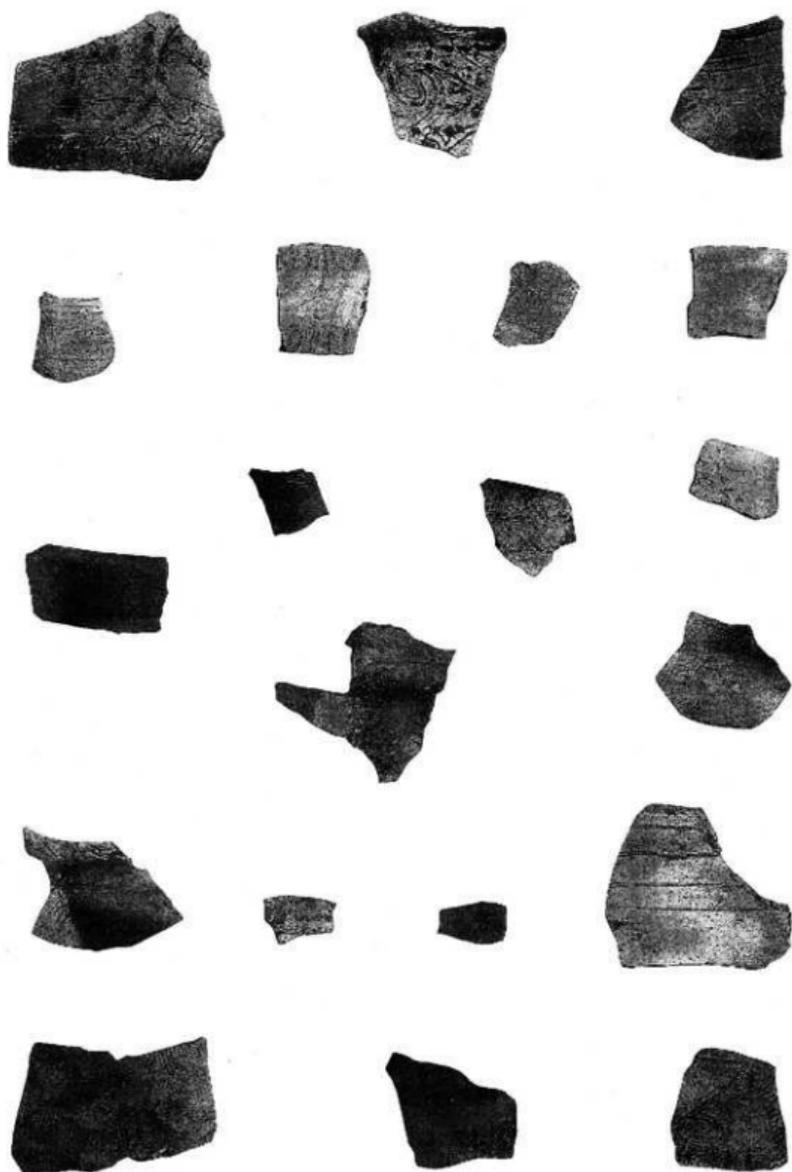
P L 24 D。区第 1・2 号土坑出土土器



P L 25 D, 区第2号土坑、遺構外出土石器



P L 26 D₉区第2号土坑、遗構内出土土器、石器、土製品



P L 27 D区第2・4号土坑、第6・7号フラスコ状土坑出土土器



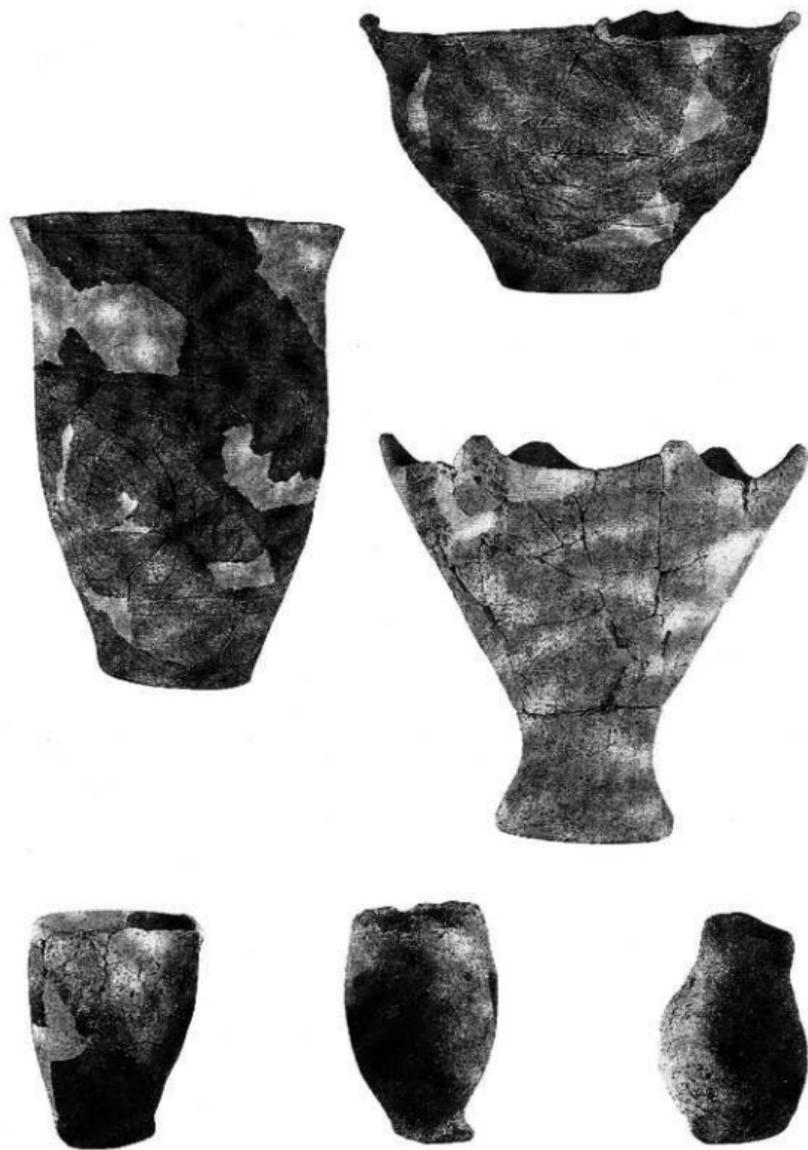
P L 28 D。区第2号土坑出土石器、土製品



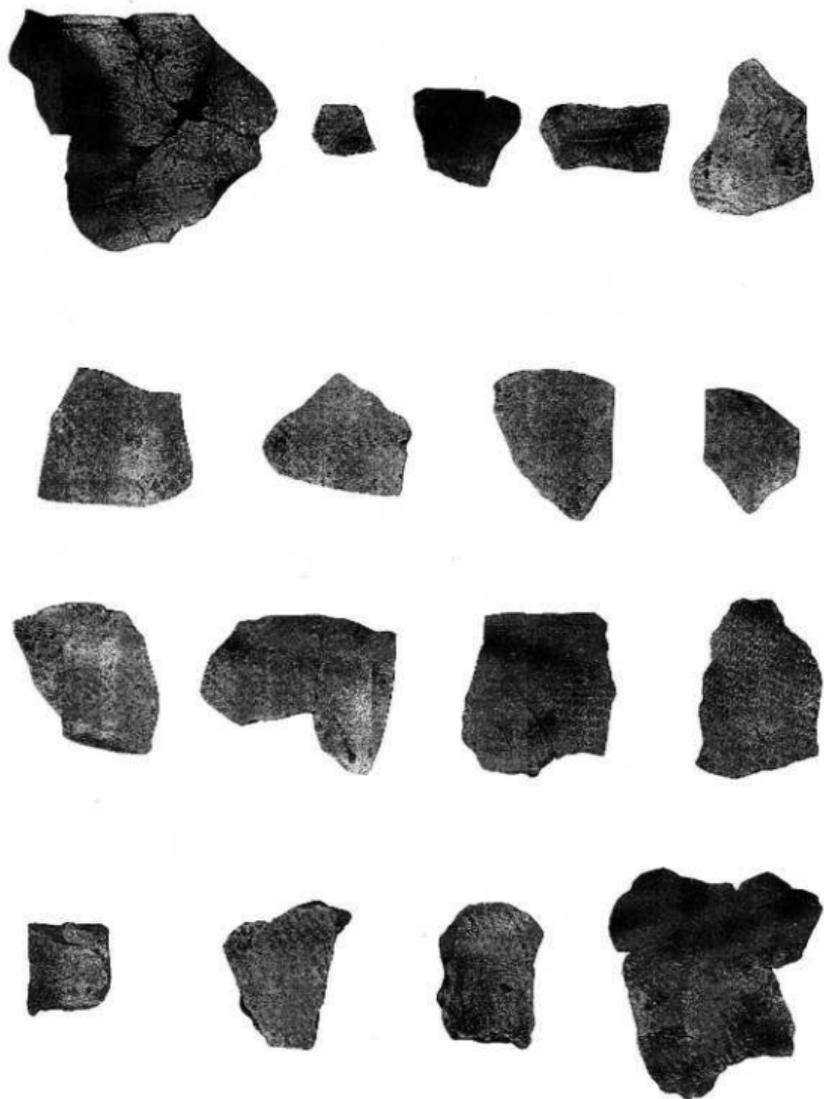
PL 29 D.区土坑出土土製品、石製品



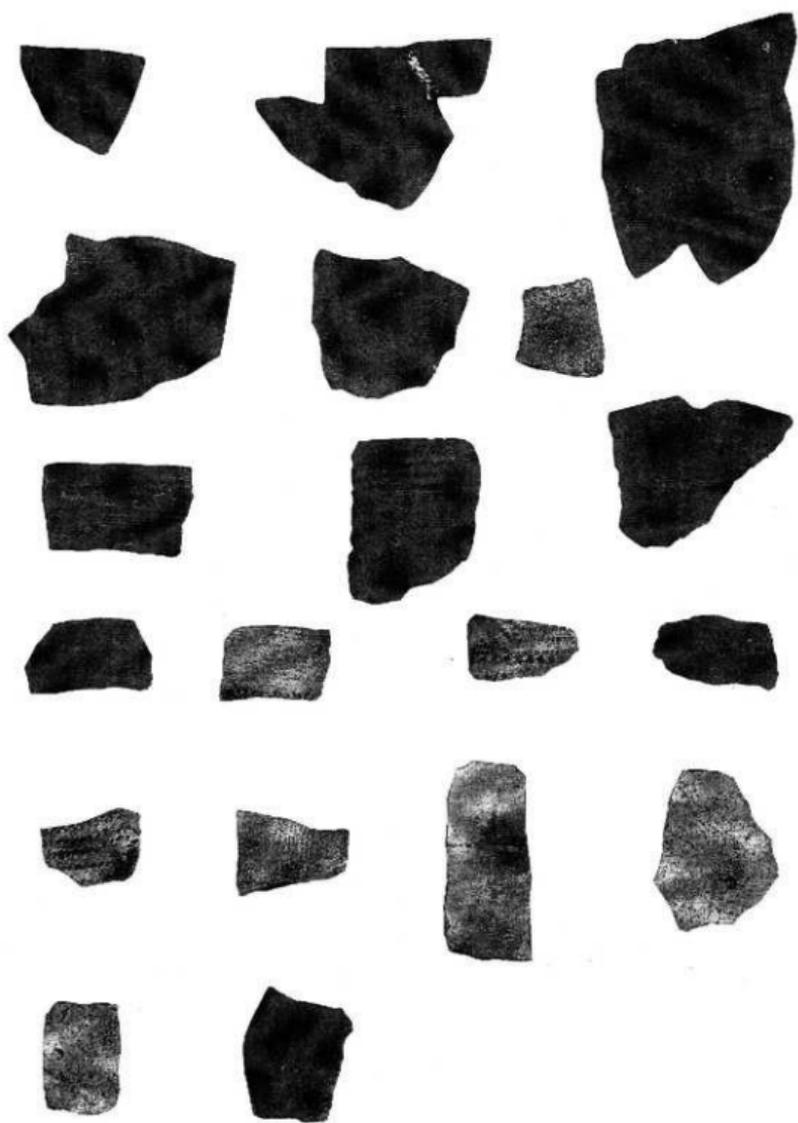
P L 30 D.区遺構外出土土器



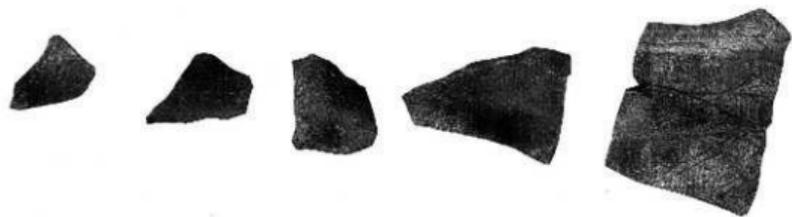
P L 31 D₉区遺構外焼土跡出土土器



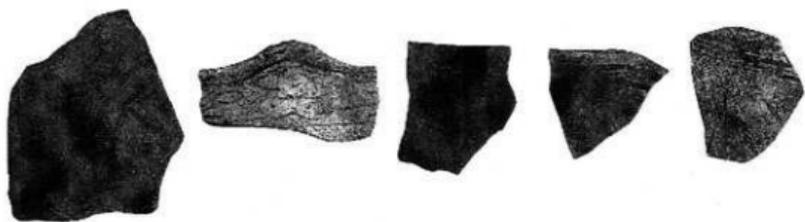
P L 32 D。区遺構外出土土器 (1)



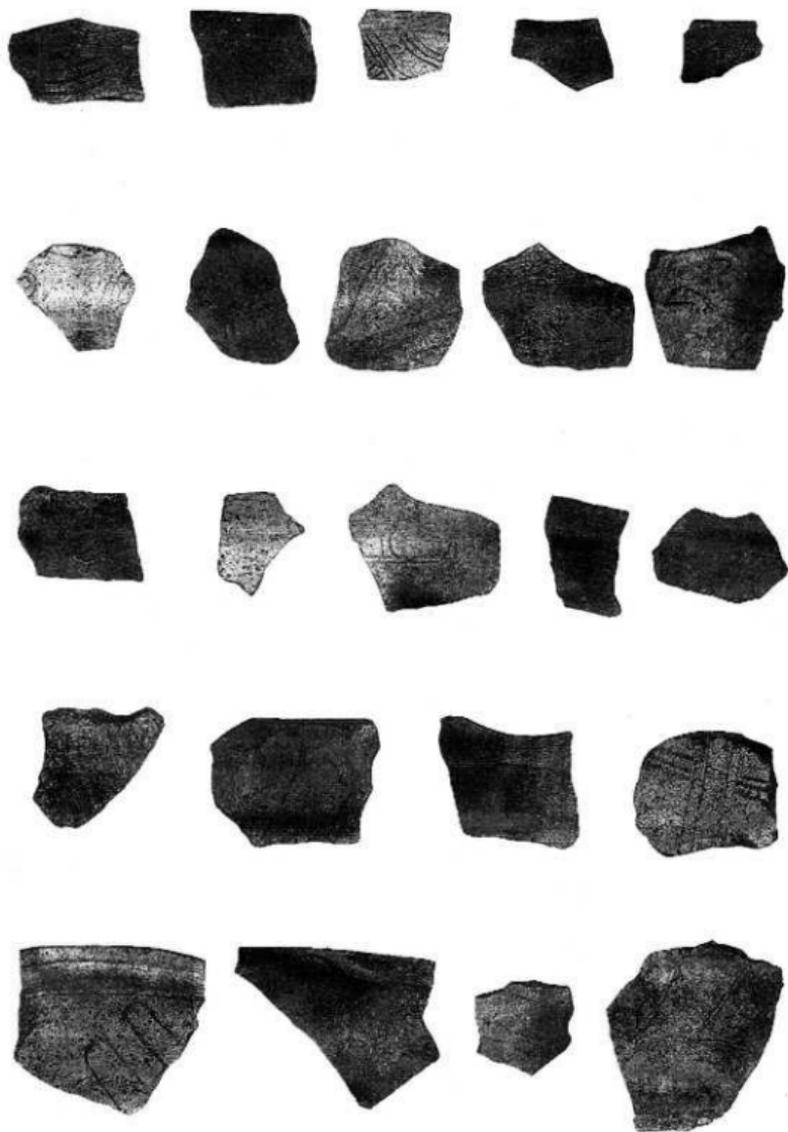
P L 33 D.区遺構外出土土器 (2)



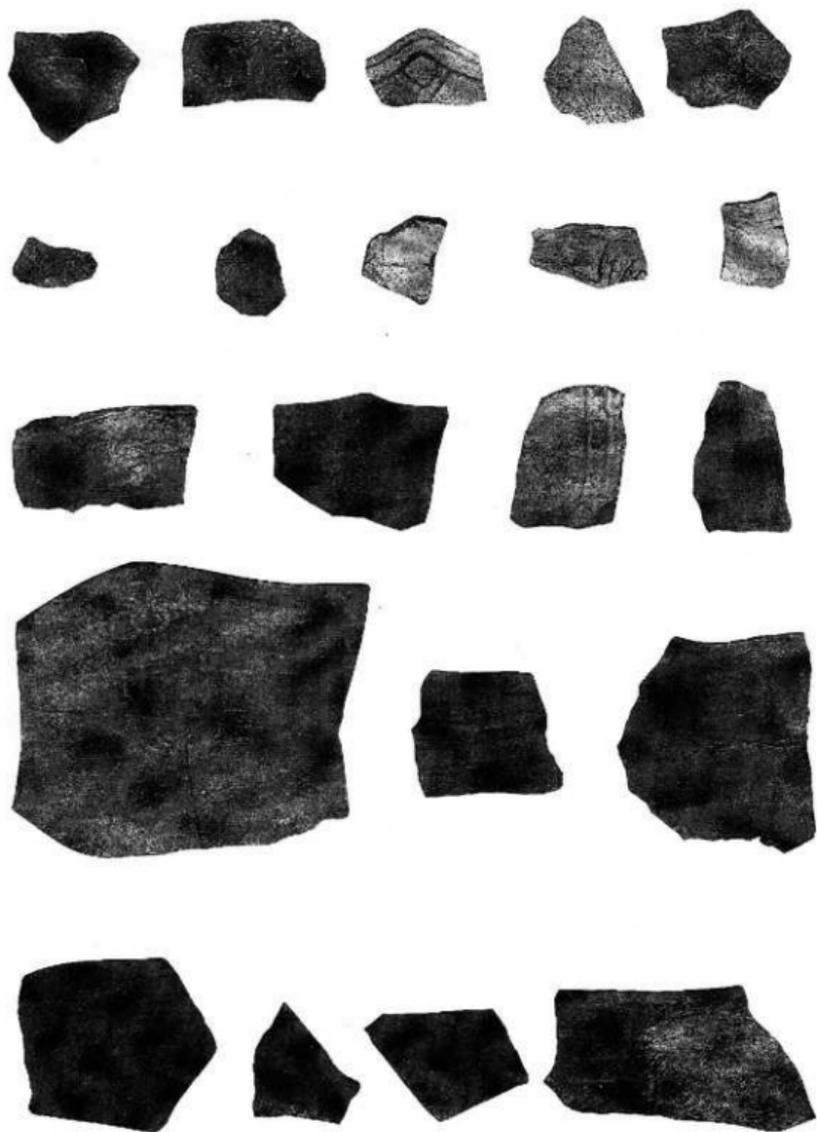
P L 34 D₉区遺構外出土土器 (3)



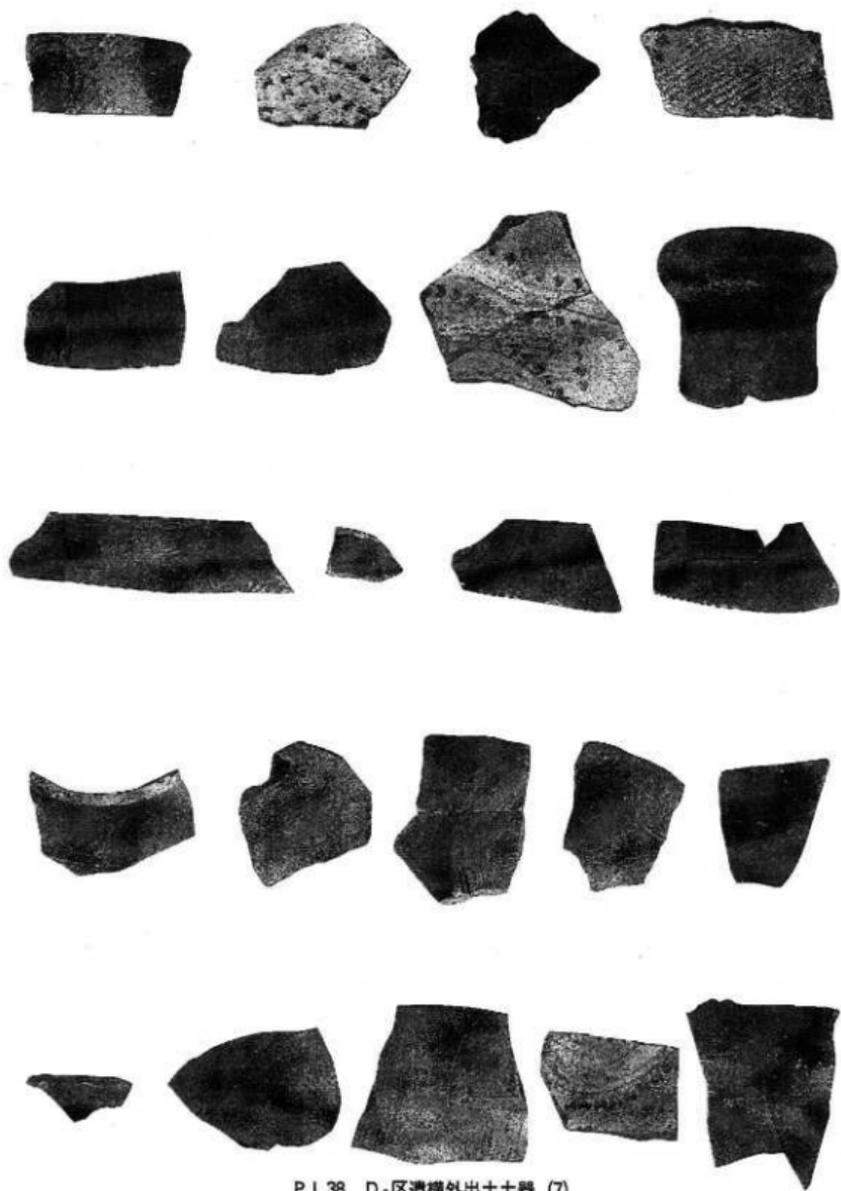
P L 35 D₁区遺構外出土土器 (4)



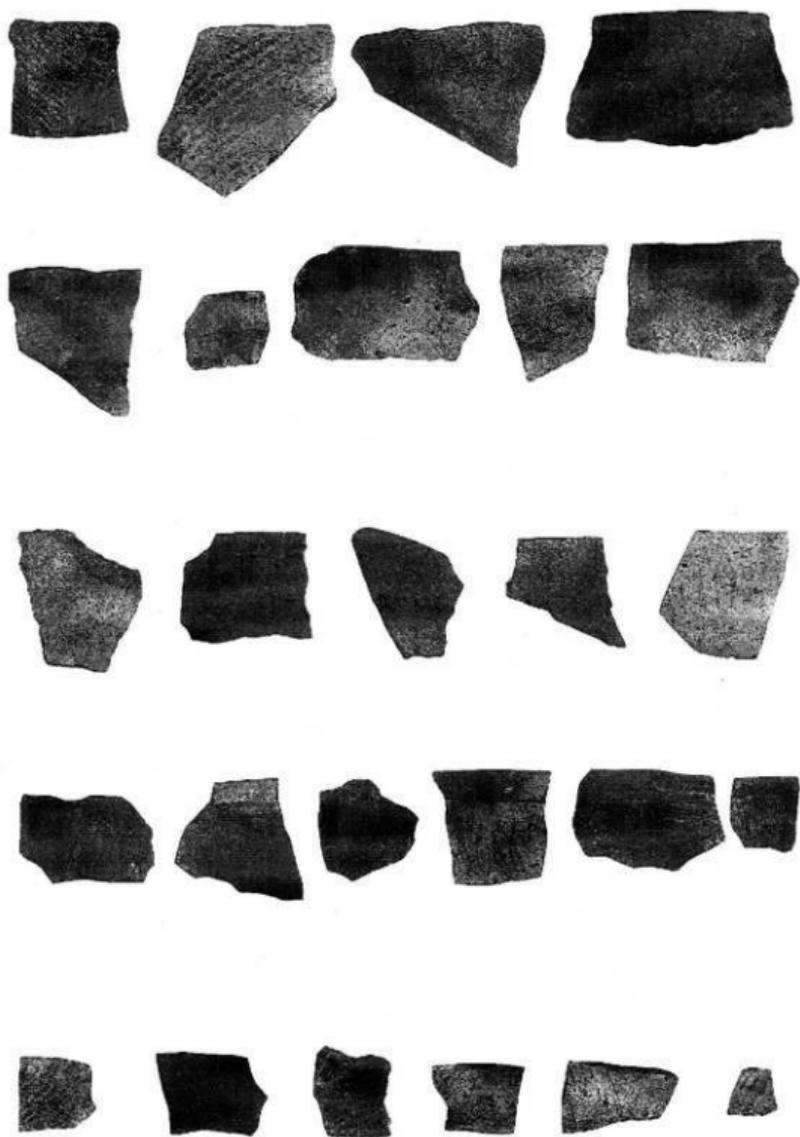
P L 36 D。区遺構外出土土器 (5)



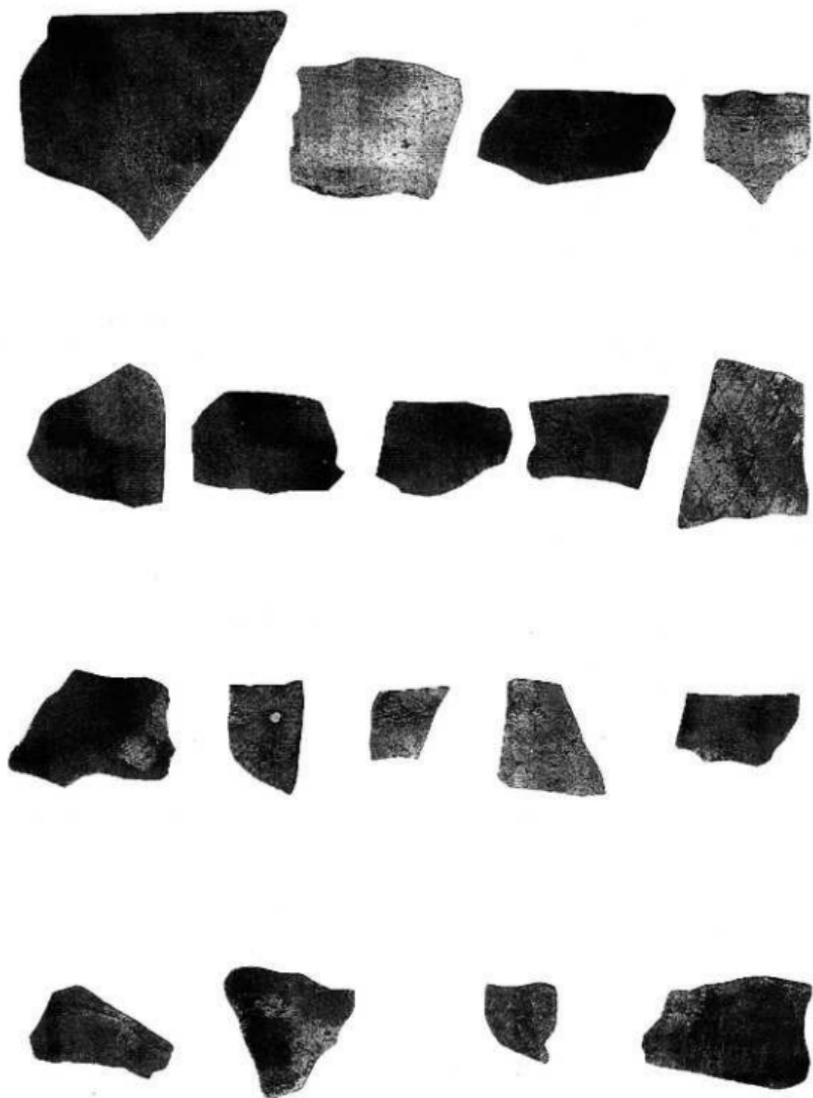
P L 37 D.区道溝外出土土器 (6)



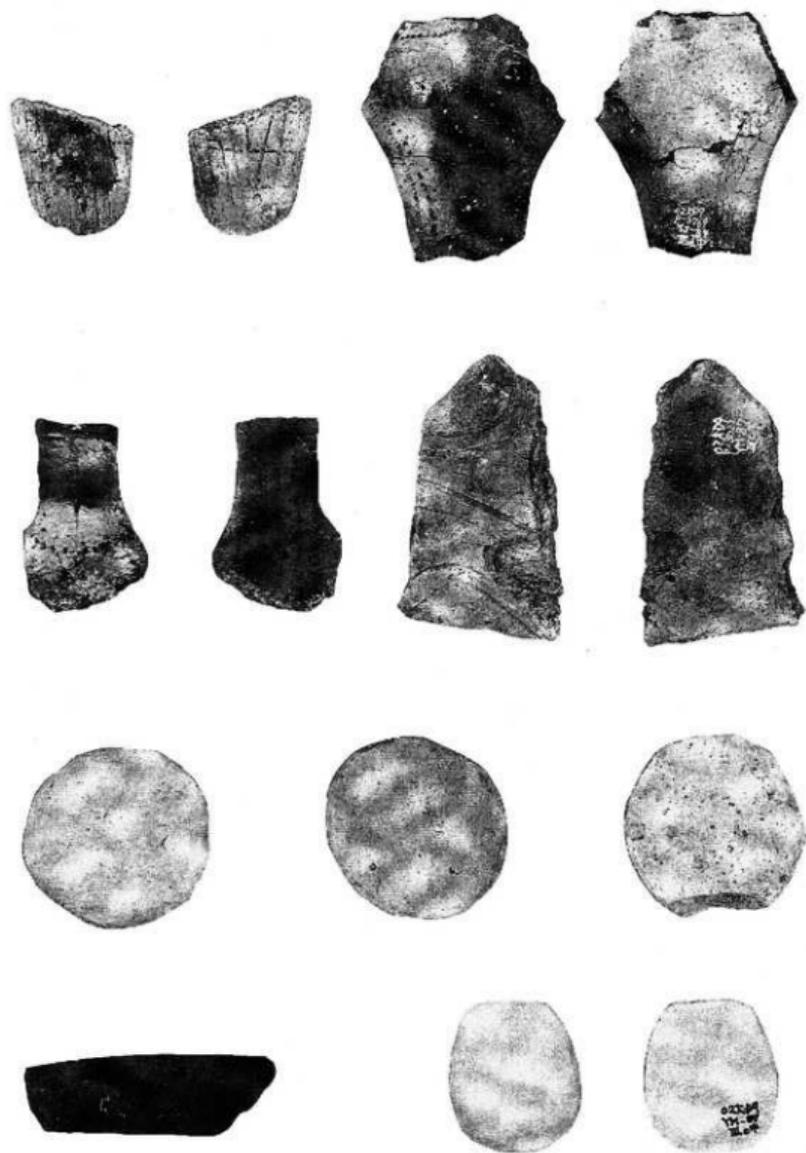
P L 38 D, 区遗址外出土土器 (7)



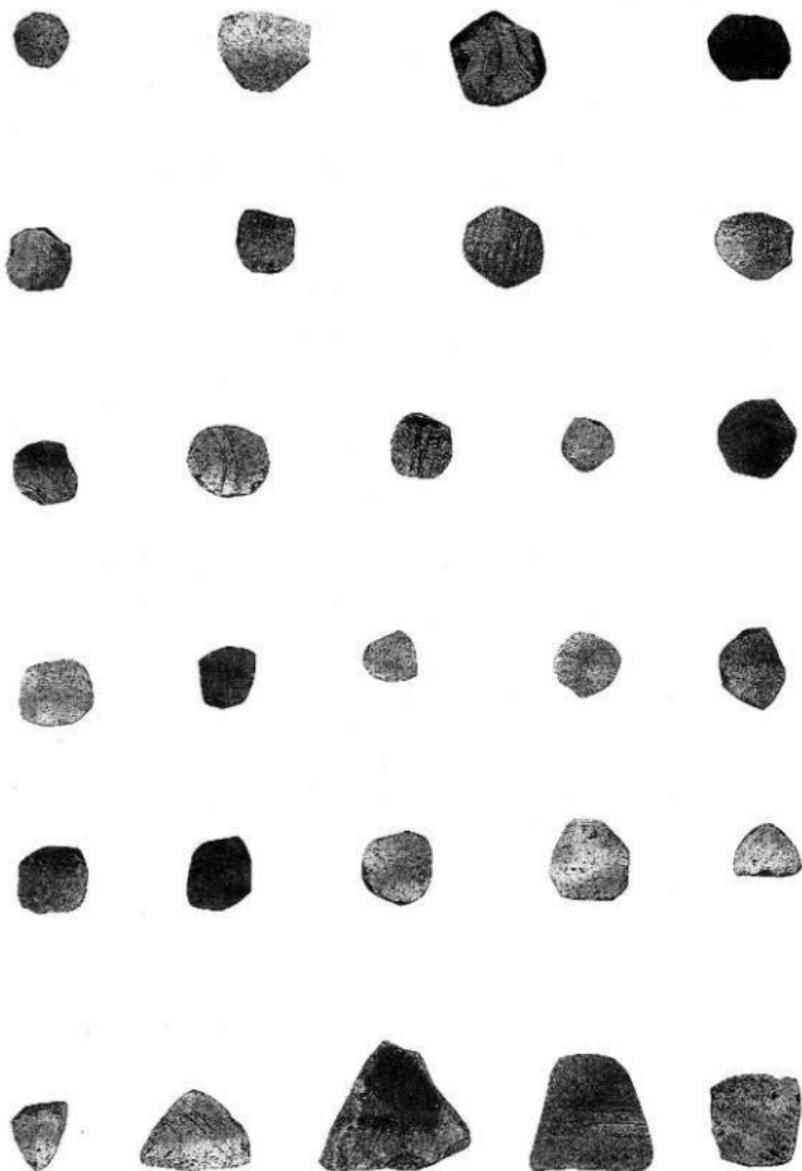
P L 39 D。区遺構外出土土器 (8)



P L 40 D。区遺構外出土土器 (9)



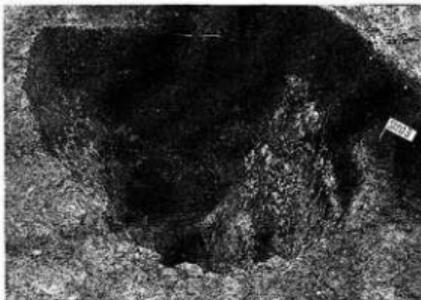
P L 41 D₂区遺構外出土土製品、石製品



P L 42 D。区遺構外出土土器片利用土製品



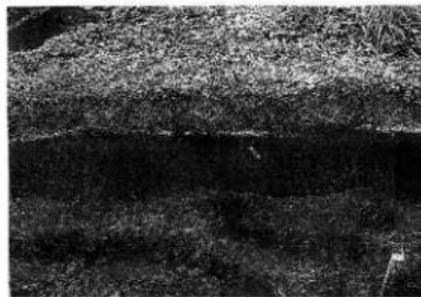
第3号T-ピット



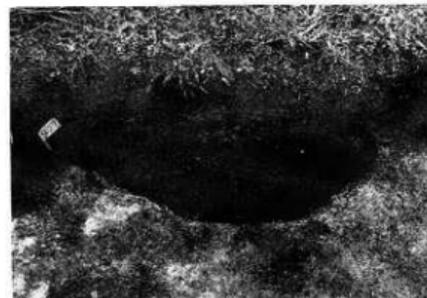
第3号T-ピット土層断面



第4号T-ピット



第2号T-ピット



第6号フラスコ状土坑



第7号フラスコ状土坑

PL43 G区フラスコ状土坑、T-ピット



f トレンチ SE→NW



h トレンチ S→N



h トレンチ N→S



i トレンチ基本層序 E→W



j トレンチ SE→NW



SK (T) 1

PL44 G₃区遺構確認状況、T-ビット



a トレンチ S→N



a トレンチ W→E



b トレンチ NW→SE



c トレンチ NW→SE

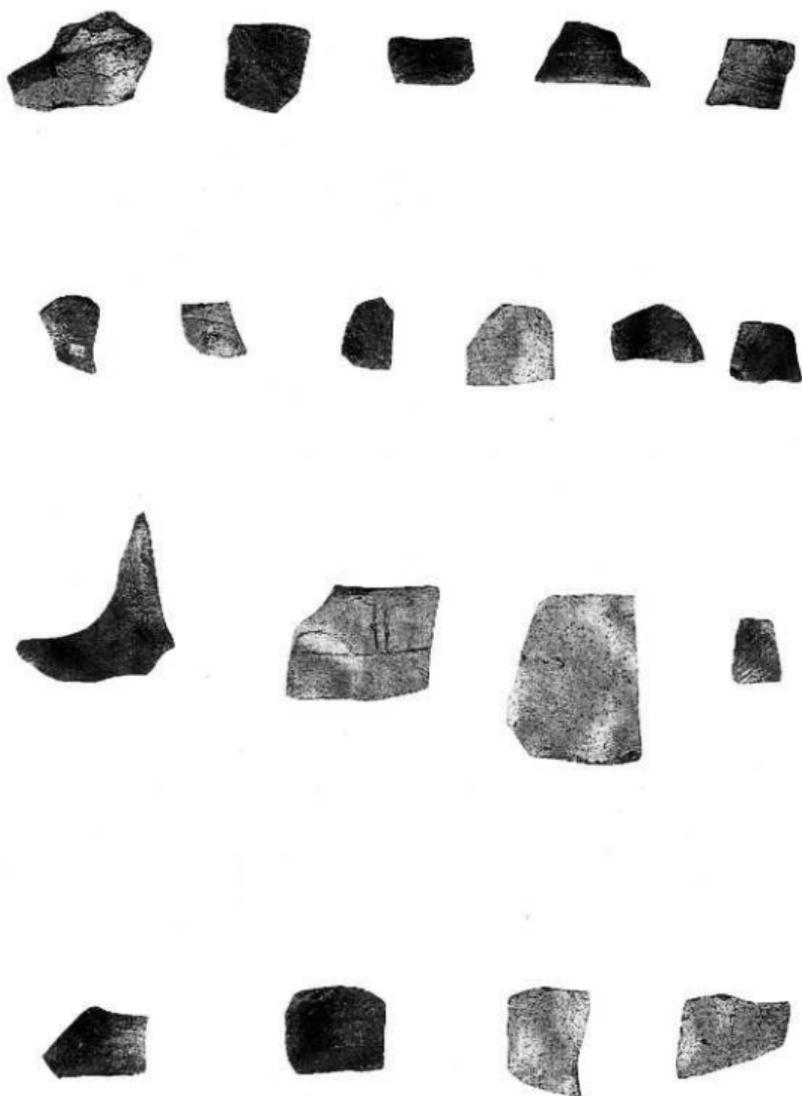


d トレンチ NW→SE

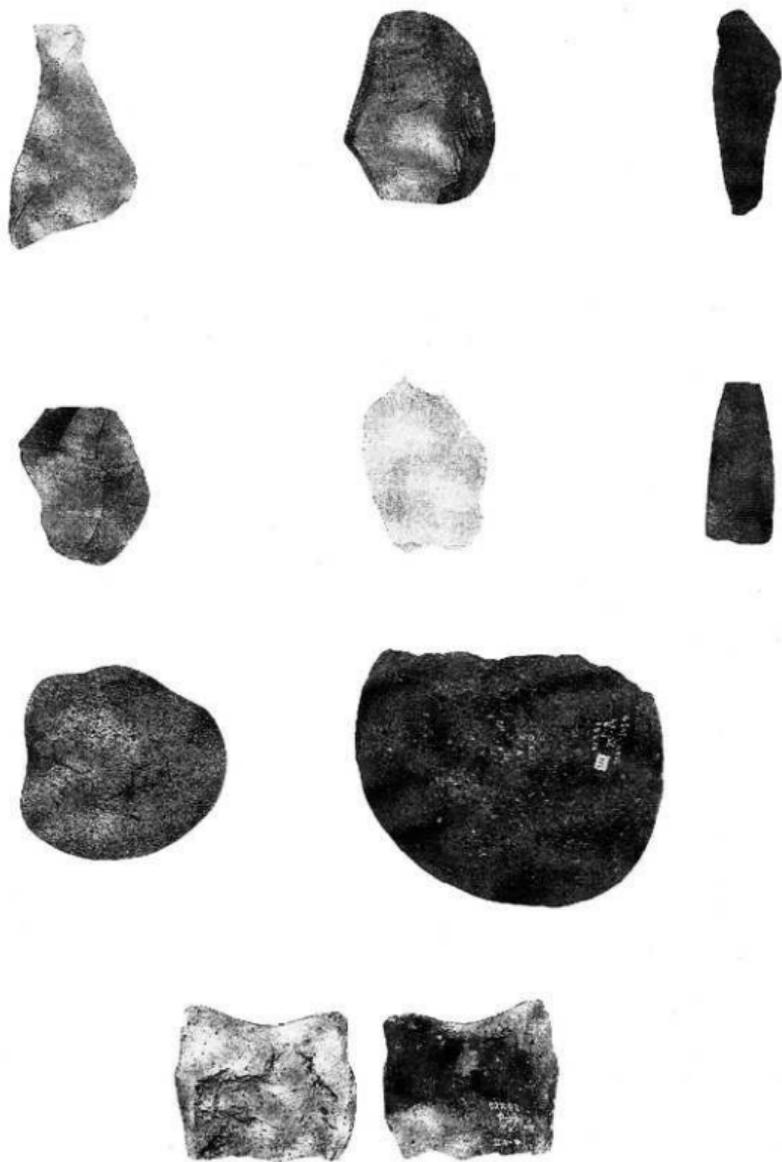


d トレンチ SE→NW

P L 45 G₃区遺構確認状況



PL46 G₃区遺構外出土土器



PL47 G₃区遺構外出土、石器、土製品

鹿角市文化財調査資料72

特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書 (19)

発行年月日 平成15年3月28日
発行者 鹿角市教育委員会
〒018-5292
秋田県鹿角市花輪字荒田4番地1
☎ 0186-30-1111
印刷所 ㈱大館孔版社
〒017-0042
秋田県大館市字観音堂316-1
